

志木市遺跡群 21

城山遺跡第62①～⑪地点

西原大塚遺跡第165地点

西原大塚遺跡第166地点

西原大塚遺跡第171地点

2014

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『志木市遺跡群 21』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成 22・23 年度に確認調査及び発掘調査を実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

今回は、そのうちの発掘調査を実施した、宅地部分の開発に伴う城山遺跡第 62 地点と西原大塚遺跡第 165・166・171 地点の調査成果を報告しました。

ここでは、今回報告する主な調査内容について触れたいと思います。

まず、城山遺跡第 62 地点については、平成 21・22 年度に第 62-1・2 地点として、道路及び駐車場建設部分に伴う発掘調査をすでに終了し、平成 23 年度には調査報告書の刊行も完了しています。今回の報告は、道路建設後の宅地部分となる 11 棟分の調査をそれぞれ第 62 ①～⑪地点として扱っています。

城山遺跡第 62 地点の全体の調査成果としては、縄文時代から近世以降の幅広い時代の遺構・遺物が検出され、特に古墳時代中・後期の住居跡が調査区全体に広がり、多くの遺物が出土しました。なお、第 62-2 地点の平安時代の 241 号住居跡から出土した、皇朝十二銭の 1 つである富壽神寶^{ふじゆじんぼう} 2 枚と鉄鎌 1 点・土錘 1 点については、「城山遺跡 241 号住居跡出土の富壽神寶ほか 2 点」の名称で、平成 24 年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができました。

次に、西原大塚遺跡第 165・166 地点については、隣接する土地であることから、同時に調査を実施することができ、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡 1 軒と溝跡 1 本が検出されています。第 171 地点からは、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡 1 軒が検出されました。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる 1 ページが追加されたことになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究や幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げる次第です。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成22・23年度に調査を実施した成果とそのうち発掘調査を実施した城山遺跡第62①～⑩地点・西原大塚遺跡第165・166・171地点について、発掘調査報告書としてまとめたものである。
2. 発掘作業・整理作業・報告書刊行作業は、志木市教育委員会が主体となり、主に国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、中世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤 均氏にご教示を頂いた。
深井恵子 第2章第5・6節の遺構、第3章第2節の遺構、第4章第2節の遺構
青木 修 第2章第4節、第7節(2)、第3章第3節(2)、第5章第1節(2)
4. 遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレーサーは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 表土剥ぎ及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
6. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 石器実測については、有限会社アルケリーサーチに委託した。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

9. 調査組織

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	白砂正明(平成20年4月～平成24年6月)
〃	尾崎健市(平成24年7月～)
教育政策部長	丸山秀幸(平成24年4～9月)
〃	菊原龍治(平成25年4月～)
教育政策部次長	丸山秀幸(平成22年4～平成24年3月)
〃	菊原龍治(平成24年10～平成25年3月)
担 当 課	生涯学習課生涯学習・文化財グループ
生涯学習課長	土岐隆一(平成21年4月～平成24年3月)
〃	谷口 敬(平成24年4月～平成25年3月)
〃	松井俊之(平成25年4月～)
生涯学習課副課長	松井俊之(平成24年4月～平成25年3月)
〃	伊藤久峰子(平成25年4月～)
生涯学習課主幹	大熊克之(～平成22年12月)
〃	松井俊之(平成23年1月～平成24年3月)
生涯学習課主査	尾形則敏(平成21年4月～)
〃	浅見千穂(平成21年4月～)
〃	武井香代子(平成24年4月～)

生涯学習課主任	松永真知子（平成18年4月～）
〃	武井香代子（～平成24年3月）
生涯学習課技師	矢田佳生（平成22年4月～）
生涯学習課主事	徳留彰紀（平成22年4月～平成25年3月）
〃	大久保 聡（平成25年4月～）
生涯学習課主事補	大久保 聡（平成24年4月～平成25年3月）
志木市文化財保護審議会	神山健吉（会長）（昭和54年4月～平成24年3月）
〃	井上國夫（会長）（平成24年4月～）
〃	井上國夫（委員）（昭和55年4月～平成24年3月）
〃	高橋長次（委員）（昭和63年4月～）
〃	高橋 豊（委員）（平成8年4月～）
〃	内田正子（委員）（平成10年4月～平成24年3月）
〃	深瀬 克（委員）（平成24年4月～）
〃	上野守嘉（委員）（平成24年4月～）

10. 発掘作業及び整理作業参加者

○発掘作業

【城山遺跡第62①～⑩地点・西原大塚遺跡第165・166地点】

調査担当者	尾形則敏・徳留彰紀
調査員	深井恵子・青木 修
調査補助員	星野恵美子・鈴木浩子
発掘協力員	江口美千子・大橋康弘・林 ゆき子・一二三英文・松浦恵子・増田千春 村田浩美
重機オペレータ	田中三二（大塚屋商店）

【西原大塚遺跡第171地点】

調査担当者	尾形則敏・徳留彰紀
調査員	青木 修
調査補助員	星野恵美子
発掘協力員	大橋康弘・一二三英文・増田千春
重機オペレータ	田中三二（大塚屋商店）

○整理作業

調査員	深井恵子・青木 修
補助調査員	星野恵美子・鈴木浩子
整理協力員	江口美千子・大橋康弘・高田美智子・林 ゆき子・一二三英文 増田千春・松浦恵子・村田浩美

11. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。

記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・㈱埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資

料館

江原 順・加藤秀之・川畑準人・隈本健介・小出輝雄・齊藤 純・齋藤欣延・
斯波 治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・
前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・山田尚友・和田晋治・渡辺邦仁

10. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りであるが、城山遺跡第62①～⑩地点については、第5表に示した。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

西原大塚遺跡第165地点／平成22年4月23日付け 教生文第4—43号

西原大塚遺跡第166地点／平成22年4月23日付け 教生文第5—44号

西原大塚遺跡第171地点／平成22年10月4日付け 教生文第5—748号

○埋蔵物の文化財認定について

西原大塚遺跡第165地点／平成22年9月30日付け 教生文第7—94号

西原大塚遺跡第166地点／平成22年9月30日付け 教生文第7—96号

西原大塚遺跡第171地点／平成23年2月10日付け 教生文第7—178号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。
7. 第10表の遺構外出土の縄文土器の記述の中で使用した色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。
8. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 H = 古墳時代～平安時代の住居跡

D = 土坑 M = 溝跡 円 = 円形周溝墓 P = ピット FP = 炉穴

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 平成22・23年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	11
第2章 城山遺跡第62地点の調査	14
第1節 遺跡の概要	14
第2節 調査の経過と各地点の調査方法	14
第3節 第62①～①地点の調査概要	24
第4節 縄文時代の遺構・遺物	26
第5節 古墳時代中・後期～平安時代の遺構・遺物	32
第6節 中世以降の遺構・遺物	81
第7節 遺構外出土遺物	90
第3章 西原大塚遺跡第165・166地点の調査	109
第1節 遺跡の概要	109
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	113
第3節 遺構外出土遺物	117
第4章 西原大塚遺跡第171地点の調査	119
第1節 遺跡の概要	119
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	120
第5章 調査のまとめ	122
第1節 城山遺跡第62地点	122
第2節 西原大塚遺跡第165・166地点	127
第3節 西原大塚遺跡第171地点	127
[付編] 自然科学分析	
城山遺跡第62②地点から出土した炭化種実	131

図 版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点—平成22年度— (1/20,000)	6
第2図	市域の地形と調査地点—平成23年度— (1/20,000)	7
第3図	城山遺跡の調査地点 (1/3,000)	15
第4図	確認調査時の遺構分布 (1/400)	16
第5図	遺構分布図 (1/200)	27
第6図	城山遺跡第62地点全体の遺構分布図 (1/200)	29
第7図	9・10号炉穴・出土遺物 (1/60・1/3)	31
第8図	697号土坑 (1/60)	32
第9図	236号住居跡 (1/60)	34
第10図	236号住居跡カマド (1/30)	35
第11図	236号住居跡遺物出土状態1 (1/60)	35
第12図	236号住居跡遺物出土状態2 (1/60)	36
第13図	236号住居跡遺物出土状態3 (1/60)	37
第14図	236号住居跡出土遺物1 (1/4)	38
第15図	236号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)	39
第16図	236号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)	40
第17図	238号住居跡 (1/60)	42
第18図	238号住居跡遺物出土状態 (1/60)	43
第19図	238号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	44
第20図	243号住居跡 (1/60)	46・47
第21図	243号住居跡遺物出土状態 (1/60)	48
第22図	243号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)	49
第23図	243号住居跡出土遺物2 (1/4)	50
第24図	248号住居跡 (1/60)	52・53
第25図	248号住居跡遺物出土状態 (1/60)	54
第26図	248号住居跡カマド (1/30)	55
第27図	248号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	55
第28図	250号住居跡・遺物出土状態1 (1/60)	56・57
第29図	250号住居跡遺物出土状態2 (1/60)	58
第30図	250号住居跡出土遺物1 (1/4)	60
第31図	250号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)	61
第32図	251号住居跡 (1/60)	62・63
第33図	251号住居跡遺物出土状態 (1/60)	64
第34図	251号住居跡出土遺物 (1/4・1/2)	65
第35図	253号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	67
第36図	253号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	68
第37図	254号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	69
第38図	254号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	70

第39図	274号住居跡(1/60)	71
第40図	274号住居跡カマド(1/30)	72
第41図	274号住居跡遺物出土状態(1/60)	73
第42図	274号住居跡出土遺物1(1/4)	74
第43図	274号住居跡出土遺物2(1/4・1/3)	75
第44図	275号住居跡(1/60)	76
第45図	275号住居跡遺物出土状態(1/60)	77
第46図	275号住居跡出土遺物(1/4)	78
第47図	276号住居跡(1/60)	79
第48図	1号円形周溝墓(1/60)	79
第49図	ピット出土遺物(1/4)	80
第50図	土坑1(1/60)	85
第51図	土坑2(1/60)	86
第52図	溝跡(1/60)	89
第53図	遺構外出土遺物1(2/3・1/3)	90
第54図	遺構外出土遺物2(1/3)	91
第55図	遺構外出土遺物3(1/3)	92
第56図	西原大塚遺跡の調査地点(1/5,000)	110
第57図	確認調査時の遺構分布(1/200)	111
第58図	遺構分布図(1/150)	112
第59図	560号住居跡・遺物出土状態(1/60)	114
第60図	560号住居跡出土遺物(1/3)	115
第61図	49号溝跡・出土遺物(1/60・1/3)	116
第62図	遺構外出土遺物(2/3・1/3)	117
第63図	確認調査時の遺構分布(1/150)	119
第64図	遺構分布図(1/150)	120
第65図	561号住居跡(1/60)	121
第66図	561号住居跡出土遺物(1/3)	121

目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成22年度調査地点一覧(1)	8
	平成22年度調査地点一覧(2)	9
第3表	平成23年度調査地点一覧(1)	9
	平成23年度調査地点一覧(2)	10
第4表	城山遺跡第62①～⑩地点の発掘調査工程表	23

第5表	城山遺跡第62①～④地点の地点別調査概要	25
第6表	住居跡出土の鉄滓・羽口集計表	41
第7表	236号住居跡出土土器一覽(1)	92
	236号住居跡出土土器一覽(2)	93
	236号住居跡出土土器一覽(3)	94
	236号住居跡出土土器一覽(4)	95
第8表	238号住居跡出土土器一覽(1)	95
	238号住居跡出土土器一覽(2)	96
第9表	243号住居跡出土土器一覽(1)	96
	243号住居跡出土土器一覽(2)	97
第10表	248号住居跡出土土器一覽	97
第11表	250号住居跡出土土器一覽(1)	98
	250号住居跡出土土器一覽(2)	99
第12表	251号住居跡出土土器一覽(1)	100
	251号住居跡出土土器一覽(2)	101
第13表	253号住居跡出土土器一覽	101
第14表	254号住居跡出土土器一覽(1)	101
	254号住居跡出土土器一覽(2)	102
第15表	274号住居跡出土土器一覽(1)	102
	274号住居跡出土土器一覽(2)	103
	274号住居跡出土土器一覽(3)	104
第16表	275号住居跡出土土器一覽	104
第17表	276号住居跡出土土器一覽	105
第18表	1号円形周溝墓出土土器一覽	105
第19表	6号ピット出土土器一覽	105
第20表	7号ピット出土土器一覽	106
第21表	8号ピット出土土器一覽	106
第22表	土坑・溝跡出土の陶磁器・土器一覽	106
第23表	遺構外出土の石器一覽	106
第24表	遺構外出土の縄文土器一覽(1)	107
	遺構外出土の縄文土器一覽(2)	108
第25表	遺構外出土の陶磁器・土器一覽	108
第26表	西原大塚遺跡第165・166地点の発掘調査工程表	111
第27表	560号住居跡出土土器一覽	118
第28表	49号溝跡出土土器一覽	118
第29表	遺構外出土の陶器一覽	118
第30表	275号住居跡から出土した炭化種実	129

図版目次

図版1 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 第62①地点調査区近景
2. 第62①地点表土剥ぎ風景
3. 第62③地点調査区近景
4. 第62③地点表土剥ぎ風景
5. 第62⑥地点調査区近景
6. 第62⑥地点表土剥ぎ風景
7. 第62⑦地点調査区近景
8. 第62⑦地点表土剥ぎ風景

図版2 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 第62⑧地点表土剥ぎ風景
2. 第62⑧地点表土剥ぎ風景
3. 第62⑨地点調査区近景
4. 第62⑨地点表土剥ぎ風景
5. 第62⑩地点調査区近景
6. 第62⑩地点表土剥ぎ風景
7. 第62⑪地点調査区近景
8. 第62⑪地点調査区整備風景

図版3 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 9号炉穴(③)
2. 10号炉穴(③)
3. 697号土坑(⑪)
4. 236号住居跡遺物出土状態(⑦)
5. 236号住居跡(⑧)
6. 236号住居跡(⑦)
- 7・8. 238号住居跡遺物出土状態(①)

図版4 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 238号住居跡白玉出土状態(①)
2. 238号住居跡(①)
3. 243号住居跡(⑪)
4. 248号住居跡(⑩)
5. 調査風景(⑪)
6. 250号住居跡(⑪)
7. 250号住居跡(⑪)
8. 250号住居跡カマド(⑪)

図版5 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 251号住居跡(⑨)
2. 251号住居跡(⑧)
3. 253号住居跡(③)
4. 発掘調査風景(⑩)
5. 254号住居跡遺物出土状態(⑩)
6. 254号住居跡貯蔵穴(⑩)
7. 254号住居跡(⑪)
8. 254号住居跡(⑩)

図版6 城山遺跡第62①～⑪地点

- 1～3. 274号住居跡遺物出土状態(⑩)
- 4・5. 274号住居跡炭化材出土状態(⑩)
6. 274号住居跡カマド遺物出土状態(⑩)
7. 274号住居跡貯蔵穴(⑩)
8. 274号住居跡カマド掘り方(⑩)

図版7 城山遺跡第62①～⑪地点

- 1・2. 274号住居跡(⑩)
- 3～5. 275号住居跡遺物出土状態(⑩)
6. 275号住居跡(⑩)
7. 275号住居跡(⑨)
8. 276号住居跡(⑩)

図版8 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 1号円形周溝墓 南から(⑧)
2. 1号円形周溝墓 北から(⑧)
3. 6号ピット(③)
4. 687号土坑(⑥)
5. 688号土坑(⑥)
6. 689号土坑・7号ピット(⑥)
7. 690号土坑(③)
8. 691号土坑(③)

図版9 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 692号土坑(③)
2. 693・694号土坑・49号溝跡(⑦)
3. 695号土坑(⑪)
4. 696号土坑(⑪)
5. 811号土坑(⑩)
6. 812号土坑(①)
7. 646・813・647・814号土坑(①)
8. 815号土坑(⑧)

図版10 城山遺跡第62①～⑪地点

1. 816・817・818号土坑(⑧)
2. 調査風景(⑥)
3. 50号溝跡 東から(⑥)
4. 50号溝跡 南から(⑥)
5. 51号溝跡 西から(⑥)
6. 51号溝跡 北から(⑥)

7. 51号溝跡 南から (⑥)
- 図版11 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 52号溝跡 北から (⑥) 2. 52号溝跡 東から (⑥) 3. 調査風景 (③)
4. 253号住居跡付近ピット (③) 5. 調査区北側ピット (③)
6. 274号住居跡付近ピット (⑩) 7. 調査区全景 (⑧)
- 図版12 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 9号炉穴出土遺物 2. 236号住居跡出土遺物 1
- 図版13 城山遺跡第62①～⑩地点
236号住居跡出土遺物 2
- 図版14 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 236号住居跡出土遺物 3 2. 238号住居跡出土遺物
- 図版15 城山遺跡第62①～⑩地点
243号住居跡出土遺物
- 図版16 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 248号住居跡出土遺物 2. 250号住居跡出土遺物 1
- 図版17 城山遺跡第62①～⑩地点
250号住居跡出土遺物 2
- 図版18 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 250号住居跡出土遺物 3 2. 251号住居跡出土遺物
- 図版19 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 253号住居跡出土遺物 2. 254号住居跡出土遺物 3. 274号住居跡出土遺物 1
- 図版20 城山遺跡第62①～⑩地点
274号住居跡出土遺物 2
- 図版21 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 275号住居跡出土遺物 2. 276号住居跡出土遺物 3. 1号円形周溝墓出土遺物
4. ピット出土遺物
- 図版22 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 土坑・溝跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物 1
- 図版23 城山遺跡第62①～⑩地点
1. 遺構外出土遺物 2 2. 275号住居跡出土炭化種実
- 図版24 西原大塚遺跡第165・166地点
1. 調査区近景 2. 調査区整備風景 3. 560号住居跡 4. 560号住居跡炉跡 A
5. 560号住居跡炉跡 B 6. 49号溝跡遺物出土状態 7. 49号溝跡 西から
8. 49号溝跡 東から
- 図版25 西原大塚遺跡第165・166地点
1. 560号住居跡出土遺物 2. 49号溝跡出土遺物 3. 遺構外出土遺物
- 図版26 西原大塚遺跡第171地点
1. 表土剥ぎ風景 2・3. 561号住居跡 4. 561号住居跡貯蔵穴
5. 561号住居跡赤色砂利層検出状況 6. 561号住居跡炉跡 7. 561号住居跡 P 1
8. 561号住居跡出土遺物

第1章 平成22・23年度の調査成果

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万3千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	81,310㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	52,980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット部等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム探掘溝、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	10,300㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		489,570㎡					

平成25年12月27日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡(12)、宿遺跡(14)、関根兵庫館跡(13)のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳(6)、城山貝塚(9)を加えた14遺跡である(第1図)。

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2カ所、平成7年(1995)度には1カ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

また、城山遺跡では、平成13(2001)年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層のⅣ層上部とⅦ層の2カ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点(道路・駐車場部分)でも1カ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。

平成22(2010)年に発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5カ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層のⅦ層を中心とする3カ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

最新では、平成23(2011)年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点2カ所、礫群9基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東

側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から燃系文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が埴穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヵ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。最新資料では、今年度（平成25年度）に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が590軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷

式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品1点と西原大塚遺跡17号方形周溝墓から出土した、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的 新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円形で2カ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑

釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶とくじゆじんぼうが2枚とその近くからは鉄鎌1点と土鎌1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡として100基を超える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器環が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雜記』（註2）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、『大塚十玉坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板磚と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧よろいの札すねである鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀



第1図 市域の地形と調査地点—平成22年度— (1/20,000)



第2図 市域の地形と調査地点—平成23年度— (1/20,000)

第1章 平成22・23年度の調査成果

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m ²)	確認調査日	発掘期間	備考
1	城山遺跡 第62㉔地点	柏町3丁目2663-1	個人住宅建設	(120.80)	-	7.2~7.22	発掘調査面積 30.00m ² 盛土保存適用 73.04m ² 埋戻し 7月22日
2	城山遺跡 第62㉔地点	柏町3丁目2663-8	個人住宅建設	(119.88)	-	11.17~26	発掘調査面積 21.18m ² 盛土保存適用 76.94m ² 埋戻し 11月29日
3	城山遺跡 第62㉔地点	柏町3丁目2663-23	個人住宅建設	(131.20)	-	8.23~26	発掘調査面積 10.00m ² 盛土保存適用 88.40m ² 埋戻し 8月30日
4	城山遺跡 第62㉔地点	柏町3丁目2663-22	個人住宅建設	(92.48)	-	6.17~7.22	発掘調査面積 72.76m ² 埋戻し 7月22・23日
5	城山遺跡 第63地点	柏町3丁目2655-4、-5	共同住宅建設	(974.89)	(H22 1.26~27)	3.8~5.7	発掘調査面積 638.00m ² 盛土保存適用 336.89m ² 埋戻し 12月9日
6	西原大塚遺跡 第164地点	幸町3丁目7316、7317	個人住宅建設	101.11	4.13		盛土保存適用
7	西原大塚遺跡 第165地点	幸町3丁目7486	個人住宅建設	(146.00)	(H22.3.30)	4.14~4.26	発掘調査面積 110.38m ² 盛土保存適用 35.62m ² 埋戻し 4月30日
8	西原大塚遺跡 第166地点	幸町3丁目7487	個人住宅建設	(166.00)			発掘調査面積 126.63m ² 盛土保存適用 39.37m ² 埋戻し 4月30日
9	西原大塚遺跡 第167地点	幸町2丁目6257	農業用物置建設	24.54	4.28		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
10	西原大塚遺跡 第168地点	幸町3丁目7533	緑地植栽 ベンチ工事	379.61	-		盛土保存適用
11	田子山遺跡 第115地点	本町2丁目1707-5・12・ 16・27	個人住宅建設	97.82	5.25		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
12	田子山遺跡 第116地点	本町2丁目1746-8・19	個人住宅建設	81.20	5.7		盛土保存適用
13	城山遺跡 第66地点	柏町3丁目2665-16	分譲住宅建設	(101.09)	(H22.1.28)		盛土保存適用
14	城山遺跡 第67地点	柏町3丁目2665-17	分譲住宅建設	(104.06)		盛土保存適用	
15	城山遺跡 第68地点	柏町3丁目2665-15	分譲住宅建設	(101.51)		盛土保存適用	
16	田子山遺跡 第117地点	本町3丁目1818-13	分譲住宅建設	100.14	6.28		遺跡外 遺構・遺物は検出されなかった
17	田子山遺跡 第118地点	本町2丁目1745	個人住宅建設	93.33	6.28		盛土保存適用
18	中野遺跡 第73地点	柏町2丁目1210-1	分譲住宅建設	100.01	6.29		盛土保存適用
19	中道遺跡 第68地点	柏町5丁目2981-2の一部	分譲住宅建設	556.40	7.26~27		盛土保存適用
20	市場裏遺跡 第14地点	本町1丁目1576-6	個人住宅建設	(66.91)	(H21. 12.3~4)		盛土保存適用
21	市場裏遺跡 第15地点	本町1丁目1576-7	個人住宅建設	(66.91)	(H21. 12.3~4)		盛土保存適用
22	市場裏遺跡 第16地点	本町1丁目1576-8	分譲住宅建設	(71.35)	(H21. 12.3~4)		盛土保存適用
23	市場裏遺跡 第17地点	本町1丁目1576-9	個人住宅建設	(70.74)	(H21. 12.3~4)		盛土保存適用

第2表 平成22年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m ²)	確認調査日	発掘期間	備考
24	市場裏遺跡第18地点	本町1丁目1576-10	分譲住宅建設	(87.39)	H21.12.3・4		盛土保存適用
25	大原遺跡第6地点	本町4丁目1015-18	個人住宅建設	116.15	8.20		慎重工事遺構・遺物は検出されなかった
26	西原大塚遺跡第169地点	幸町4丁目8132の一部	共同住宅建設	302.94	9.7	10.4～13	発掘調査面積 90.00m ² 埋戻し 10月13日
27	西原大塚遺跡第170地点	幸町3丁目7136	個人住宅建設	149.84	9.9		慎重工事遺構・遺物は検出されなかった
28	西原大塚遺跡第171地点	幸町4丁目8137	個人住宅建設	100.12	9.22	10.5～12	埋戻し 10月12日
29	田子山遺跡第119地点	本町2丁目1635-1	分譲住宅建設	166.00	11.12		遺跡外遺構・遺物は検出されなかった
30	西原大塚遺跡第172地点	幸町3丁目7255～7257	分譲住宅建設	451.32	11.15・16		確認調査のみ
31	西原大塚遺跡第172㉔地点	幸町3丁目7255、7256、7257の各一部	個人住宅建設	(119.73)	—	H23.3.11～29	発掘調査面積 31.55m ² (駐車場) 盛土保存適用 88.18m ² (宅地)
32	中道遺跡第69地点	柏町5丁目2950-65の一部	駐車場建設	73.15	11.24		慎重工事遺構・遺物は検出されなかった
33	中野遺跡第74地点	柏町1丁目1471-34	個人住宅建設	100.85	11.24		遺跡外遺構・遺物は検出されなかった
34	城山遺跡第69地点	柏町3丁目2612-2・13・14	分譲住宅建設	405.00	12.6		慎重工事遺構・遺物は検出されなかった
35	城山遺跡第70地点	柏町3丁目2618-8	個人住宅建設	101.16	12.6・7		盛土保存適用
36	田子山遺跡第121地点	本町2丁目1680-2	分譲住宅建設	145.73	H23.3・9		盛土保存適用
37	城山遺跡第71地点	柏町3丁目2613-1・2・6、2611、2603の一部	分譲住宅建設	2,858.75	3.1～9		平成22年度は確認調査のみ
38	田子山遺跡第120地点	本町3丁目1844-5、1845-6	個人住宅建設	179.16	3.1		遺跡外遺構・遺物は検出されなかった
39	城山遺跡第72地点	柏町3丁目2655-1	共同住宅建設	487.38	3.16・17		平成22年度は確認調査のみ
合 計				7,171.71			

第2表 平成22年度調査地点一覧(2)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m ²)	確認調査日	発掘期間	備考
1	西原大塚遺跡第172㉔地点	幸町3丁目7255-4	駐車場部分	(105.79)	H22.11.15-16	7.14～8.23	埋戻し 8月18日～23日
2	西原大塚遺跡第172㉔地点	幸町3丁目7255-1	個人住宅建設	(109.59)	H22.11.15-16	6.8～8.23	埋戻し 8月18日～23日
3	西原大塚遺跡第172㉔地点	幸町3丁目7255-2	個人住宅建設	(116.20)	H22.11.15-16	6.8～8.23	埋戻し 8月18日～23日
4	城山遺跡第71地点	柏町3丁目2613-1・2・6、2611、2603の一部	分譲住宅建設	(2,858.75)	H22.3.1～9	8.8～12.22	民間会社へ支援委託 29年継続事業/平成23年度:発掘作業/平成24年度:整理作業・報告書刊行作業
5	城山遺跡第72地点	柏町3丁目2655-1	共同住宅建設	(629.39)	H22.3.16・17	6.6～7.15	民間会社へ支援委託/平成23年度中にすべての事業を完了

第3表 平成23年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m ²)	確認調査日	発掘期間	備 考
6	田子山遺跡 第121地点	本町2丁目1680-2	分譲住宅建設	(145.73)	H22.3.9	9.12~9.28	整理作業・報告書刊行作業は民間 会社へ委託
7	田子山遺跡 第122地点	本町3丁目10-12	分譲住宅建設	198.35	H23.4.11		盛土保存適用
8	田子山遺跡 第123地点	本町3丁目1825-2	個人住宅建設	90.22	4.11		盛土保存適用
9	西原大塚遺跡 第173地点	幸町3丁目7412の一部	分譲住宅建設	202.22	4.11		盛土保存適用
10	中野遺跡 第70地点	柏町5丁目2979-1	個人住宅建設	150.64	4.18		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
11	西原大塚遺跡 第174地点	幸町3丁目7204~7206番	駐車場造成工事	1211.47	6.13・14		盛土保存適用
12	西原大塚遺跡 第174①地点	幸町3丁目7204-3、4、8 ~10	宅地造成	(627.54)	—	10.19~ H24.1.13	民間会社へ支援委託 平成23年度：発掘作業／平成24 年度：整理作業・報告書刊行作業
13	西原大塚遺跡 第174②地点	幸町3丁目7204-7	個人住宅建設	(100.09)	—	11.30~ 12.27	12月27日埋戻し
14	西原大塚遺跡 第174③地点	幸町3丁目7204-6	個人住宅建設	(100.09)	—	10.1~ 11.30	11月30日埋戻し
15	西原大塚遺跡 第174④地点	幸町3丁目7204-5	個人住宅建設	(100.10)	—	H24. 1.5~1.13	H24.1月13日埋戻し
16	西原大塚遺跡 第175地点	幸町3丁目7135番、 7136番3	個人住宅建設	165.29	7.15		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
17	中野遺跡 第71地点	柏町5丁目2944-8	分譲住宅建設	85.96	9.14		盛土保存適用
18	西原大塚遺跡 第176地点	幸町3丁目7136番1	事務所併用住宅	205.79	9.15		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
19	西原大塚遺跡 第177地点	幸町3丁目7144、7146の 各一部・7147	共同住宅建設	817.96	9.22・27		慎重工事 遺構・遺物は検出されなかった
20	中野遺跡 第75地点	柏町1丁目1516-11	個人住宅建設	111.56	12.22		盛土保存適用
21	西原大塚遺跡 第178地点	幸町3丁目9-52	放射性物質 除染作業	1.00	—		西原保育園内 除染日11月24日
22	城山遺跡 第73地点	柏町3丁目2608-1	放射性物質 除染作業	4.50	—		志木三小内 除染日12月8日
23	城山遺跡 第74地点	柏町3丁目2648-30	放射性物質 除染作業	0.60	—		城ふれあい公園内 除染日12月15日
24	城山遺跡 第75地点	柏町3丁目2648-18	放射性物質 除染作業	0.70	—		城山児童遊園地内 除染日12月15日
25	中野遺跡 第76地点	柏町1丁目1513-1の一部 (20-19)	放射性物質 除染作業	0.30	—		埋蔵文化財保管センター内 除染日H24.1月18日
26	城山遺跡 第76地点	柏町3丁目2番1号	防災用トイレ 設置	55.00	H24.1.27		平成23年度は確認調査のみ
27	西原大塚遺跡 第179地点	幸町3丁目7415~7417	共同住宅建設	2,445.98	H24. 3.7~14		平成23年度は確認調査のみ
合 計				5,747.54			

第3表 平成23年度調査地点一覧(2)

に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡^{（しょうだん遺跡）}は、『館村日記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム探掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、探掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 調査に至る経緯

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木―池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会で文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要がある。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況

の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数は逆に過去最高の9件にのぼり増加したという現象が生じた。これは、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したのと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見せている。これは、平成5年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業が開始され、これに伴い発掘調査が実施されているが、工事の完了後に周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大することが予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、平成15年1月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・氷川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図ったものであった。

平成20年度以降は、今まで実施してきた「遺跡調査会方式」を廃止し、新規事業から「市直営方式」の導入を開始した。つまり、志木市では、個人及び民間による各種開発に伴う発掘調査（個人住宅建設を除く）については、今まで志木市遺跡調査会を発足させ、実施してきたが、職員の派遣や手続法などによる問題点を考慮し、平成20年度以降の新規事業からは、市直営による受託事業として実施することになった。

最後に本報告で掲載する平成22・23年度の調査内訳について以下にまとめることにする。

平成22年度は、全保存事業対象の件数は39件、そのうち確認調査を実施した件数は22件、発掘調査を実施した件数は10件、盛土保存を適用した件数は23件であった。工事内容の内訳件数は、個人専用住宅20件、分譲住宅13件、共同住宅3件、駐車場1件、農業用物置1件、緑地植栽ベンチ工事1件である。

平成23年度は、全保存事業対象の件数は27件、そのうち確認調査を実施した件数は12件、発掘調査を実施した件数は10件、盛土保存を適用したのは6件であった。工事内容の内訳件数は、個人専用住宅9件、分譲住宅5件、共同住宅3件、事務所併用住宅1件、宅地造成1件、駐車場2件、防災用トイレ工事1件、放射性物質除線作業5件である。

【註】

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヵ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの譯説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 城山遺跡第62地点の調査

第1節 遺跡の概要

ここでは今回本書で報告する城山遺跡について簡単に概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、最近では、平成23（2012）年度に分譲住宅建設に伴う第71地点、共同住宅に伴う第72地点の発掘調査が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況となっている。

本遺跡は、今までに82地点（平成25年12月27日現在）の調査が実施され、旧石器時代、縄文時代草創期～晩期、弥生時代期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

第2節 調査の経過と各地点の調査方法

（1）調査に至る経緯

城山遺跡第62地点の調査地点名については、当初の開発主体者の株式会社ミヤケン（代表取締役宮原本一 以下省略）との事前協議により、第62地点全体の開発事業の工期的な理由から、それぞれの開発内容による1件を別地点名と呼称することとした。本地点の調査では、平成20・21年度に調査を実施した第62地点は、道路・駐車場部分であり、その際には第1期工事・第2期工事と分け、第62-1・2地点と便宜上使用している。

今回は、この道路部分の建設工事後に計画された、各宅地部分の開発を対象とするものであり、全11棟分の個人住宅及び分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財保存事業である。これらの11棟分については、埋蔵文化財発掘届の提出後に各開発主体者と平成20年度に実施した埋蔵文化財確認調査の基礎データを基本にすべて事前協議を実施し、保存対策について検討してもらうことで対応した。

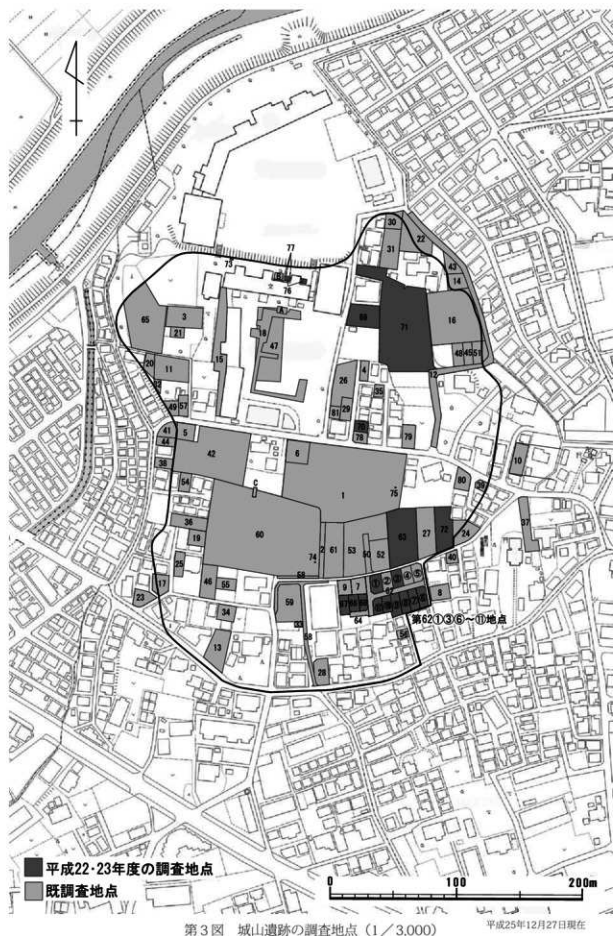
その結果、開発計画の1～11区画の全11棟分の開発事業について、それぞれ第62①～⑪地点と対応させ、呼称することとした（第5図）。

（2）各地点の経過と調査方法

第62①～⑪地点の調査経過とその調査方法について以下に説明することにする。

1. 第62①地点（＝1区画）の発掘調査

平成22年6月24日、教育委員会は開発主体者と確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、宅地部分については、



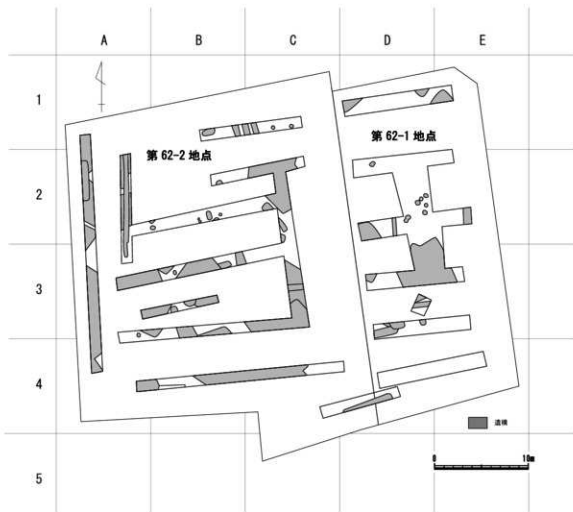
第3図 城山遺跡の調査地点 (1/3,000)

文化財保護層30cm以上を確保する条件で、盛土保存を適用することとし、駐車場部分(30㎡)については、文化財保護層が確保できないため、発掘調査を実施することに決定した。

翌日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、7月2日付けで、埋蔵文化財発掘届等・埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、7月2日から発掘調査を開始した。

- 7月2日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、調査区外への搬出作業を行わずに、調査区内南側の宅地部分を残土置場として確保することで対処することにした。本日中にすべての表土剥ぎ作業を終了する。
- 8日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。
その結果、調査区内には、古墳時代後期の住居跡1軒(238H)、中世以降の土坑5基(646・647・812～814D)などが分布することが判明した。
本日中には、238H、646・812Dの精査を開始する。238Hの時期は6世紀末葉に位置するものと思われる。
- 9～16日 238Hの精査を行う。16日にはセクションA-A'の写真撮影・実測を行う。白玉4



第4図 確認調査時の遺構分布(1/400)

点が出土した。646 Dの周辺の切り合い関係を確認しながら、精査を行う。14日には、647・813・814 Dと確定し、写真撮影・実測を終了する。812 Dは14日に写真撮影・実測を終了した。

- 20日 238 Hに伴う柱穴（P 1～5）の半截を行い、写真撮影・断面図を終了し、完掘する。その後、平板測量を開始する。
- 21日 238 Hのすべての精査を終了する。
- 22日 器材片付けを行い、重機による埋戻し作業を開始し、本日中に終了する。

2. 第62㉔地点（＝2区画）の発掘調査

本地点については、当初の開発主体者の株式会社ミヤケンからの埋蔵文化財発掘届の受理の際に文化財保護層を確保する条件で、盛土保存を適用することに決定したため、新たに発掘調査を実施することはなかった。

平成21年10月29日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、11月9日付けで、埋蔵文化財発掘届等を埼玉県教育委員会に提出した。

3. 第62㉕地点（＝3区画）の発掘調査

平成21年10月22日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、翌日23日、開発主体者と確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を現地にて行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、また、今回は敷地全面について、現況G Lから深さ1 mほどの表層改良工事を計画しているということから、工事内容が埋蔵文化財に多大な影響を与えることが確実なため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、10月26日付けで、埋蔵文化財発掘届等・埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、11月4日から発掘調査を開始した。

- 11月4日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、敷地内に置場を確保できないため、搬出作業を行い、本日中にその作業を終了する。器材搬入についても本日中に終了した。
- 5日 人員導入による発掘調査を開始した。まず、テント設営などの調査準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。
その結果、調査区の西側に第62-2地点で調査を実施した、古墳時代後期の住居跡1軒（253 H）の北東部分が検出され、さらに調査区内には、縄文時代早期の炉穴2基（9・10 F P）、中世以降の土坑3基（690～692 D）などが分布することが判明した。本日中には、690・691 Dの精査を開始し、690 Dは完掘し、写真撮影・実測を完了する。
- 9日 253 Hの精査を開始する。深さ10 cmほどで床面が確認できたため、本日中には、完掘し、写真撮影・実測を完了する。691 Dについては、完掘し、写真撮影・実測を完了する。また、692の精査を開始し、完掘し、写真撮影・実測を完了する。9・10 F Pの精査を開始する。なお、本日から同遺跡第62㉔地点の表土剥ぎ作業を開始し、

一部併行して精査を行うこととする。

- 10日 9F Pを完掘し、写真撮影・実測を完了し、すべての調査を終了する。
13日 重機による埋戻し作業を開始し、本日中午に作業を終了する。

4. 第62④地点（＝4区画）の発掘調査

本地点については、当初の開発主体者の株式会社ミヤケンからの埋蔵文化財発掘届の受理の際に文化財保護層を確保する条件で、盛土保存を適用することに決定したため、新たに発掘調査を実施することはなかった。

平成21年6月5日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、6月15日付で、埋蔵文化財発掘届等を埼玉県教育委員会に提出した。

5. 第62⑤地点（＝5区画）の発掘調査

本地点については、当初の開発主体者の株式会社ミヤケンからの埋蔵文化財発掘届の受理の際に文化財保護層を確保する条件で、盛土保存を適用することに決定したため、新たに発掘調査を実施することはなかった。

平成21年6月5日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、6月15日付で、埋蔵文化財発掘届等を埼玉県教育委員会に提出した。

6. 第62⑥地点（＝6区画）の発掘調査

平成21年7月3日、教育委員会は開発主体者と確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、宅地部分及び駐車場部分について、文化財保護層が確保できないため、発掘調査を実施することに決定した。

8月1日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、8月26日付で、埋蔵文化財発掘届等・埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、9月3日から発掘調査を開始した。

- 9月3日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、まだ建設前である隣地（7区画）を借用し、残土置場として対処することができた。
- 4日 引き続き重機による表土剥ぎ作業を行う。また、本日から人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。
- その結果、中世以降の土坑3基（687～689D）・溝跡3本（50～52M）などが分布していることが判明した。本日中午には、50・51Mの精査を開始する。
- 7日 50Mの平板測量を開始する。51Mは精査の続き。
- 8日 50・51Mの写真撮影を行い、平板測量・セクション図などの実測を終了する。687・688・689D・52Mの精査を開始する。687・688Dはベルトを残し、掘り終了。その後、断面の写真撮影・実測・平板測量を終了する。
- 9日 687～689Dは完掘し、写真撮影を終了する。52Mは平板測量を終了し、写真撮影を終了する。本日をもって、すべての精査を完了する。併行して、器材の片付け、搬

出作業を行う。

10日 重機による埋戻し作業を開始し、本日中に終了する。

7. 第62㉔地点 (= 7区画) の発掘調査

平成21年10月30日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理した。その際に、開発主体者と埋蔵文化財の保存措置についての打合せを行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、特に駐車場部分及び駐車場敷設に伴う宅地の深基礎部分については、文化財保護層を確保することができないため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、11月6日付けで埋蔵文化財発掘届等を11月9日付けで埋蔵文化財発掘調査の通知をそれぞれ埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、11月9日から発掘調査を開始した。

- 11月9日 午後より重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土置場は、調査区南側の盛土保存を適用した建物部分に確保することができた。本日中にその作業を終了する。なお、本日は、同遺跡第62㉔地点の精査がすでに開始していたため、器材はその地点のものを使用することにした。
- 10日 人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。その結果、同遺跡第62-1地点で調査を実施した、古墳時代後期の住居跡1軒(236H)の南東部分が検出され、さらに調査区内には、中世以降の土坑2基(693・694D)・溝跡(49M)が分布することが判明した。本日中には、693・694D・49M・236Hの精査を開始する。
- 11日 雨天にて中止。
- 12日 雨天のため、午後から調査を実施する。
693・694D・49Mは完掘し、写真撮影・実測を終了する。236Hは遺物出土状態の写真撮影を行い、その後遺物を取り上げる。
- 13日 236Hの遺構写真撮影を行う。その後、平板測量・実測を終了し、すべての遺構の精査を完了する。併行して、器材の片付け及び搬出作業を行う。
本地点については、埋戻し作業なし。

8. 第62㉕地点 (= 8区画) の発掘調査

平成22年9月30日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、10月22日、開発主体者と確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、特に駐車場部分及び駐車場敷設に伴う宅地の深基礎部分については、文化財保護層を確保することができないため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、11月1日付けで埋蔵文化財発掘届等及び埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、11月16日から発掘調査を開始した。

- 11月16日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土置場は、調査区南側の盛土保存を適用した建物部分に確保することができた。本日中にその作業を終了する。

- 17日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。その結果、調査区内には、第62-2地点で調査を実施した、古墳時代中・後期の住居跡2軒（236・251H）、中世以降の土坑4軒（815～818D）・溝跡1本（49M）などが分布することが判明した。なお、816・817Dに切られる溝状の遺構は、古墳時代後期の円形周溝墓（1円）の可能性がある。本日中には、815Dの精査を開始する。
- 18日 816～818Dの精査を開始、完掘後、平板測量を行う。815Dのセクション図の作成を終了する。
- 19日 816～818Dのセクション図の作成を終了する。完掘後平板測量を行う。815Dはセクション図の作成後、完掘し、写真撮影を終了する。また、236Hの精査を開始し、出土遺物を平板測量し、一部取り上げる。
- 22日 816～818Dのセクション図の作成を終了する。その後完掘し平板測量を行う。815Dはセクション図の作成後、完掘し、写真撮影を終了する。また、236・251Hの精査を開始し、236Hは出土遺物を平板測量し、一部取り上げる。その後、251Hは完掘終了。
- 24日 816～818Dのセクション図の作成を終了する。完掘後平板測量を行う。815Dはセクション図の作成後、完掘し、写真撮影を終了する。また、236・251Hの精査を開始し、236Hは出土遺物を平板測量し、一部取り上げる。251Hは完掘終了。
- 25日 236Hはセクションの写真撮影後、実測を終了し、その後ベルトをはずし、支柱穴P4の半載と壁溝の掘りを終了する。1円はセクションの写真撮影後、実測を終了し、その後遺物出土状態の写真撮影を行い、平板測量によりドットで落とし、取り上げる。
- 26日 236Hと1円の掘り終了後、全体写真撮影を行う。その後、236Hの平板測量、エレベーション・セクション図の作成を行い、掘り方の精査を行う。1円は平板測量を終了し、すべての遺構の精査を完了する。併行して、器材の片付け及び搬出作業を完了する。
- 29日 重機による埋戻し作業を開始し、本日中に終了する。

9. 第62㊦地点（＝9区画）の発掘調査

平成22年8月9日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理した。その際に、開発主体者と埋蔵文化財の保存措置についての打合せを行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、特に当初計画での駐車場の位置の変更に伴い、その部分については、文化財保護層を確保することができないため、発掘調査を実施することに決定した。

教育委員会は、同日9日付けで埋蔵文化財発掘届等を8月16日付けで埋蔵文化財発掘調査の通知をそれぞれ埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、8月23日から発掘調査を開始した。

- 8月23日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土置場は、調査区南側の盛土保存を適用した建物部分に確保することができた。午前中にその作業を終了する。

- 24日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。その結果、調査区内には、第62-2地点で調査を実施した、古墳時代中期の住居跡1軒(251H)と第62㊸地点で調査を実施した、古墳時代後期の住居跡1軒(275H)が分布することが判明した。本日中には、251Hの精査を開始する
- 25日 275Hの精査を開始する。住居北東コーナーのみの調査であったため、途中、遺物出土状態を平板測量によりドットに落とし、遺物を取り上げる。本日中には完掘し、251Hの遺物出土状態と同時に写真撮影を終了する。251Hについては、P1の半截を行い、セクションの写真撮影・実測を完了し、その後、275Hの遺構写真と同時に遺物出土状態及び焼土検出範囲の写真撮影を完了する。
- 26日 251Hの焼土検出範囲を半截し、写真撮影及び実測を行う。また、エレベーション図の作成終了後、275Hと同時に平板測量を行い、その後、全体写真撮影を行う。251Hについては、その後、掘り方の精査を行い、すべての精査を完了する。併行して、器材の片付け及び搬出作業を行う。
- 30日 重機による埋戻し作業を開始し、午前中で終了する。

10. 第62㊸地点(=10区画)の発掘調査

平成22年4月20日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理した。その際に、開発主体者と埋蔵文化財の保存措置についての打合せを行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、宅地部分及び駐車場部分について、文化財保護層を確保することができないため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、6月16日付けで埋蔵文化財発掘届等及び埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、6月17日から発掘調査を開始した。

- 6月17日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、敷地内に置場を確保できないため、すべて搬出することに決定し、その作業を行う。また、遺構精査分の残土については、一旦、調査区北端に集め、処理しきれないほど溜まった場合は、搬出作業を行う予定とした。
- 18日 重機による表土剥ぎ及び搬出作業を完了する。
- 21日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。その結果、調査区内には、古墳時代後期の住居跡5軒(248・254・274・276H)が重複し、全域に広がっていることが判明した。本日中には、248・254・274・276Hの精査を開始するが、特に調査区南半部の住居跡については、新旧関係を把握するのは困難な状況である。
- 22～29日 248Hを完掘し、写真撮影・平板測量を完了する。調査区南半部の254・274・276Hの新旧関係の把握が困難なため、サブレンチを入れることで把握することにした。とりあえず、遺物については、平板測量によりドットに落とし、取り上げる。
- 30日 サブレンチの土層観察により、住居跡の新旧関係は、254H(5世紀後葉)→

- 274 H（6世紀中葉）→275 H（7世紀中葉）と判明した。276 Hについては、274 Hに切られるが、出土遺物が少なかったため、時期の比定は難しいが、5世紀後葉と思われる。そのため、254 Hの精査を一時中断。274・275 Hの掘り下げを行う。274 Hからは、炭化材が比較的によく検出されていることから、焼失住居と考えられる。新たに中世以降の土坑1基（811 D）が検出されたため、精査を開始する。セクションの写真撮影・実測を終了後、ベルトをはずし、完掘し、写真撮影を完了する。
- 7月1・2日 274・275 Hの精査を行う。出土遺物を平板測量によりドットに落とし、取り上げる。254 Hの精査を再開する。275 Hの遺物出土状態及び276 Hの遺構の写真撮影を行う。1日の午後から、調査区北端の残土の搬出作業を行う。
- 5～12日 274 Hのセクションの写真撮影・実測を終了後、遺物出土状態の写真撮影を行い、その後、平板測量を終了させ、遺物を取り上げる。炭化材については、サンプリングを行う。柱穴を半載し、写真撮影・実測を行い、その後、貯蔵穴の精査を開始し、完掘する。275 Hは柱穴の半載後写真撮影・実測を行い、完掘後、写真撮影・平板測量・実測を行う。276 Hはセクションの写真撮影・実測を終了する。
また、住居跡を切る後世のピットがあるため、精査を行い、精査終了のものから平板測量を終了させる。
- 14・15日 274 Hのエレベーションの作成を行い、その後遺構写真撮影を行う。254 Hについては、精査を再開する。貯蔵穴を確認し、半載し、セクションの写真撮影・実測を終了させ、完掘後、遺物出土状態の写真撮影を行い、遺物を取り上げる。その後、遺構の平板測量・エレベーションの作成を終了する。274～276 Hについては、254 Hの写真撮影後、掘り方の精査を開始する。275・276 Hについては、基本的に直床と思われる。また、274 Hのカマド精査を開始する。
- 16～21日 274 Hのカマド精査を行う。
- 22日 274 Hのカマド精査を終了し、すべての精査を完了する。午後から器材の片付け及び搬出作業を行う。併行して、午後から残土搬入及び埋戻し作業を開始した。
- 23日 埋戻し作業を完了する。

11. 第62㊦地点（＝11区画）の発掘調査

平成21年12月25日、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理した。その際に、開発主体者と埋蔵文化財の保存措置についての打合せを行った。その結果、今回の開発目的は、個人住宅建設であり、当該地については、地盤表層改良（現況G Lから1m～1.5m程度）を実施する計画であることから、文化財保護層を確保することができないため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、平成22年1月18日付けで埋蔵文化財発掘届等及び埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、教育委員会を調査主体とし、平成22年1月22日から発掘調査を開始した。

- 1月22日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、敷地内に置場を確保できないため、搬出作業を行い、本日中にその作業を終了する。器材搬入についても本日中に終了した。

	平成21年度											
	平成21年4月 1日	5月 30日1日	6月 30日1日	7月 31日1日	8月 31日1日	9月 30日1日	10月 31日1日	11月 30日1日	12月 31日1日	平成22年1月 31日1日	2月 28日1日	3月 31日
城山遺跡第62①地点												
城山遺跡第62②地点												
城山遺跡第62③地点							11.4	11.13				
城山遺跡第62④地点												
城山遺跡第62⑤地点												
城山遺跡第62⑥地点					9.3	9.10						
城山遺跡第62⑦地点								11.9	11.13			
城山遺跡第62⑧地点												
城山遺跡第62⑨地点												
城山遺跡第62⑩地点											1.22	2.5
城山遺跡第62⑪地点												

	平成22年度											
	平成22年4月 1日	5月 30日1日	6月 30日1日	7月 31日1日	8月 31日1日	9月 30日1日	10月 31日1日	11月 30日1日	12月 31日1日	平成23年1月 31日1日	2月 28日1日	3月 31日
城山遺跡第62①地点				7.2	7.22							
城山遺跡第62②地点												
城山遺跡第62③地点												
城山遺跡第62④地点												
城山遺跡第62⑤地点												
城山遺跡第62⑥地点												
城山遺跡第62⑦地点								11.10	11.29			
城山遺跡第62⑧地点						8.23	8.30					
城山遺跡第62⑨地点			6.17	7.23								
城山遺跡第62⑩地点												
城山遺跡第62⑪地点												

第4表 城山遺跡第62①～⑪地点の発掘調査工程表

- 25日 人員導入による発掘調査を開始した。まず調査前の準備を行い、その後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。その結果、調査区内には、第62-2地点で調査を行った、古墳時代後期の住居跡2軒（243・250 H）と新たに検出された古墳時代の住居跡1軒（254 H）の合計3軒の住居跡、中世以降の土坑3基（695～697 D）などが分布していることが判明した。本日中には、695・696 D、243・250 Hの精査を開始する。695・696 Dについては、完掘し、写真撮影・実測を完了した。
- 26日 250 Hは出土遺物を平板測量により、ドットに落とし、取り上げる。254 Hの精査を開始する。
- 27日 250 Hのセクションの写真撮影・実測を終了し、ベルトをはずす。その後、柱穴を半載し、写真撮影・実測を終了する。254 Hはセクション図を作成し、遺構の写真撮影を終了する。掘り方の精査を開始するが、直床のため終了する。697 Dは縄文土坑と思われる。精査を開始する。
- 28日 250 Hの遺構の写真撮影を終了後、平板測量・エレベーション図の作成を終了する。その後、カマドの精査を開始し、写真撮影・実測をすべて終了する。697 Dは完掘後、写真撮影・実測を終了する。これにより、すべての精査を完了する。午後4時頃に器材の片付け及び搬出作業を完了する。
- 2月4・5日 埋戻し作業を完了する。

第3節 第62①～⑩地点の調査概要

(1) 第62①～⑩地点の地点毎の概要

第62①～⑩地点については、各棟の開発主体者が異なることで、厳密には1つ1つ異なる事業であるが、今回の報告では、前回の第62-1・2地点の発掘調査の成果がすでに得られていることから、各棟を別々に取り扱うことはせずに、時代別に遺構・遺物を説明することにした。

なお、今回報告する第62①～⑩地点の各地点から検出された遺構・遺物をまとめた調査概要を第5表に示した。第62①～⑩地点では、旧石器時代の石器集中地点は検出されなかったことから、今回報告する最古段階の時代は、第62③地点から検出された縄文時代の炉穴2基（9・10 F P）と第62⑩地点から検出された縄文時代の土坑1基（697 D）である。

また、前回の第62-1・2地点の調査でもそうであったが、今回の第62①～⑩地点で検出された遺構についてもそれぞれ小区画による部分的な調査であったため、ここでは、総括も含め、遺構単位でまとまる資料については、図面の追加及び変更を加え、改めてここに遺構・遺物を報告することとした。

(2) 第62①～⑩地点の時代毎の概要

それでは、今回検出された遺構・遺物についての概要を時代別にまとめることにする。

まず、今回の調査では、検出されなかったが、前回調査の第62-2地点の（B・C-3）グリッドから、石器ブロックが1カ所検出され、ナイフ形石器1点、剥片3点が出土した。検出層準は立川ロー

第5表 城山遺跡第62①～③地点の地点別調査概要

地点名	発掘調査面積 (単位:延床面積)	工事的目的	今の保存方法	発掘調査期間	検出された主な遺構	検出された 主な遺物	土木工事通知	有形文化財の認定	工事立会日	備考	
第62①地点	30.00㎡ (120.80㎡)	個人住宅建設 駐車場:盛土保存	建物:盛土保存 駐車場:記録保存	平成22年7月2日 ～7月22日	古墳時代後期 住居跡1軒(236H) 土坑5基(646-647・ 812～814D) 中世以降	土師器 陶磁器・かわらけ ・瓦製品・石製品	平成22年8月10 日付け 教文文書 4-503号 平成22年9月6日 日付け 教文文書 7-134号	平成22年 9月6日 第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み ／駐車場の計画変更により変更	平成22年 9月6日	第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	
第62②地点	(100.20㎡)	分譲住宅建設	建物:盛土保存	-	-	-	平成21年11月20 日付け 教文文書 5-814号	平成21年12月10日 日付け 第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	平成21年 12月10日	第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	
第62③地点	100.24㎡	個人住宅建設	記録保存	平成21年11月4日 ～11月16日	縄文時代中期 炉穴2基(9・10FP) 古墳時代後期 住居跡1軒(253H) 土坑3基 中世以降 (690～692D)	土師器 陶磁器・ほうろく・ かわらけ	平成21年11月19 日付け 教文文書 5-795号 平成21年7月29 日付け 教文文書 5-382号	-	平成21年 6月17日	第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	
第62④地点	(100.23㎡)	分譲住宅建設	建物:盛土保存	-	-	-	平成21年7月29 日付け 教文文書 5-382号	平成21年6月17日 日付け 第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	平成21年 6月17日	第62-2地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み	
第62⑤地点	(91.75㎡)	分譲住宅建設	建物:盛土保存	-	-	-	平成21年7月29 日付け 教文文書 5-381号	平成21年6月18日 日付け 第62-1地点により駐車場 部分及び629Dはすでに調 査・報告済み	平成21年 6月18日	第62-1地点により駐車場 部分及び629Dはすでに調 査・報告済み	
第62⑥地点	112.63㎡	個人住宅建設	記録保存	平成21年9月3日 ～9月10日	土坑3基 (687～688D) 溝跡3基(500～526M)	陶磁器・かわらけ ・瓦製品・石製品	平成21年9月7 日付け 教文文書 5-545号	平成26年2月14 日付け 教文文書 7-215号	-	-	第62-1地点により駐車場 部分はすでに調査・報告済み
第62⑦地点	43.93㎡ (116.72㎡)	個人住宅建設 駐車場:盛土保存	建物:盛土保存 駐車場:記録保存	平成21年11月9日 ～11月16日	古墳時代後期 住居跡1軒(236H) 土坑2基 中世以降 (693・694D) 溝跡1基(499M)	土師器 陶磁器	平成21年11月20 日付け 教文文書 5-813号	平成21年12月17 日付け 教文文書 7-133号	平成21年 12月10日	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み
第62⑧地点	21.18㎡ (119.88㎡)	個人住宅建設 駐車場:盛土保存	建物:盛土保存 駐車場:記録保存	平成22年11月17日 ～11月29日	古墳時代後期 住居跡1軒(236H) 土坑3基 中世以降 (615～818D)	土師器 陶磁器	平成22年11月26 日付け 教文文書 5-613号	平成23年2月10 日付け 教文文書 7-187号	平成22年 12月10日	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み
第62⑨地点	10.00㎡ (131.20㎡)	個人住宅建設 駐車場:盛土保存	建物:盛土保存 駐車場:記録保存	平成22年8月23日 ～8月30日	古墳時代後期 住居跡1軒 (251・275H)	土師器	平成22年9月3 日付け 教文文書 7-170号	平成23年2月10 日付け 教文文書 7-187号	平成22年 9月21日	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み	第62-1地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み
第62⑩地点	92.48㎡	個人住宅建設	記録保存	平成22年6月17日 ～7月22日	古墳時代後期 住居跡4軒 (254・274～276H) 土坑1基(811D)	土師器	平成22年6月28 日付け 教文文書 5-314号	平成22年9月30 日付け 教文文書 7-135号	-	-	第62-2地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み
第62⑪地点	91.12㎡	個人住宅建設	記録保存	平成22年11月22日 ～1月28日	古墳時代後期 住居跡2軒 (250・254H) 土坑3基 中世以降 (695～697D)	土師器 陶磁器	平成22年2月8 日付け 教文文書 5-1081号	平成22年3月11 日付け 教文文書 7-197号	-	-	第62-2地点により駐車場 部分の一部分はすでに調査・報告済 み
合計	501.58㎡ (1,177.25㎡)										

Ⅲ第Ⅳ層上部と考えられる。

縄文時代の遺構は、本地点全体を見ても遺構・遺物の検出は少なく、今回報告する遺構についても土坑1基(697D)・炉穴2基(9・10FP)である。その結果、第62地点全体では、土坑3基(683・686・697D)・炉穴2基(9・10FP)となる。

古墳時代中・後期の主な遺構は、今回の調査で、住居跡11軒(236・238・243・248・250・251・253・254・274～276H)・円形周溝墓1基(1円)・ピット1本(6P)が検出されている。その結果、第62地点全体では、住居跡21軒(234・236～240・242～246・248～254・274～276H)・円形周溝墓1基(1円)・ピット2本(1・6P)となる。これらの遺構は、調査区全域に広がって分布しているが、概して調査区西半部(A・B列グリッド)で著しく重複し、市内で最も幅広い時代にわたり遺構の密集度が高いという城山遺跡ならではの様相を呈していると言える。

今回の地点で特筆すべきは、5世紀中葉から7世紀中葉までに比定される住居跡が連続的に検出され、城山遺跡の安定した様相を示すものとして貴重な資料と成り得るが、さらに246・251Hの2軒については、5世紀中葉とほぼ同時期に比定できる住居跡と考えられるが、246Hにはカマドを有さず、251Hにはカマドを有するという差異を示しており、当市におけるカマド導入の初期段階の実態を示す大変貴重な資料になりえたものであろう。また、本遺跡からは初めて円形周溝墓1基が検出されたが、出土遺物が小破片4点という土器から、一応5世紀後葉～6世紀初頭としたが、詳細時期については不明とした方がいいであろう。

平安時代の遺構は、今回報告する中で住居跡はなく、ピット2本(7・8P)が検出された。これにより、第62地点全体で検出された平安時代の主な遺構は、住居跡3軒(235・241・247H)・土坑2基(635・636D)・ピット2本(7・8P)となる。特にこの時期では、今回の地点では最も注目できる資料として、241Hから皇朝十二銭の1つである富壽神寶2枚が出土し、同時に鉄鎌・土鍾が近くから出土したことである。なお、富壽神寶については、県内においても合計7枚という貴重な発見につながり、平成25年3月1日付けで、「城山遺跡241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点」として、市指定文化財に指定された。

中世以降の主な遺構は、今回の報告では土坑21基(646・647・687～697・811～818D)・溝跡4本(49～52M)である。その結果、第62地点全体では、土坑72基(629～634・637～682・684・685・687～696・811～818D)・溝跡5本(48～52M)・ピット4本(2～5P)が調査区内に分布しており、さらに検出された多数のピットの大部分は当該期に相当する遺構の可能性がある。

第4節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 炉 穴

9号炉穴

遺 構 (第7図)

[位 置] (C-1・2)グリッド。第62③地点。

[検出状況] 253号住居跡及び後世のピットに切られる。

[構 造] 平面形：不整な楕円形。規模：長径1.65m/短径1.20m/深さ28cm。壁：緩やかに立ち



第5図 遺構分布図(1/200)



第6図 城山遺跡第62地点全体の遺構分布図 (1/200)

上がり、断面は皿状。主軸方位：N-85°-E。

[覆 土] 7層に分層できた。

[遺 物] 燃糸文系土器1点が出土した。

[時 期] 出土土器より縄文時代早期前葉と思われる。

[所 見] 被熱による赤化部分を持つ炉床は観察できなかったが、覆土中への焼土混入が明確であったため炉穴として扱った。

遺 物 (第7図)

[土 器] (第7図1)

燃糸文系土器である。地文は燃糸文R。色調にはふい赤褐色(5YR4/4)を基調とし、胎土に粗粒の砂、細礫を含む。

10号炉穴

遺 構 (第7図)

[位 置] (C-1)グリッド。第62③地点。

[検出状況] 後世のピットに切られる。

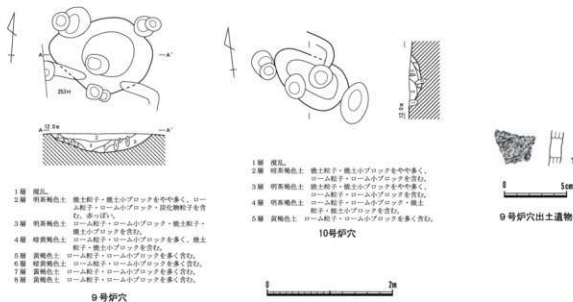
[構 造] 平面形：不整な楕円形。規模：長軸1.20m/短軸0.75m/深さ20cm。壁：緩やかに立ち上がり、断面は皿状。主軸方位：N-55°-W。

[覆 土] 4層に分層できた。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 縄文時代。

[所 見] 本遺構も被熱による顕著な赤化部分を持つ炉床は観察できなかったが、9 F P同様に覆土中への焼土混入が明確であったため炉穴として扱った。



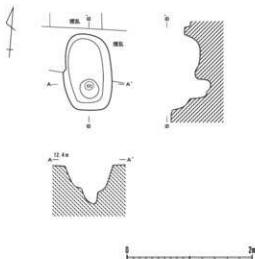
第7図 9・10号炉穴・出土遺物(1/60・1/3)

(2) 土坑

697号土坑

遺構 (第8図)

[位置] (B-4) グリッド。第62①地点。
 [検出状況] 遺構北半上部を攪乱に切られる。
 [構造] 平面形：不整な楕円形。南側坑底面にピット状の掘り込みが有る。規模：長径1.20m/短径0.78m/深さ25~45cm。北側が深い。ピット部は60cm。壁：70~80°で立ち上がる。主軸方位：N-10°-W。
 [覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。
 [遺物] 出土しなかった。
 [時期] 覆土の観察から縄文時代のものと思われる。



第8図 697号土坑 (1/60)

第5節 古墳時代中・後期~平安時代の遺構・遺物

(1) 住居跡

236号住居跡

遺構 (第9~13図)

[位置] (D-2・3) グリッド。
 [検出状況] 南半部が第62⑦・⑧地点の調査で検出された。
 [構造] 平面形：長方形。規模：長軸5.25m/短軸5.03m/深さ39~49cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-20°-W。壁溝：カマドを除き全周する。上幅22~35cm/下幅5~10cm/深さ7~23cm。床面：ほぼ直床であるが、一部壁際に5cm程の貼床が確認できた。カマド前面から南壁中央付近にかけての床面が硬化していた。カマド：北壁のほぼ中央に位置する。長軸方位はN-16°-W。長さ106cm/幅100cm/壁への掘り込み36cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築したと思われる。袖部粘土の内側が被熱により赤化していた。燃烧部中央付近は10cm程の厚さで暗黄褐色土が貼られていた。貯蔵穴：北東コーナー寄りに位置する。平面形は長方形。長軸62cm/短軸50cm/深さ70~80cm。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。柱穴：主柱穴はP1~P4の4本で深さは62~71cm。入口施設：確認できなかった。
 [覆土] 11層に分層できた。炭化材や多数の炭化種実が検出された。
 [遺物] 土師器坏・鉢・甕形土器、土製品、石製品、鉄製品が出土した。また、第62⑦地点から炭化種実1点(モモ)が出土したが、第59地点で報告済み(尾形・徳留・深井・青木 2011)。今回の調査では、土師器坏4点(32~35)・鉢1点(36)・甕4点(37~40)、須恵器甕破片5点(41~45)、羽口1点(46)が出土した。鉄滓・羽口の出土量は第6表に示した。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀中葉）。

〔所見〕炭化材・炭化種実が出土していることから、焼失住居と考えられる。また、鉄滓・羽口が多く出土していることを合わせると、本住居跡は少なくとも廃棄段階において、製鉄関連の遺構であった可能性がある。ただし、第62-1地点の住居北半部では、多くの鉄滓・羽口が出土していたため、今回の第62⑦・⑧地点の住居南半部でも注意して精査を行ったが、第62⑧地点で鉄滓・羽口がそれぞれ1点ずつという極めて少ない状況であり、住居北半部と南半部での廃棄状況に大きな差異が見られた。

〔遺物〕（第14～16図、第7表）

〔土器〕（第14図1～16、第15図17、第16図32～45、第7表）

1～10・32～35は土師器環形土器、11・36は土師器鉢形土器、12～17・37～39は土師器甕形土器、41～45は須恵器甕形土器である。

〔土製品〕（第15図18～26、第16図46）

18・19は支脚、20～26・46は輪の羽口の破片である。

18は現存高13.2cm・最大幅8.0cm・重さ508g。全面に成形痕と思われる平坦面に縦方向に観察される。下端部を欠損する。カマド前面の床面上からの出土である。

19は現存高11.8cm・最大幅9.1cm・重さ488g。全面に成形痕と思われる平坦面に縦方向に観察される。全体的に被熱によるものか、遺存状態は悪く、脆く表面はかなり剥離している。カマド内（坑底上11cm）からの出土である。

20は現存長3.5cm・最大幅4.0cm・穿孔径1.1cm・重さ30.8g。カマド前面の覆土中（床上9cm）からの出土である。

21は現存長3.0cm・最大幅5.3cm・穿孔径1.5cm・重さ29.0g。カマド前面の覆土中（床上2～23cm）から散在的な出土である。

22は現存長6.4cm・最大幅5.2cm・穿孔径1.5cm・重さ103.0g。P2近くの覆土中（床上27cm）からの出土である。

23は現存長4.3cm・現存幅3.8cm・重さ29.2g。住居中央の覆土中（床上23cm）からの出土である。

24は現存長5.1cm・現存幅3.7cm・重さ26.2g。先端部のみ破片で、住居中央からやや東寄りの覆土中（床上22cm）からの出土である。

25は現存長4.2cm・現存幅4.6cm・重さ22.4g。先端部のみ小破片で、貯蔵穴とP1に近い覆土中（床上15cm）からの出土である。

26は現存長4.3cm・現存幅4.2cm・重さ23.6g。先端部のみ小破片で、P2近くの覆土中（床上8cm）からの出土である。

46は現存長4.0cm・現存幅4.6cm・重さ30.0g。先端部のみ小破片で、P4近くの覆土中（床上34cm）からの出土である。第62⑧地点。

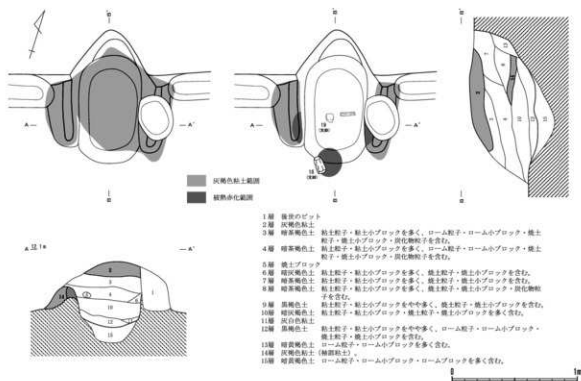
〔石製品〕（第15図27）

軽石である。現存長3.5cm・最大幅3.0cm・厚さ1.7cm・重さ4.5g。覆土中からの出土である。

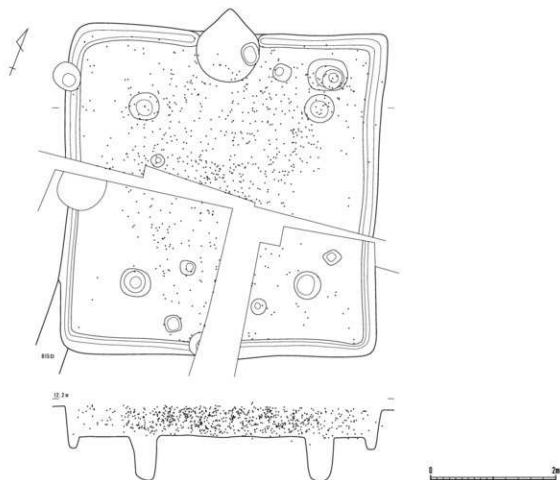
〔鉄製品〕（第15図28～31）

すべて釘と思われる。

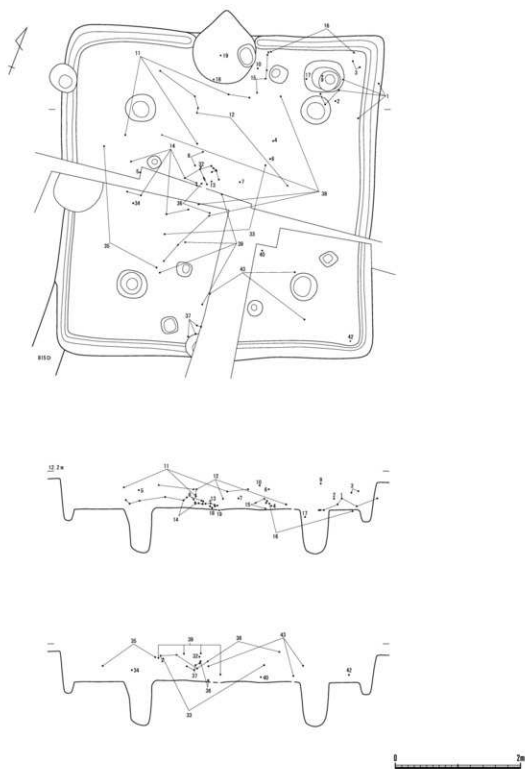
28は現存長5.5cm・最大幅0.5cm・重さ4.1g。カマド右横の覆土中（床上35cm）からの出土。



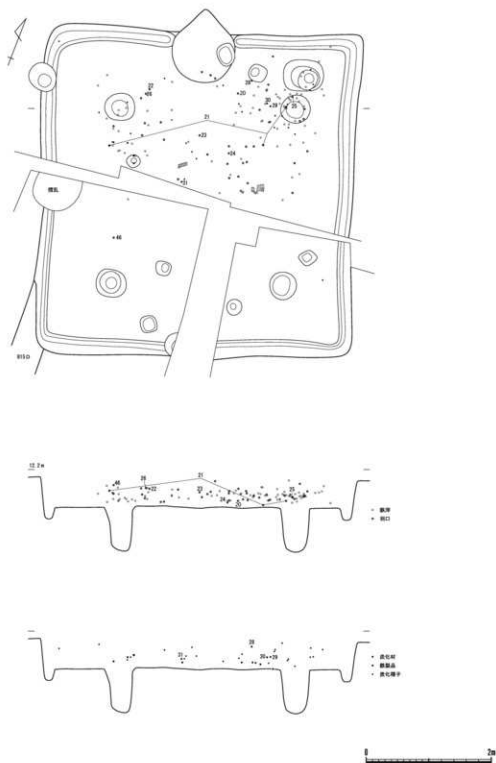
第10図 236号住居跡カマド (1/30)



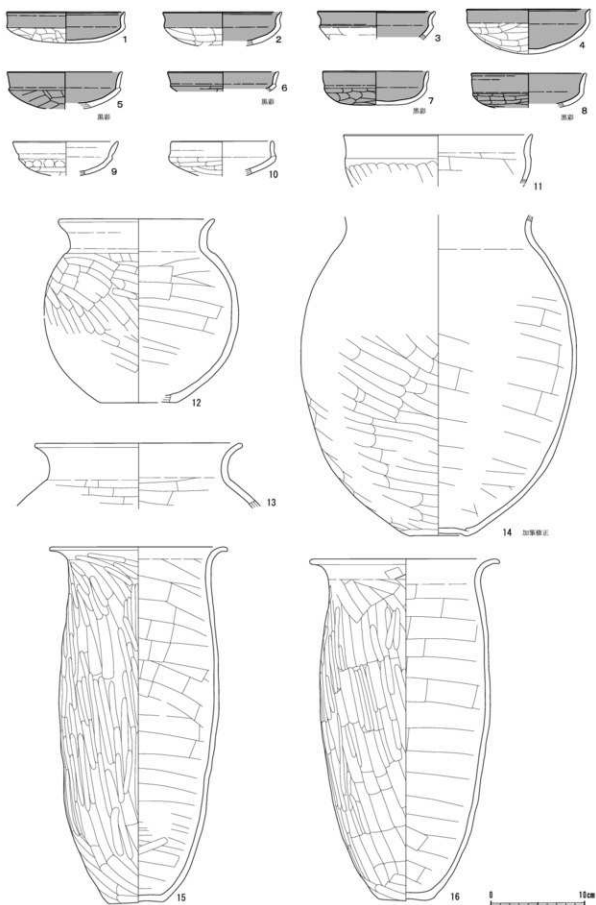
第11図 236号住居跡遺物出土状態1 (1/60)



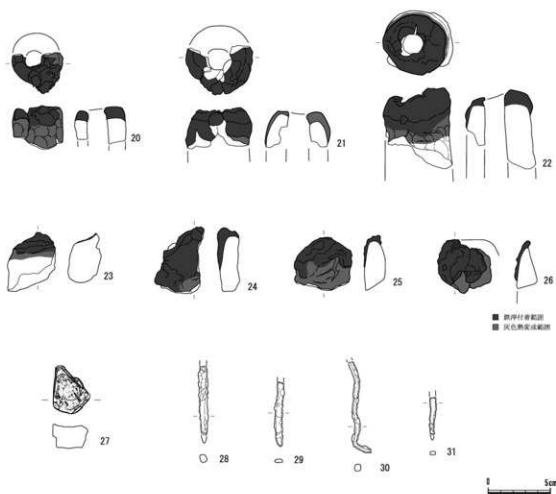
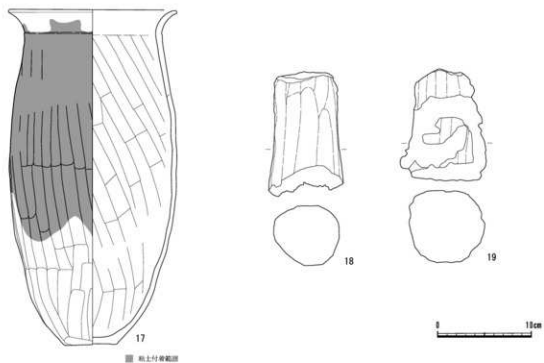
第12図 236号住居跡遺物出土状態2 (1/60)



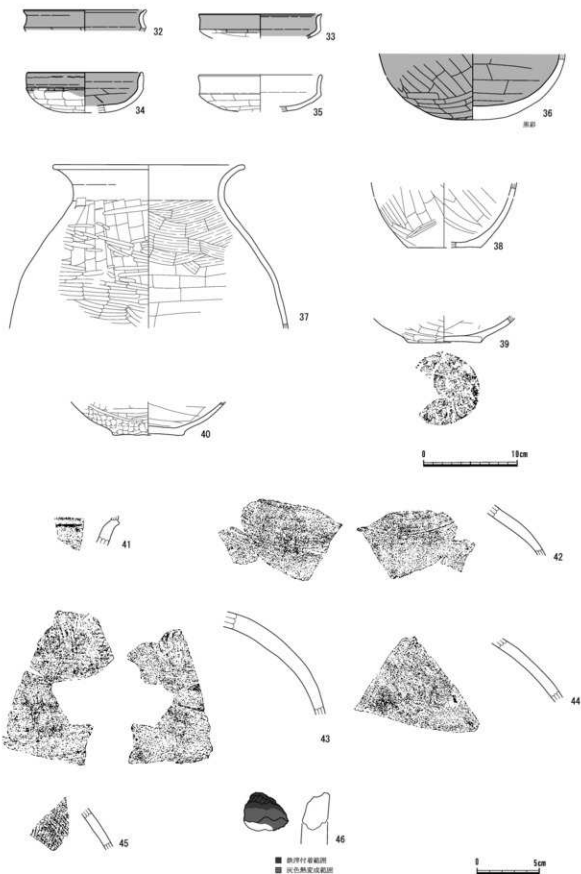
第13図 236号住居跡遺物出土状態3 (1/60)



第14図 236号住居跡出土遺物1 (1/4)



第15図 236号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第16図 236号住居跡出土遺物3 (1/4・1/3)

29は現存長5.2cm・最大幅0.7cm・重さ2.1g。P1すぐ西側の覆土中（床上20cm）からの出土。

30は現存長7.2cm・最大幅0.5cm・重さ3.7g。P1すぐ西側の覆土中（床上19cm）からの出土。

31は現存長3.0cm・最大幅0.5cm・重さ1.0g。住居中央付近の覆土中（床上16cm）からの出土。

238号住居跡

遺 構（第17・18図）

〔位 置〕（A・B-1・2）グリッド。

〔検出状況〕南半部が第62①地点の調査で検出された。239Hを切り、後世の土坑に切られる。

〔構 造〕平面形：方形。規模：南北軸不明／東西軸7.90m／深さ17～33cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅15～22cm／下幅6～10cm／深さ2～13cm。東壁（A）と南壁（B）の2か所に間仕切りと思われる溝が確認できた。Aは確認できた長さ120cm・深さ19cm。Bは長さ88cm・深さ8cm。床面：住居中央付近が硬化していた。ほぼ直床であるが、西壁側は4～18cmの厚さで貼床が施されていた。柱穴：P1～3が主柱穴、P4・7・8が補助柱となり、8本柱を基本とする構造と考えられる。深さは主柱穴が66～79cm、補助柱が22～36cm。入口施設：P5・6は入口梯子穴と思われ、深さは23・24cm、北側に2～5cmの高さの凸堤が巡らされている。

〔覆 土〕12層に分層できた。床直上から焼土が検出された。

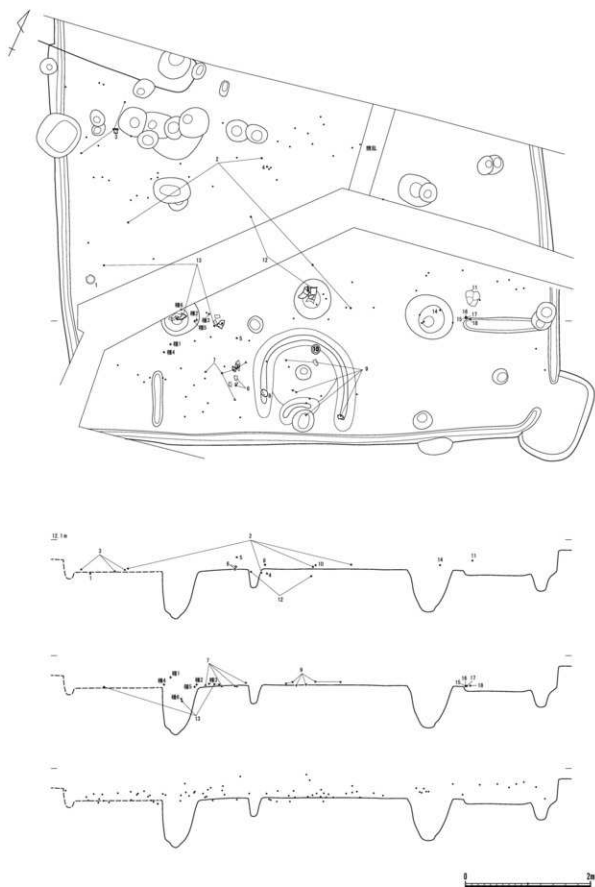
〔遺 物〕土師器環・高環・鉢・甕形土器、土製品、石製品が出土した。今回の調査では土師器環6点（5～10）・鉢1点（11）・甕形土器2点（12・13）、支脚1点（14）、石製品（白玉）4点（15～18）が出土した。また、炭化種実（モモ・スモモ）が出土したが、分析結果は、第59地点で報告済み（尾形・徳留・深井・青木 2011）。

〔時 期〕古墳時代後期（6世紀末葉）。

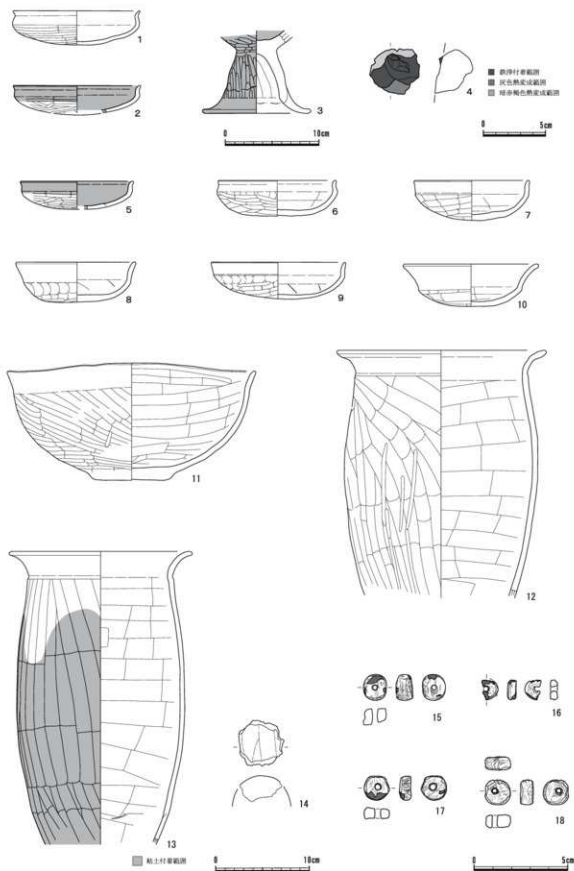
〔所 見〕床直上から焼土が検出されたことから、焼失住居の可能性がある。

遺構名	調査地点	種 類	総 計		実測個体数		実測外個体数	
			出土総数	出土総重量(g)	出土数	重量(g)	出土数	重量(g)
236 H	第62-1地点	鉄 滓	84	536.2	0	0.0	84	536.2
		羽 口	84	629.0	7	263.0	33	366.0
	第62①地点	鉄 滓	1	0.5	0	0.0	1	0.5
		羽 口	1	30.0	1	26.6	0	0.0
238 H	第62-2地点	鉄 滓	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		羽 口	1	26.6	1	26.6	0	0.0
241 H	第62-2地点	鉄 滓	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		羽 口	1	6.9	1	6.9	0	0.0
242 H	第62-2地点	鉄 滓	6	92.2	0	0.0	6	92.2
		羽 口	2	79.3	1	36.9	1	42.4
247 H	第62-2地点	鉄 滓	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		羽 口	1	18.4	1	18.4	0	0.0
250 H	第62-2地点	鉄 滓	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		羽 口	5	117.7	1	60.5	4	57.2
252 H	第62-2地点	鉄 滓	8	59.6	0	0.0	8	59.6
		羽 口	3	59.2	1	29.6	2	29.6
合 計	合 計	鉄 滓	99	688.5	0	0	99	688.5
		羽 口	54	967.1	14	468.5	40	495.2

第6表 住居跡出土の鉄滓・羽口集計表



第18図 238号住居跡遺物出土状態(1/60)



第19図 238号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

遺物 (第19図、第8表)

[土器] (第19図1～3・5～13、第8表)

1・2・5～10は土師器環形土器、3は土師器高環形土器、11は土師器鉢形土器、12・13は土師器甕形土器ある。

[土製品] (第19図4・14)

4は韃の羽口の小破片である。現存長3.6cm・最大幅3.9cm・重さ26.6g。先端部に近い部分は被熱により灰色に変色し、さらに鉄滓の付着が見られる。色調は暗橙色を基調とする。住居中央付近の床面上からの出土である。

14は支脚である。現存高4.8cm・最大幅4.7cm・重さ49.8g。色調は暗橙色を基調とする。住居中央付近の床面上からの出土である。P2上方の覆土中(床上10cm)からの出土である。

[石製品] (第19図15～18)

すべて滑石製の白玉で、P2のすぐ東側の床面上からまとまって出土している。

15は長さ1.3cm・幅1.3cm・厚さ0.7cm・穿孔径0.2cm。重さ1.6g。断面は台形状で、成形面はやや角張っている。表面には擦痕が僅かに見られる。

16は長さ1.6cm・幅0.9cm・厚さ0.4cm・重さ0.6g。穿孔径0.3cm。成形面は角が強い。表面には擦痕が見られる。半分を欠損する。

17は長さ1.3cm・幅1.3cm・厚さ0.5・重さ1.1g。穿孔径0.2cm。成形面は角が強い。表裏面には擦痕が見られる。

18は長さ1.3cm・幅1.3cm・厚さ0.6cm・重さ1.1g。穿孔径0.3cm。穿孔は中心がずれている。成形面は角張っている。表面には擦痕が僅かに見られる。

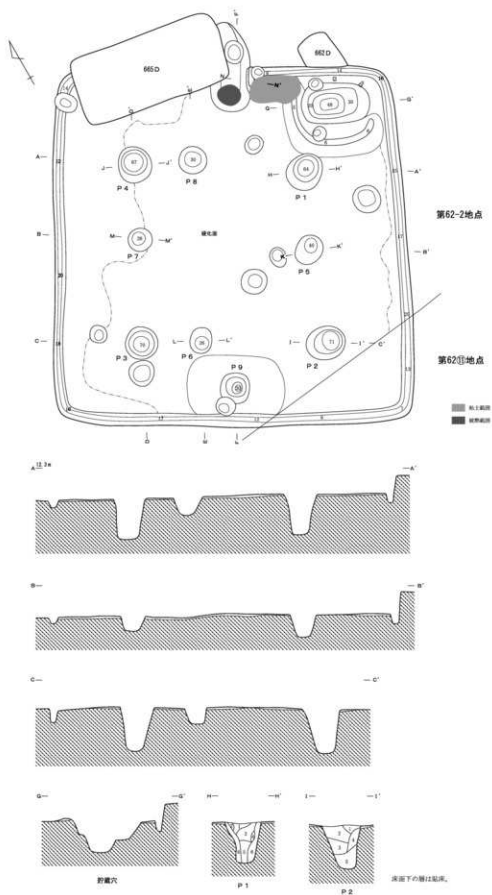
243号住居跡

遺構 (第20・21図)

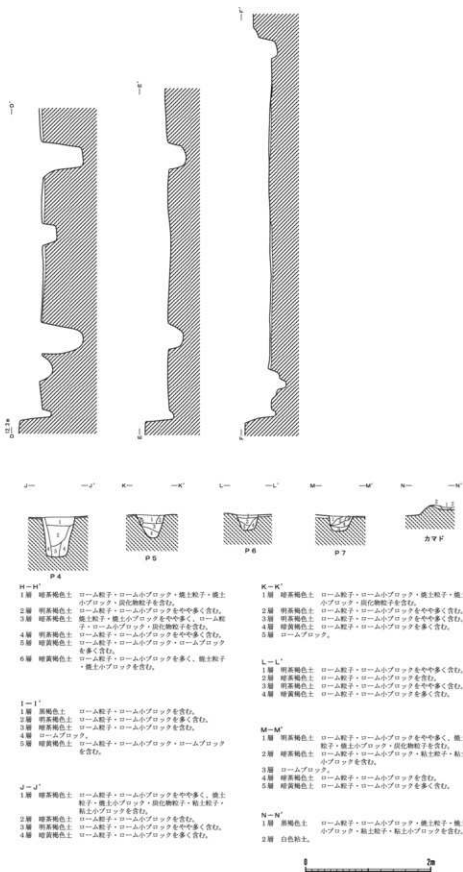
[位置] (A・B-3) グリッド。

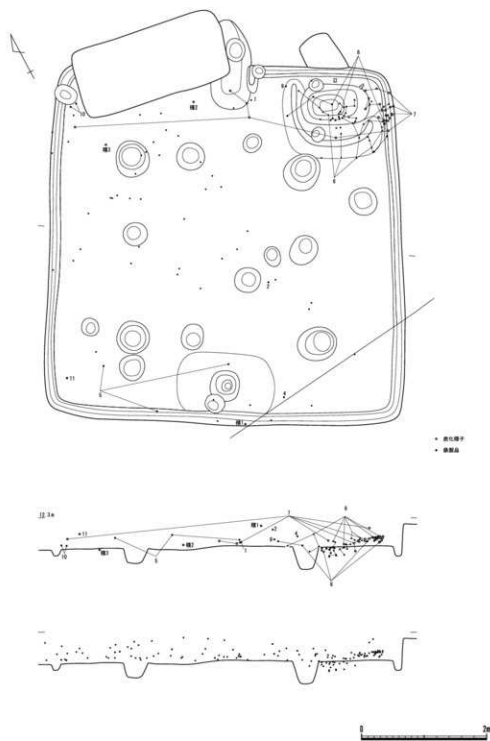
[検出状況] 南コーナーが第62㊸地点の調査で検出された。241・242 H、662・665～667・696 Dに切れ、242・244 Hを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸5.72m/短軸5.58m/深さ30～40cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-31°-E。壁溝：カマドを除き全周する。上幅14～22cm/下幅4～6cm/深さ6～20cm。床面：貼床は2～5cmの厚さで施されており、北西壁付近を除き硬化した面が確認できた。カマド：北東壁のほぼ中央に位置する。北側は665 Dに切れ、後世のピットにも壊されている。主軸方位はN-25°-E。長さ142cm/幅不明/壁への掘り込み74cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残り、その上に粘土を被覆して構築されたと思われる。貯蔵穴：東コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸110cm/短軸64cm/深さ48cm。周囲には幅8～20cm/深さ20～30cmの段を有する。西側には高さ6cmの「L」字状の凸堤が巡っていた。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材・粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。柱穴：P1～P8の8本が主柱穴と思われるが、四隅のP1～P4は深さが64～72cmであるのに対し、間のP5～P8は26～40cmと浅いことから補助柱の可能性もある。入口施設：深さ30cmのP9が入口梯子穴と思われる。周囲は床面より4cm程高くなっていた。

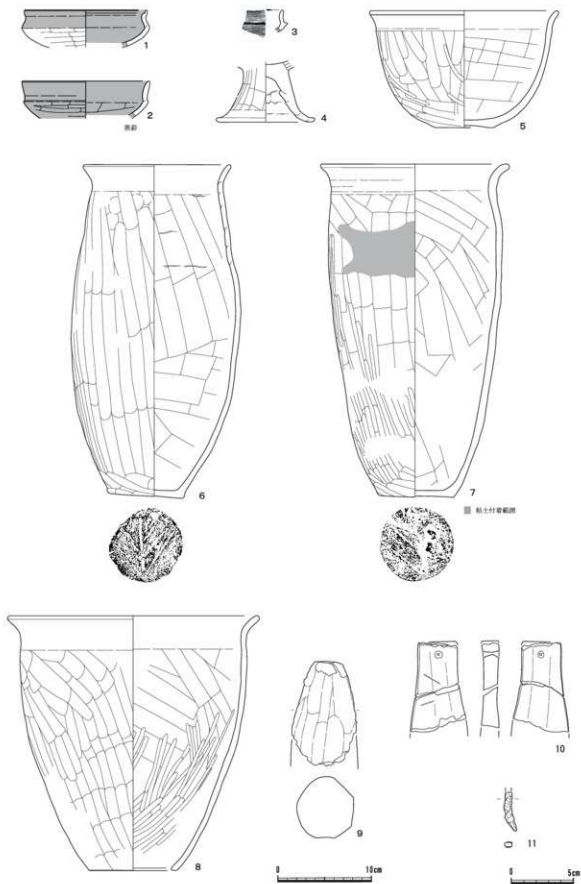


第20図 243号住居跡 (1/60)

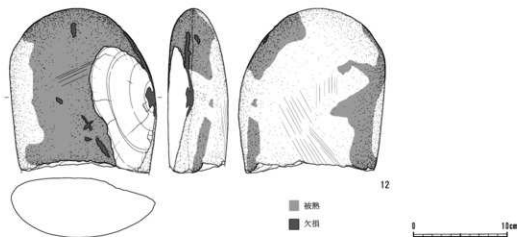




第21図 243号住居跡遺物出土状態(1/60)



第22図 243号住居跡出土遺物1 (1/4・1/3)



第23図 243号住居跡出土遺物2 (1/4)

〔覆 土〕 上層がローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、中層がローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺 物〕 土師器環・鉢・甕・甕形土器、須恵器環形土器、土製品、石製品、鉄製品、炭化種実（モモ）が出土した。炭化種実の分析結果は、第62地点で報告済み（尾形・徳留・深井・青木 2012）。今回の調査では台石が1点出土した。

〔時 期〕 古墳時代後期（7世紀中葉）。

〔所 見〕 本住居跡は出土土器から、7世紀中葉に比定したが、本住居跡に切られる242Hは7世紀前葉の時期のものであり、かなり近接した時期であった。そのため、新旧関係の把握及び遺物の取り扱いについては慎重に行ったが、出土遺物には遺構間で混在している可能性もある。

〔遺 物〕 (第22・23図、第9表)

〔土 器〕 (第22図1～8、第9表)

1・2は土師器環形土器、3は須恵器環身形土器、4は土師器高環形土器、5は土師器鉢形土器、6・7は土師器甕形土器、8は土師器甕形土器である。

〔土 製品〕 (第22図9)

支脚である。現存高11.1cm・最大幅6.8cm・重さ274g。全面に成形痕と思われる平坦面が縦方向に観察される。下端部を欠損する。カマド右横の覆土中（床上5cm）からの出土である。

〔石 製品〕 (第22図10、第23図12)

10は砥石である。最大長7.1cm・最大幅4.4cm・最大厚2.1cm・重さ58.5g。断面形は四角形で、使用面は4面である。上部中央に穿孔あり。石質は砂岩である。北コーナーの床面上からの出土である。

12は台石であろうか。最大長17.4cm・最大幅15.6cm・最大厚6.4cm・重さ2,578g。全体的に被熱があり、裏面には僅かに擦痕が残る。石質は安山岩である。第62①地点の覆土中からの出土である。

〔鉄 製品〕 (第22図11)

釘である。現存長3.1cm・最大幅0.6cm・重さ1.4g。西コーナーの覆土中（床上18cm）からの出土である。

248号住居跡

遺構 (第24～26図)

位置 (B-3) グリッド。

検出状況 南西コーナー付近が第62㊦地点の調査で検出された。247 H・49 M・668・669 Dに切られ、249 Hを切る。

構造 平面形：隅丸方形。規模：南北軸5.16～4.50m/東西軸4.96m/深さ37～55cm。壁：急斜に立ち上がる。東西軸方位：N-70°-E。壁溝：カマドを除き全周する。上幅16～30cm/下幅4～10cm/深さ8～16cm。床面：貼床は2～10cmの厚さで施されており、住居中央に硬化した面が確認された。カマド：東壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はほぼE-W。長さ129cm/幅102cm/壁への掘り込み28cm。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築したと思われる。袖部の内側と燃焼部は被熱により赤化していた。カマド前面の床面が90×50cmの楕円形状に被熱赤化していたが、カマドに關係するものかどうかは不明である。貯蔵穴：南東コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸80cm/短軸60cm/深さ38cm。覆土は5層に分層できた。柱穴：P1～P4が支柱穴と思われる。P1以外は重複形態である。深さは38～49cm。入口施設：深さ11cmのP5が入口梯子穴と思われる。

覆土 18層に分層できた。焼土が検出されていることと、覆土中にロームブロックが多く含まれていることから、焼失後埋め戻された可能性がある。

遺物 土師器環・甕形土器、土製品、炭化種実(モモ)が出土した。炭化種実の分析結果は、第62地点で報告済み。今回の調査では図示できるものはなかった。

時期 古墳時代後期(7世紀中葉)。

所見 焼失住居の可能性はある。

遺物 (第27図、第10表)

土器 (第27図1～4、第10表)

1は土師器環形土器、2～4土師器甕形土器である。

土製品 (第27図5)

支脚である。現存高9.6cm・最大幅6.4cm・重さ259g。全体的に裾広がりの円筒形を呈する。色調は暗橙色を基調とし、胎土には混入物を含まない。全面に成形痕と思われる平坦面が縦方向に観察される。カマド右袖横からの出土である。

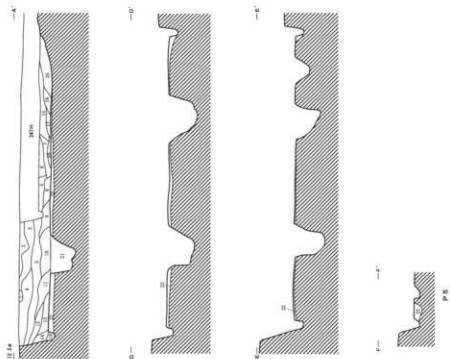
250号住居跡

遺構 (第28・29図)

位置 (A・B-4) グリッド。

検出状況 第62㊦地点の調査により南コーナー付近以外は確認できた。

構造 平面形：長方形。規模：長軸5.32m/短軸5.03m/深さ31～41cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-57°-E。壁溝：確認できた範囲ではカマドを除き全周する。上幅22～32cm/下幅6～10cm/深さ13～25cm。床面：北東壁付近を除き良く硬化していた。前回の調査部分では貼床は2～5cmの厚さで施されていたが、今回の調査部分では壁溝際以外、ほぼ直床であった。カマド：北西壁に位置する。主軸方位はN-26°-W。長さ80cm/幅100cm/壁への掘り込み8cm。袖部



A-A'

- 1層 黒土
- 2層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 3層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 4層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 5層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 6層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 7層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 8層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く含む。
- 9層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 10層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 11層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 12層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 13層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 14層 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 15層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・粘土粒子、粘土小ブロックを含む。
- 16層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを多く含む。
- 17層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・粘土粒子、粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 18層 埴原色土 粘土粒子・粘土小ブロック・粘土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 19層 埴原色土
- 20層 カマド。
- 21層 P 3。
- 22層 粘土。

G-G'

- 1層 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロック・粘土粒子・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 2層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く、粘土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 3層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く、粘土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 4層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 粘土ブロック。
- 6層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 7層 粘土。

H-H'

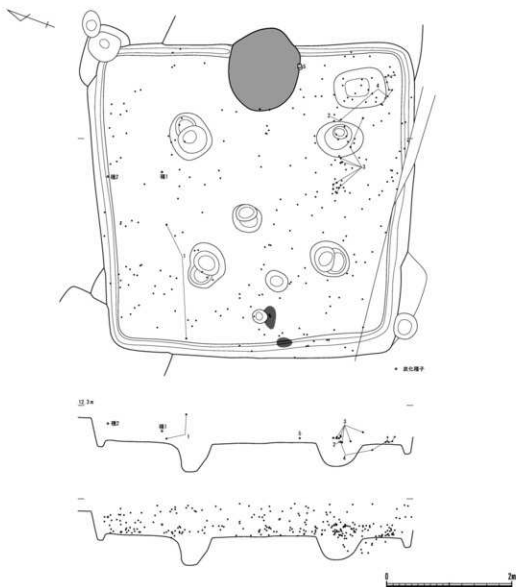
- 1層 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 2層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く含む。
- 4層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。

I-I'

- 1層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 2層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3層 粘土ブロック。
- 4層 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 5層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを多く含む。
- 6層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 7層 粘土。

J-J'

- 1層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 2層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・粘土粒子を含む。
- 3層 黒色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 4層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロックをやや多く、粘土小ブロックを含む。
- 5層 埴原色土 ローム粒子、ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 6層 粘土。



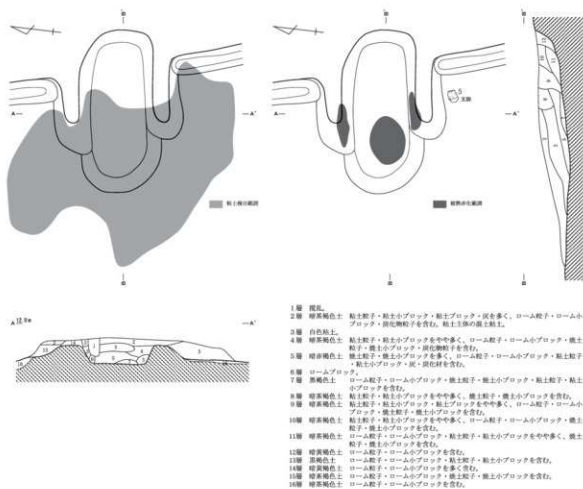
第25図 248号住居跡遺物出土状態（1/60）

はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築したと思われる。焼部は被熱により赤化していた。貯蔵穴：西コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸92cm/短軸62cm・深さ63cm。周囲には幅16～26cm/深さ5～9cmの段を有する。覆土は上層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土、下層がローム粒子ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。柱穴：P1～P3が主柱穴と思われ、すべて2本の重複形態で検出された。深さは49～51cm。

〔覆土〕25層に分層できた。

〔遺物〕土師器環・甕・甔形土器、土製品、鉄製品、炭化種実が出土した。炭化種実の分析結果は、第62地点で報告済み。今回の調査では土師器環形土器2点（25・26）、鉄製品（釘）1点（27）が出土した。

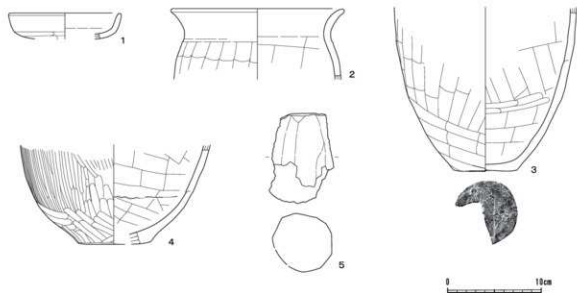
〔時期〕古墳時代後期（7世紀中葉）。



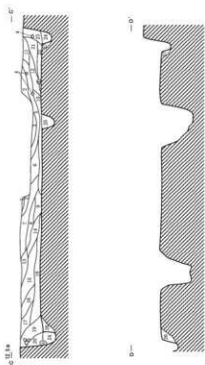
A.12.0*

- 1層 段瓦
- 2層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロック・粘土ブロック・灰を多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化植物子を含む。粘土主体の緑土粘土。
- 3層 白色粘土
- 4層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化植物子を含む。
- 5層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・灰・炭化材を含む。
- 6層 ローム小ブロック
- 7層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 8層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 9層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 10層 緑黄褐色土 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 11層 緑黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 12層 緑黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 13層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 14層 緑黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 15層 緑黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
- 16層 緑黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

第26図 248号住居跡カマド (1/30)



第27図 248号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



C-C'

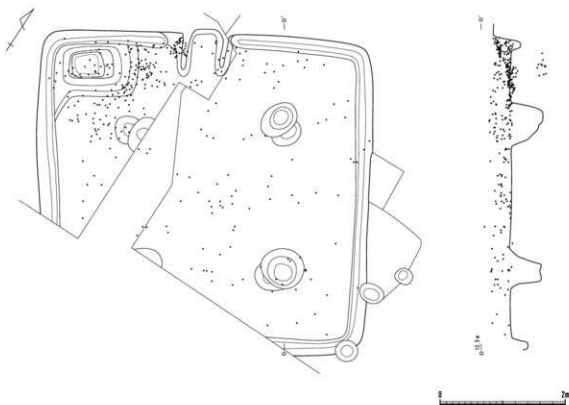
- 1層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 ロームブロック。
- 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 6層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 8層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 10層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 11層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 12層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 13層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 14層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 15層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 16層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 17層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 18層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 19層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 20層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 21層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭土粒子を含む。
- 22層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 23層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 24層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 25層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 26層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭土。
- 27層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。炭土。

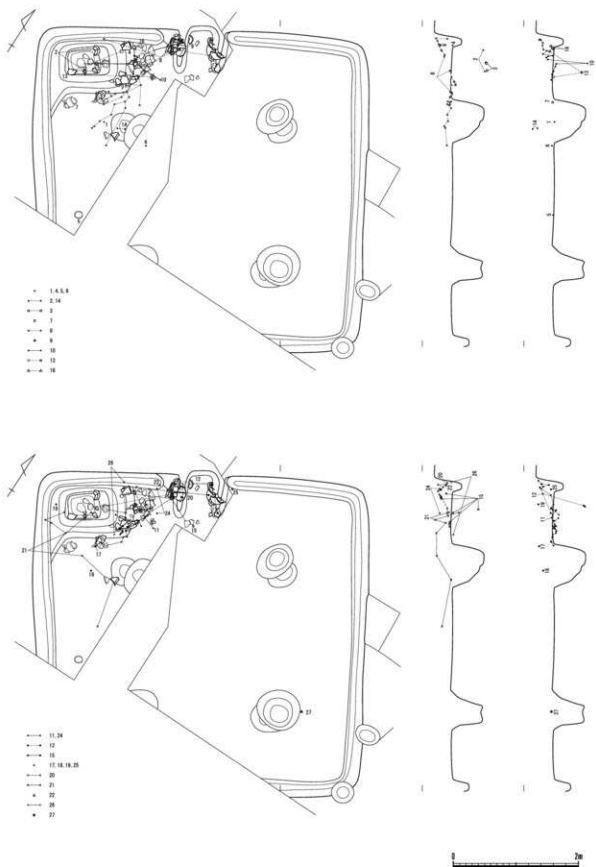
E-E'

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。

F-F'

- 1層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 2層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。





第29図 250号住居跡遺物出土状態2 (1/60)

遺物 (第30・31図、第11表)

[土器] (第30図1～11、第31図12～21・25・26、第11表)

1～6・25・26は土師器環形土器、7～19は土師器甕形土器、20・21は土師器甕形土器である。

[土製品] (第31図22～24)

小破片のため判別しづらいが、22・23は支脚、24は鞆の羽口であろう。22・23は同一個体と思われる。

22は現存長3.9cm・最大幅5.6cm・重さ46.4g。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子を僅かに含む。表面には指頭押捺による成形痕が観察できる。カマド左横の覆土中(床上43cm)からの出土である。

23は現存長4.9cm・最大幅4.1cm・重さ41.6g。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子を僅かに含む。表面には指頭押捺による成形痕が観察できる。覆土中からの出土である。

24は現存長5.4cm・最大幅5.7cm・重さ60.5g。色調は淡茶褐色で、胎土には茶褐色粒子を僅かに含む。表面には指頭押捺による成形痕が観察できる。カマド左横の覆土中(床上19・20cm)からの出土である。

[鉄製品] (第31図27)

釘である。長さ6.0cm・最大幅0.8cm・厚さ0.6cm・重さ13.4g。第62㊸地点のP3近くの床面上からの出土である。

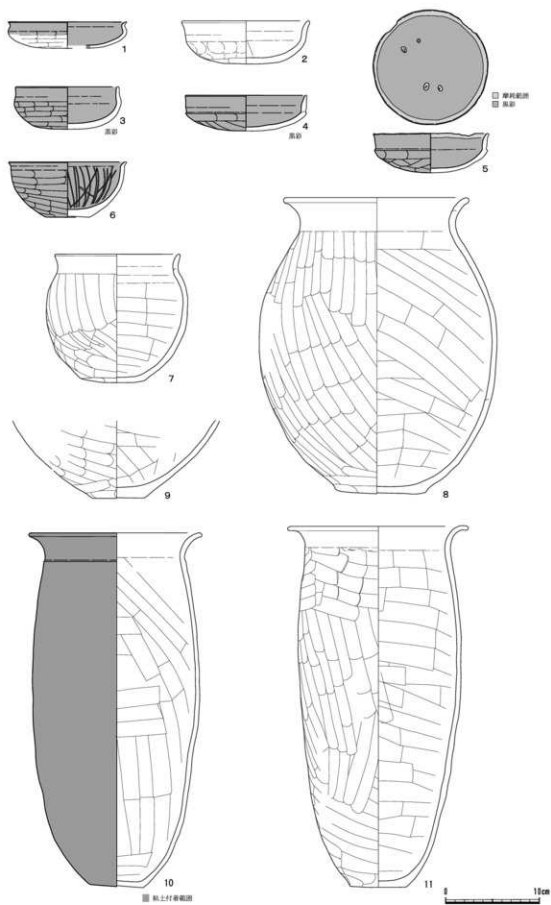
251号住居跡

遺構 (第32・33図)

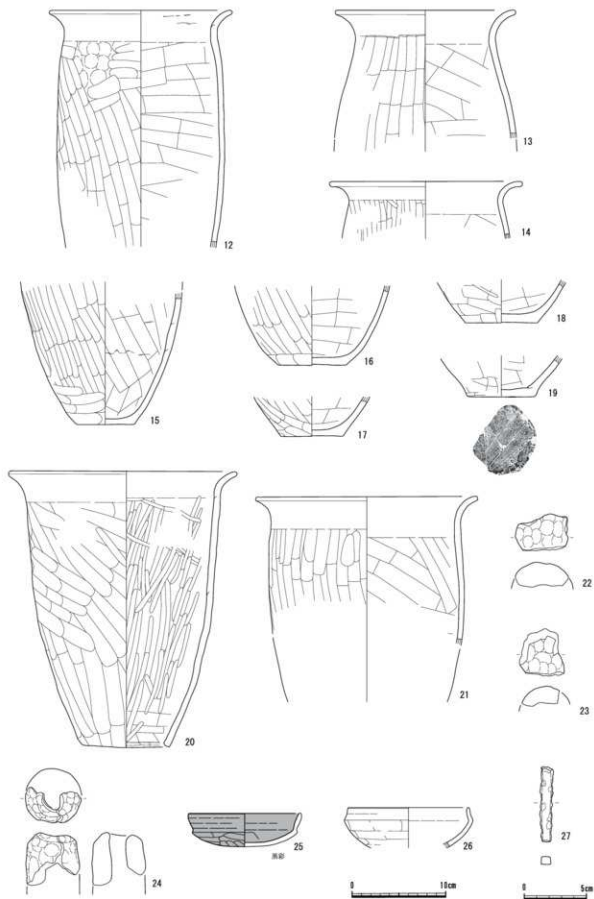
[位置] (C-3・4) グリッド。

[検出状況] 第62㊸地点の調査で東コーナー、第62㊸地点の調査で西側が確認できた。275H・49M・673～677Dに切られている。

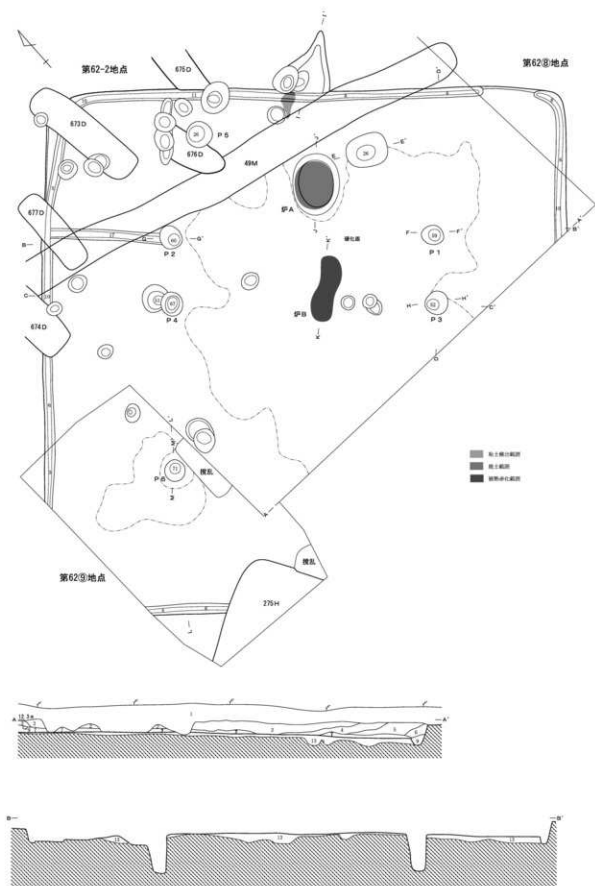
[構造] 平面形：ほぼ正方形。規模：1辺8.38m/深さ9～24cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-43°-E。壁溝：東コーナー付近では一部確認できなかった。上幅14～20cm/下幅6～10cm/深さ5～11cm。P2から南西壁まで延びる間仕切りと思われる深さ17cmの溝が1本検出された。床面：住居中央付近が良く硬化していた。貼床は4～16cmの厚さで施されていた。カマド：北東壁の中央付近に位置するが、49Mや後世のピットなどに壊されており遺存状態は良くない。主軸方位はN-56°-E。長さ不明/幅不明/壁への掘り込み95cm。カマド前面から粘土が検出されていることから、壁溝を一部埋め戻したあと、袖部を粘土で構築したと思われる。炉：焼土や被熱した部分が二カ所検出されたため、一応炉として扱った。〈炉A〉カマド前面から90cm程離れたところに位置する。平面形は楕円形。長軸96cm/短軸86cm/深さ13cm。上層には焼土が10cm程の厚さで確認できた。炉床は被熱により硬化していた。〈炉B〉P3とP4の間に位置する。平面形は不整な楕円形。長軸116cm/短軸36cm。被熱赤化したローム面が4cm程の厚さで確認できたが、掘り込みはなかった。貯蔵穴：北東壁の中央よりやや東に偏って位置する。平面形は隅丸長方形。長軸64cm/短軸52cm/深さ26cm。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む暗茶褐色土を基調とする。下層には粘土が多く堆積していた。柱穴：主柱穴と思われるP1～P4に加え、今回の調査で検出されたP6も主柱穴と思われる。



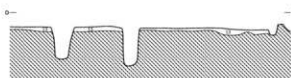
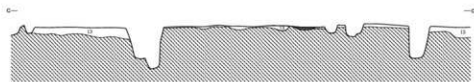
第30図 250号住居跡出土遺物1 (1/4)



第31図 250号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第32図 251号住居跡 (1/60)



貯蔵穴



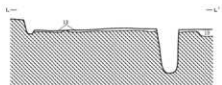
カマド



炉A



炉B



- 1層 表土及び埋土
- 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。
- 3層 暗茶褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。
- 5層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 6層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む。
- 8層 ロームブロック
- 9層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 10層 焼土
- 11層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 12層 暗茶褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。
- 13層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。埋土。



P 1



P 2



P 3



P 6

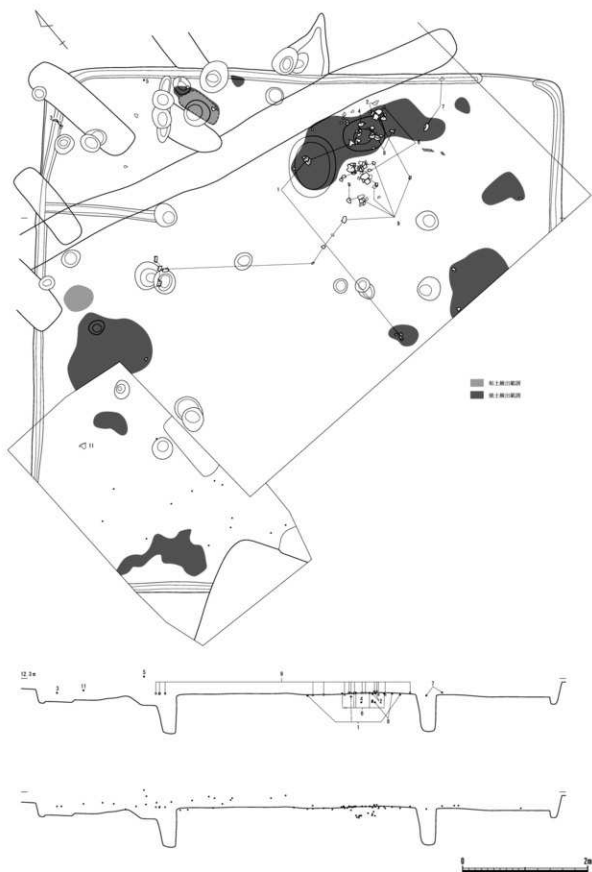
- F-F'
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 - 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
 - 3層 ロームブロック
 - 4層 埋土。

- G-G'
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 - 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 - 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
 - 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 - 5層 埋土。

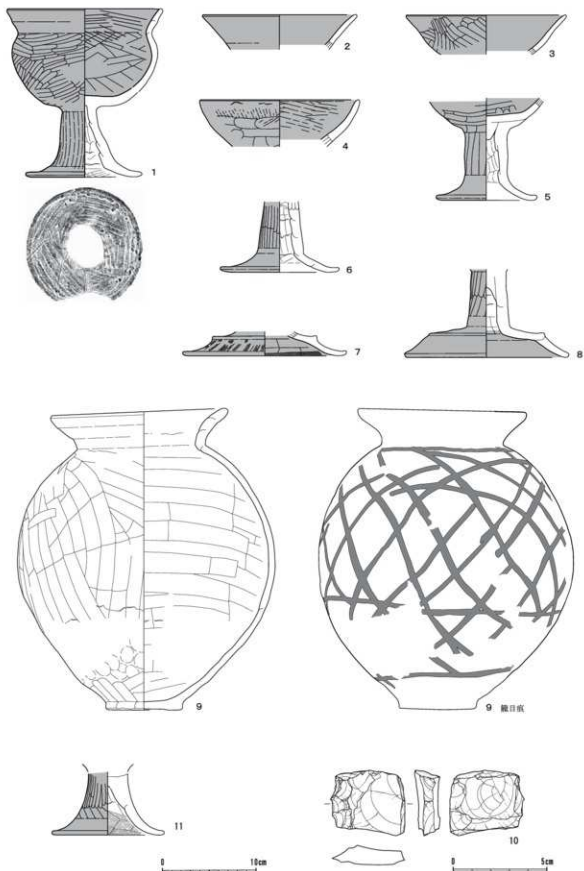
- H-H'
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを含む。
 - 2層 ロームブロック
 - 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 - 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 - 5層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
 - 6層 埋土。

- M-M'
- 1層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子をやや多く含む。
 - 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。埋土。
 - 3層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く、焼土粒子を多く含む。
 - 4層 暗茶褐色土 ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを多く含む。





第33図 251号住居跡遺物出土状態(1/60)



第34図 251号住居跡出土遺物 (1/4・1/2)

る。深さは52～71cm。P5は用途不明であるが、上層から焼土と粘土が検出され、覆土はローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

〔覆土〕8層に分層できた。7層から焼土が多く検出されている。

〔遺物〕土師器高環・甕形土器、石製品が出土した。今回の調査では高環の脚部1点(11)が出土した。

〔時期〕古墳時代後期(5世紀中葉)。

〔所見〕床面上の広い範囲で、焼土が検出されていることから、焼失住居の可能性がある。さらに特筆すべきは、玉造製作関連のものと考えられる硬質砂粒凝灰岩製の石器が1点出土したことである。また、カマドをもつ住居跡としては、市内最古の中道遺跡第37地点19住居跡(佐々木・尾形 1997)とほぼ同時期に比定される。

〔遺物〕(第34図、第12表)

〔土器〕(第34図1～9・11、第12表)

1～8・11は土師器高環形土器、9は土師器甕形土器である。

〔石製品〕(第34図10)

硬質細粒凝灰岩製の剥片で、玉造製作関連のものと思われる。長さ3.5cm・幅4.0cm・厚さ1.4cm・重さ20.9g。覆土中からの出土である。

253号住居跡

〔遺構〕(第35図)

〔位置〕(C-2)グリッド。

〔検出状況〕東コーナー付近が、第62③地点の調査で確認できた。252H・684Dに切られている。

〔構造〕平面形：長方形。規模：長軸4.60m/短軸4.40m/深さ4～11cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-75°-W。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅13～20cm/下幅8cm/深さ7～17cm。床面：中央付近が良く硬化していた。カマド：貯蔵穴の北側の覆土から粘土や焼土が検出されているので、北西壁にある可能性が高い。貯蔵穴：西コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸92cm/短軸62cm/深さ50cm。覆土は8層に分層できた。柱穴：P1・P2が主柱穴と思われる。深さは67・59cmを測る。

〔覆土〕10層に分層できた。

〔遺物〕土師器環・高環・甕形土器、鉄製品が出土した。今回の調査では追加資料がなかった。

〔時期〕古墳時代後期(6世紀初頭)。

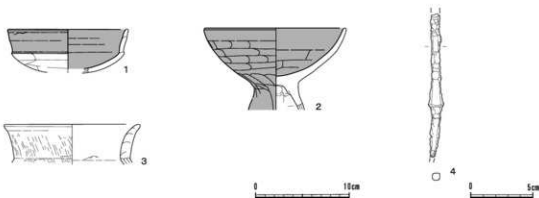
〔遺物〕(第36図、第13表)

〔土器〕(第36図1～3、第13表)

1は土師器環形土器、2は土師器高環形土器、3は土師器甕形土器である。

〔鉄製品〕(第36図4)

長頸タイプの鉄鎌である。現存長11.3cm・最大幅0.6cm・厚さ0.5cm・重さ11.5g。莖被部(のかつぎぶ)の断面は長方形で、莖被は若干幅広い関莖被(まちのかつぎ)の形状である。鎌身部と茎部(なかごぶ)の上下端を欠損する。南壁近くの床面上からの出土である。



第36図 253号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

254号住居跡

遺構 (第37図)

位置 (B-4) グリッド。

検出状況 第62㊸・㊹地点の調査で新たに検出された住居跡で、大部分が274・275 Hに切られ、696 Dにも切られている。

構造 平面形：長方形。規模：長軸約6.20m/短軸4.40～4.70m/深さ35～40cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-60°-W。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅14～25cm/下幅4～12cm/深さ3～9cm。床面：硬化した面は凸堤の一部に確認できたのみで、床面には確認できなかった。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：南西壁の中央よりやや南に偏って位置する。平面形は隅丸方形。1辺60～64cm/深さ51cm。覆土は4層に分層できた。東側に5cm程の高さの突堤が確認できた。柱穴：住居に伴うと思われるものは確認できなかった。

覆土 9層に分層できた。

遺物 土器器環・高坏・鉢・甔形土器、須恵器環・甕・把手付埴形土器が出土した。

時期 古墳時代後期(5世紀後葉)。

遺物 (第38図、第14表)

土器 (第38図1～10、第14表)

1は土器器環形土器、2は土器器高坏形土器、3は土器器鉢形土器、4・10は土器器甔形土器、5は土器器甔形土器、6は須恵器器環身形土器、7・8は須恵器器甕形土器、9は須恵器器把手付埴形土器である。

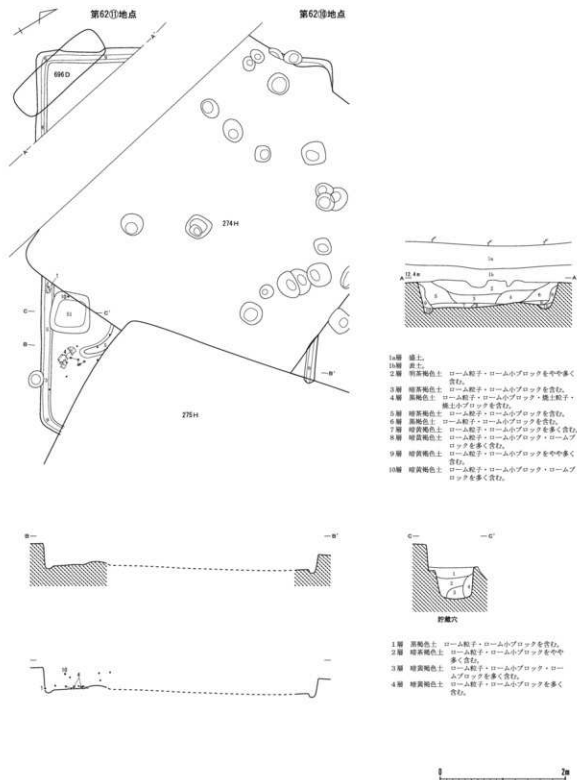
274号住居跡

遺構 (第39～41図)

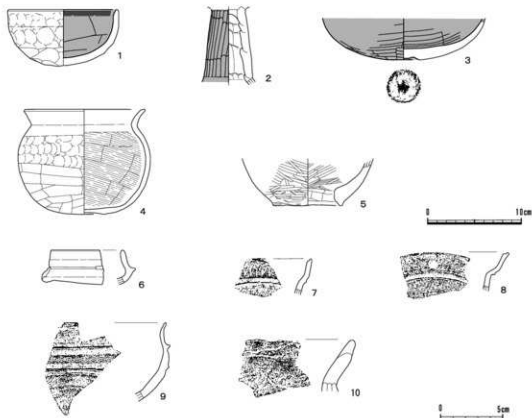
位置 (B-4) グリッド。

検出状況 第62㊸地点の調査で新たに検出された住居跡である。西コーナー付近は調査区域外である。275 Hに切られ、254 Hを切る。

構造 平面形：長方形。規模：長軸5.03m/短軸4.50m/深さ35～45cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-25°-W。壁溝：確認できた範囲ではカマドを除き全周する。東コーナー付近



第37図 254号住居跡・遺物出土状態(1/60)



第38図 254号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

は275 H床下からの検出である。上幅15～21cm/下幅4～6cm/深さ9～15cm。床面：中央付近が良く硬化していた。カマド：北西壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-23°-W。推定長さ105cm/推定幅80cm/壁への掘り込み35cm。灰褐色粘土が広範囲で検出されたことから、壁溝を埋め戻した後、粘土により袖部と天井部を構築したと思われる。住居上端から40cm程離れた所にある径30cmの被熱硬化した部分が燃焼部と考えられる。貯蔵穴：南東壁の中央よりやや東に偏って位置する。平面形は隅丸方形。南東側の上端は275 Hにより壊されている。推定長軸70cm/短軸60cm/深さ52cm。覆土は8層に分層できた。下層から炭化材が出土した。柱穴：P1～P4が主柱穴と思われる。深さは58～74cm。入口施設：確認できなかった。

〔覆土〕 8層に分層できた。

〔遺物〕 土師器坏・鉢・高坏・壺・甎形土器、ミニチュア土器、土製品が出土した。

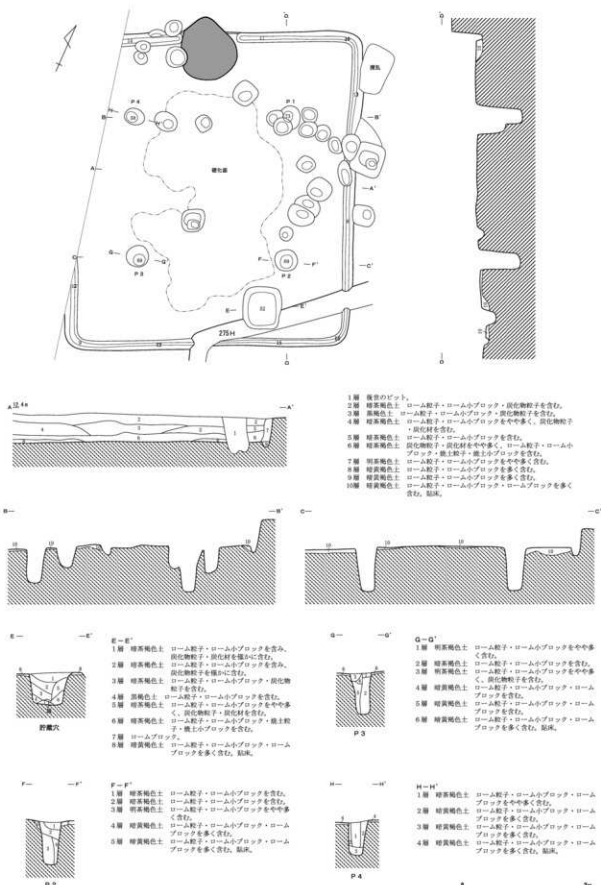
〔時期〕 古墳時代後期（7世紀前葉）。

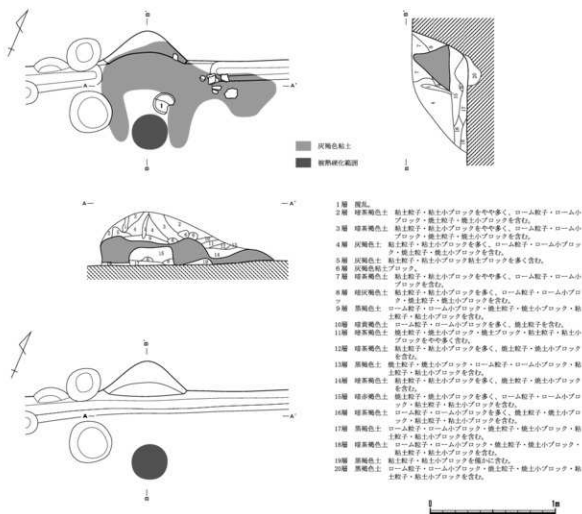
〔所見〕 床面上から炭化材や焼土粒子・焼土小ブロックが検出されていることから、焼失住居と思われる。

〔遺物〕 (第42・43図、第15表)

〔土器〕 (第42図1～13、第43図14・15、第15表)

1～7は土師器坏形土器、8は土師器鉢形土器、9は土師器高坏形土器、10～13は土師器甎形土器、14・15は土師器甎形土器である。





第40図 274号住居跡カマド (1/30)

[ミニチュア土器] (第43図16・17、第15表)

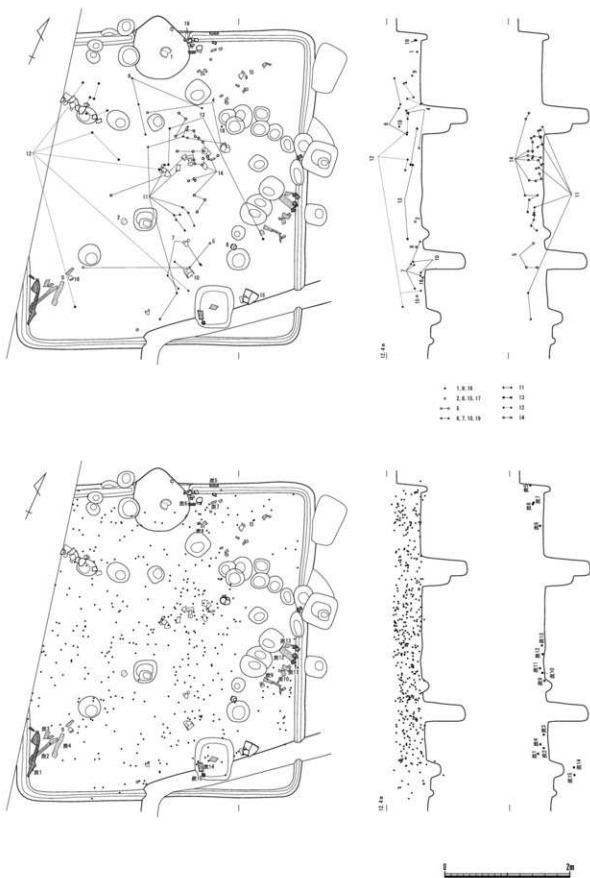
いずれもミニチュア土器である。

[土製品] (第43図18)

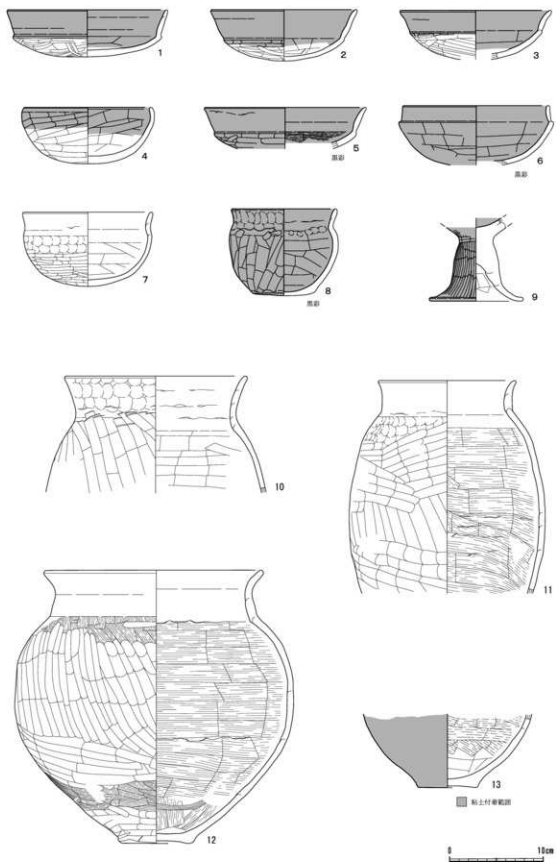
支脚である。現存高6.9cm・最大幅4.6cm・重さ50.0g。全体的に裾広がりの円筒形を呈する。色調は暗褐色を基調とし、砂粒を僅かに含む。全面に指頭押捺による成形痕が観察できる。P1近くの覆土中(床上33cm)からの出土である。

[その他] (図版20-19)

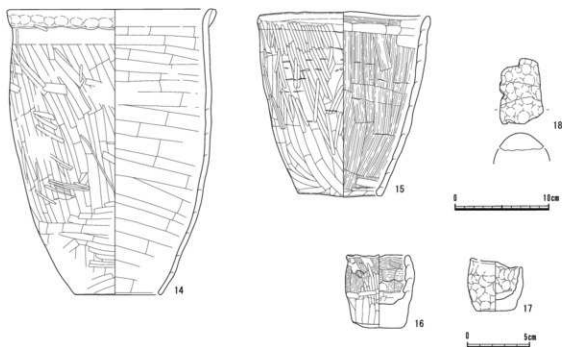
カマド天井部の被熱粘土と思われる。現存長17.2cm・最大幅・8.5cm。内面と思われる部分は推定径19.0cmの円形状のカーブをもつ。カマド天井部の掛口に相当する部分であろうか。



第41図 274号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第42図 274号住居跡出土遺物1(1/4)



第43図 274号住居跡出土遺物2 (1/4・1/3)

275号住居跡

遺構 (第44・45図)

[位置] (B・C-4) グリッド。

[検出状況] 第62㊟地点で北コーナー、第62㊟地点で西コーナーとその付近が検出されたのみで詳細は不明である。251・254・274 Hを切り、811 Dに切られる。

[構造] 平面形：方形。規模：不明×7.40m/深さ41～57cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅18～36cm/下幅6～12cm/深さ12～18cm。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。ほぼ直床である。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：P 1が主柱穴と思われる。深さは60cm。入口施設：P 2が入口梯子穴と考えられる。深さは28cm。

[覆土] 6層に分層できた。

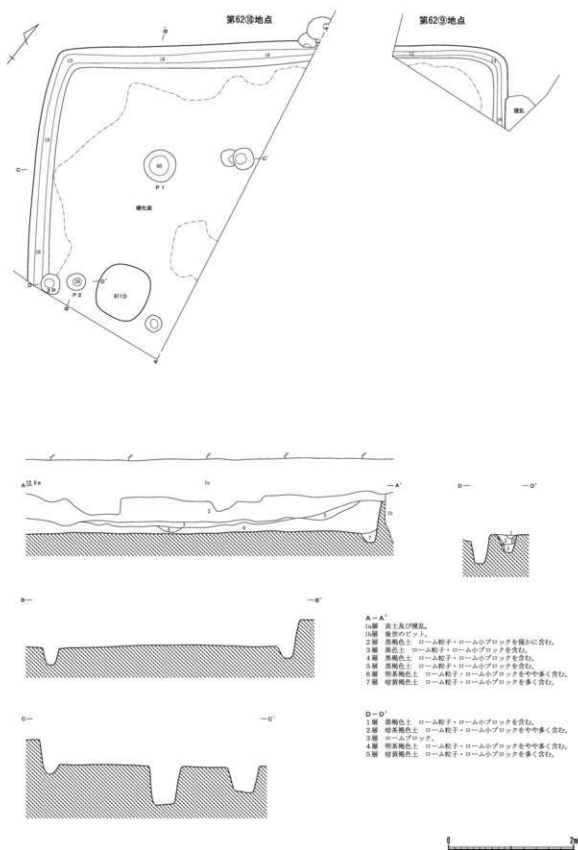
[遺物] 土師器環・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀中葉)。

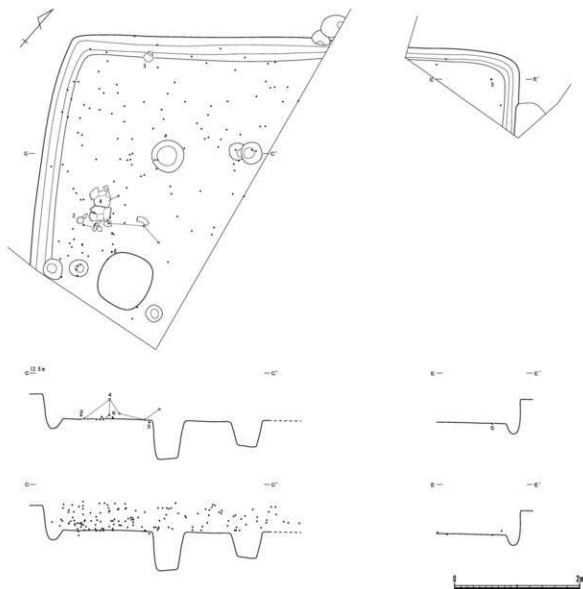
遺物 (第46図、第16表)

[土器] (第46図1～6、第16表)

1・2は土師器環形土器、3～6は土師器甕形土器である。なお、1の土師器環形土器については、精査時ではなく、確認調査のトレンチ内で本住居跡の東壁上層に相当する箇所からの出土であったが、ここでは本住居出土して扱うことにした。



第44図 275号住居跡 (1/60)



第45図 275号住居跡遺物出土状態(1/60)

276号住居跡

遺 構 (第47図)

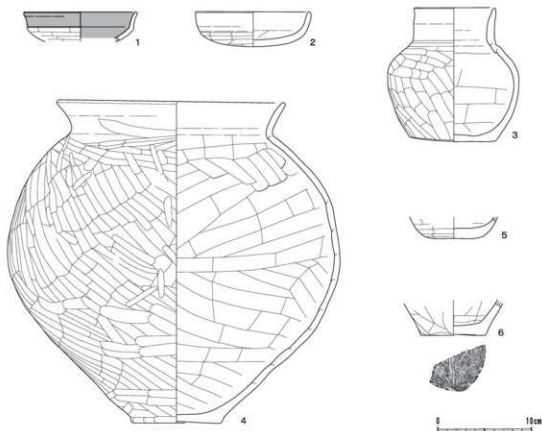
[位 置] (B-4) グリッド。

[検出状況] 第62㊸地点検出されたが、ほとんどが調査区域外であり、275 Hにも切られているため詳細は不明である。

[構 造] 平面形：不明。規模：不明/深さ35cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：一部確認できた。上幅25～37cm/下幅6～8cm/深さ5～8cm。床面：軟弱である。柱穴：確認できなかった。

[覆 土] 6層に分層できた。

[遺 物] 土師器坏・埴・甕形土器の破片が出土した。



第46図 275号住居跡出土遺物(1/4)

[時期] 古墳時代後期(5世紀後葉か)。

[遺物] (図版21-2、第17表)

[土器] (図版21-2-1~3、第17表)

1は土師器坏形土器、2は土師器埴形土器、3は土師器甕形土器である。

(2) 円形周溝墓

1号円形周溝墓

[遺構] (第48図)

[位置] (D-3) グリッド。

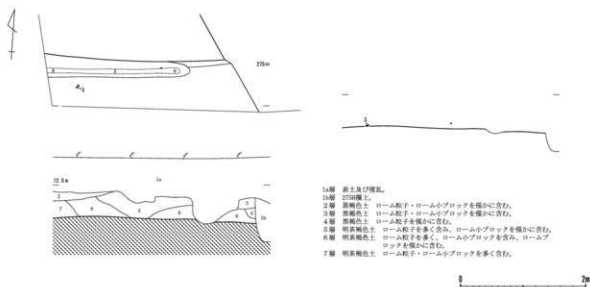
[検出状況] 第62⑧地点の調査で西側の周溝の4分の1程が検出されたが、第62⑦地点の調査では確認できなかったため、234Hに切られるものと考えられる。236Hと816~818Dにも切られる。

[構造] 平面形：円形。直径6.5m前後になるか。周溝：上幅46~55cm/下幅33~40cm/深さ14~19cm。

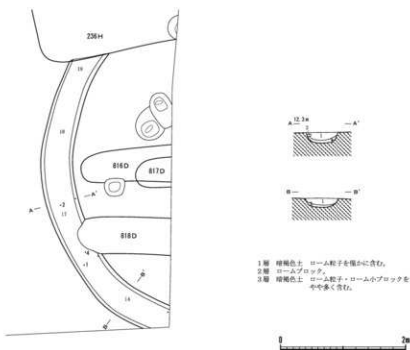
[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 土師器坏・甕形土器、須恵器甕形土器の破片が僅かに出土した。

[時期] 古墳時代後期(5世紀後葉~6世紀初頭か)。



第47図 276号住居跡 (1/60)



第48図 1号円形周溝墓 (1/60)

遺物 (図版21-3、第18表)

[土器] (図版21-3-1~4、第18表)

1・2は土器器坯形土器、3は土器器甕形土器、4は須恵器甕形土器である。

(3) ビット

調査区域内には数多くのビットが存在し、その大部分が中世以降に比定できるものと考えられる。今回の調査で、古墳時代～平安時代のビットと考えられるものは、6～8Pの3本が該当する。

6号ビット

遺構 (第6図)

[位置] (C-1) グリッド。第62③地点。

[構造] 平面形：ほぼ円形。規模：径44cm/深さ30cm。

[遺物] 土師器環・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期(6世紀初頭か)。

遺物 (第49図1・2)

[土器] (第49図1・2、第19表)

1は土師器環形土器である。2は土師器甕形土器と思われるが、甕形土器であるか。

7号ビット

遺構 (第6図)

[位置] (E-3) グリッド。⑥地点の調査で検出。

[検出状況] 689Dに切られる。

[構造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸45cm/短軸37cm/深さ52cm。

[遺物] 須恵器蓋・甕形土器の破片が出土した。

[時期] 平安時代。

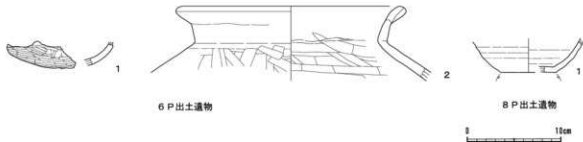
遺物 (図版21-4-1・2、第20表)

[土器] (図版21-4-1・2、第20表)

1は須恵器蓋形土器であろうか。2は須恵器甕形土器である。

8号ビット

遺構 (第6図)



第49図 ビット出土遺物 (1/4)

- [位置] (B-4) グリッド。⑥地点の調査で検出。
- [構造] 平面形：楕円形。規模：長軸36cm/短軸30cm/深さ39cm。
- [覆土] ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗茶褐色土を基調とする。
- [遺物] 須恵器環の破片が出土した。
- [時期] 平安時代（9世紀後葉か）。
- 遺物** (第49図、第21表)
- [土器] (第49図1、第21表)
- 須恵器環形土器である。

第6節 中世以降の遺構・遺物

(1) 土坑

687号土坑

- 遺構** (第50図)
- [位置] (E-3) グリッド。第62⑥地点。
- [検出状況] 確認面は西側から東側にかけて低くなり、その差18cm。
- [構造] 平面形：長方形。規模：長軸2.75m/短軸0.60m/深さ13~20cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。坑底は東側が10cm低い。長軸方位：N-80°-E。
- [覆土] 5層に分層できた。
- [遺物] 陶器1点が出土した。
- [時期] 中世（17世紀）。
- 遺物** (図版22-1-1、第22表)
- [陶器] (図版22-1-1、第22表)
- 1は陶器である。

688号土坑

- 遺構** (第50図)
- [位置] (E-3) グリッド。第62⑥地点。
- [検出状況] 東側は攪乱により確認できなかった。確認面は西側から東側にかけて低くなり、比高差は11cmである。
- [構造] 平面形：長方形。規模：長軸の確認できた長さ2.85m/短軸0.53m/深さ5~12cm。壁：急斜に立ち上がる。坑底は東側が17cm低い。長軸方位：N-80°-E。
- [覆土] 2層に分層できた。
- [遺物] 出土しなかった。
- [時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

689号土坑

遺構 (第50図)

[位置] (E-3) グリッド。第62⑥地点。

[検出状況] 7Pを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.20m／短軸0.74m／深さ23～65cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-80°-E。

[覆土] 5層に分層できた。

[遺物] 陶器1点が出土した。

[時期] 近世(18世紀)。

遺物 (図版22-1-1、第22表)

[陶器] (図版22-1-1、第22表)

1は陶器である。

690号土坑

遺構 (第50図)

[位置] (C-1) グリッド。第62③地点。

[検出状況] 後世のピットに切られる。数本のピットが重複するが、伴うかは不明である。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸0.97m／短軸0.94m／深さ10cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：N-10°-W。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

691号土坑

遺構 (第50図)

[位置] (C-2) グリッド。第62③地点。

[検出状況] 後世のピットに切られる。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸0.80m／短軸0.78m／深さ26cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：ほぼN-S。

[覆土] 上層がローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを含む暗黄褐色土。下層がローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

692号土坑

遺構 (第50図)

[位置] (C・D-2) グリッド。第62③地点。

[検出状況] 南側は調査区域外である。2基の重複形態を呈す。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸2.30m／短軸不明／深さ33～37cm。壁：緩やかに立ち上が

る。長軸方位：N-74°-W。

〔覆 土〕 9層に分層できた。

〔遺 物〕 出土しなかった。

〔時 期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

693号土坑

遺 構 (第6図)

〔位 置〕 (D-3) グリッド。第62㉔地点。

〔検出状況〕 西側は調査区域外であり、東側は確認面が低くなるため浅くなり確認できなかった。

〔構 造〕 平面形：長方形。規模：長軸の確認できた長さ2.70m/短軸0.50m/深さ1~13cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：ほぼE-W。

〔覆 土〕 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺 物〕 出土しなかった。

〔時 期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

694号土坑

遺 構 (第51図)

〔位 置〕 (D-3) グリッド。第62㉔地点。

〔検出状況〕 西側は調査区域外であり、一部のみの検出である。

〔構 造〕 平面形：方形か。規模：不明×1.20m/深さ25cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：不明。

〔覆 土〕 5層に分層できた。

〔遺 物〕 出土しなかった。

〔時 期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

695号土坑

遺 構 (第51図)

〔位 置〕 (B-3) グリッド。第62㉔地点。

〔検出状況〕 東側は調査区域外である。

〔構 造〕 平面形：方形か。規模：不明×0.94m/深さ14cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：不明。

〔覆 土〕 2層に分層できた。

〔遺 物〕 出土しなかった。

〔時 期〕 覆土の観察から、中世以降と思われる。

696号土坑

遺 構 (第51図)

〔位 置〕 (B-4) グリッド。第62㉔地点。

[検出状況] 254 Hを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.70m/短軸0.54m/深さ18cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。

長軸方位：N-10°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

811号土坑

遺構 (第51図)

[位置] (C-4) グリッド。第62④地点。

[検出状況] 275 Hを切る。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸0.87m/短軸0.83m/深さ17cm。壁：急斜に立ち上がる。

長軸方位：N-20°-W。

[覆土] 2層に分層できた。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

812号土坑

遺構 (第51図)

[位置] (B-1・2) グリッド。第62①地点。

[検出状況] 238 Hを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸1.43m/短軸0.98m/深さ35cm。壁：急斜に立ち上がる。

長軸方位：ほぼN-S。

[覆土] 8層に分層できた。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

813号土坑

遺構 (第6図)

[位置] (A-2) グリッド。第62①地点。

[検出状況] 南側は調査区域外である。647 Dを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸の確認できた長さ1.86m/短軸0.56m/深さ9cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：ほぼN-S。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

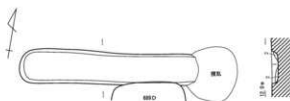
[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。



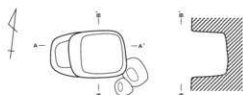
- 1層 明系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 2層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3層 灰褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 ロームブロック。

687号土坑



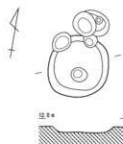
- 1層 明系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 2層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。

688号土坑



- 1層 明系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 2層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 3層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 4層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 5層 ロームブロック。
(粒子細い)

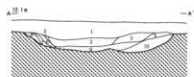
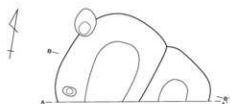
689号土坑



690号土坑



691号土坑

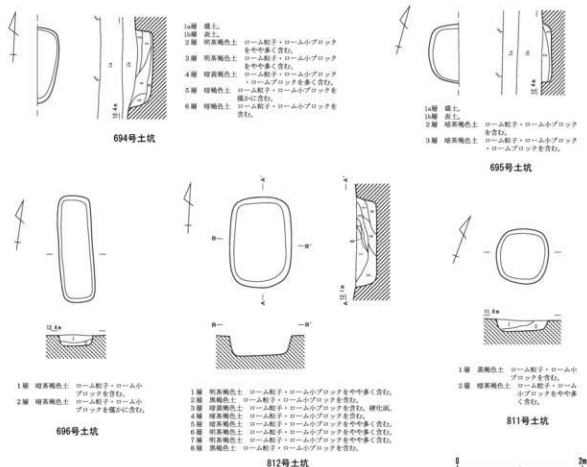


692号土坑

- 1層 盛土
- 2層 灰褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 3層 灰褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 灰褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 6層 灰褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 8層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 9層 暗系褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 10層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

第50図 土坑1 (1/60)





第51図 土坑2 (1/60)

814号土坑

遺構 (第6図)

[位置] (A-2) グリッド。第62①地点。

[検出状況] 北側は調査区域外である。647 Dに切られる。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸の確認できた長さ2.10m/短軸不明/深さcm。長軸方位：N-4°-E。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

815号土坑

遺構 (第6図)

[位置] (D-3) グリッド。第62②地点。

[検出状況] 236 Hを切る。北側は調査区域外である。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸の確認できた長さ4.08m/短軸0.50~0.54m/深さ16~22cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：N-5°-W。

- [覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土を基調とする。
 [遺 物] 出土しなかった。
 [時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

816号土坑

遺 構 (第6図)

- [位 置] (D-3) グリッド。第62⑧地点。
 [検出状況] 東側は調査区域外である。817 Dを切る。
 [構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸の確認できた長さ1.47m/短軸0.45～0.58m/深さ14cm。
 壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：ほぼE-W。
 [覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。
 [遺 物] 出土しなかった。
 [時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

817号土坑

遺 構 (第6図)

- [位 置] (D-3) グリッド。第62⑧地点。
 [検出状況] 東側は調査区域外である。816 Dに切られる。
 [構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸の確認できた長さ0.60m/短軸0.48m/深さ21cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：ほぼE-W。
 [覆 土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土を基調とする。
 [遺 物] 出土しなかった。
 [時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

818号土坑

遺 構 (第6図)

- [位 置] (D-3) グリッド。第62⑧地点。
 [検出状況] 東側は調査区域外である。1円を切る。
 [構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸の確認できた長さ1.55m/短軸0.60m/深さ17～20cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：ほぼE-W。
 [覆 土] 上層がローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土、下層がローム粒子を多く、ローム小ブロックをやや多く含む暗黄褐色土を基調とする。
 [遺 物] 出土しなかった。
 [時 期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

(2) 溝 跡

50号溝跡

遺 構 (第52図)

[位置] (E-4) グリッド。第62⑥地点。

[検出状況] 北側以外は調査区域外であり、ごく一部のみの検出である。51Mを切るか。

[構造] 規模：調査区内での全長は3.25m。溝幅は、上幅・下幅不明、確認面からの深さ95～102cm。走向方位：N-75°-E。

[覆土] 23層に分層できた。

[遺物] 磁器3点、陶器5点が出土した。

[時期] 近世（18世紀後半～19世紀）。

[遺物] (図版22-1-1～8、第22表)

[陶・磁器] (図版22-1-1～8、第22表)

1～3は磁器、4～8は陶器である。

51号溝跡

[遺構] (第52図)

[位置] (E-3・4) グリッド。第62⑥地点。

[検出状況] 北側と南側は調査区域外である。50Mに切られるか。

[構造] 規模：調査区内での全長は12.5m。溝幅は、上幅60～100cm、北側は確認できなかったがさらに50cm以上広がっている。下幅32～44cm、西側の確認面からの深さ16～26cm。走向方位：ほぼN-S。

[覆土] 3層に分層できた。

[遺物] 磁器2点・土器1点が出土した。

[時期] 近世（18世紀後半～19世紀）。

[遺物] (図版22-1-1～3、第22表)

[陶器・土器] (図版22-1-1～3、第22表)

1・2は磁器、3は土器である。

52号溝跡

[遺構] (第52図)

[位置] (E-3・4) グリッド。第62⑥地点。

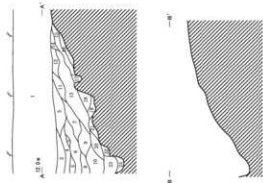
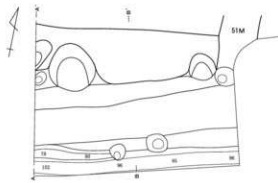
[検出状況] 西側は調査区域外であり、東側は確認面が低くなるため、浅くなり確認できなかった。

[構造] 規模：全長は4.50m。溝幅は、上幅40～85cm・下幅20～33cm・確認面からの深さ10～15cm。走向方位：N-80°-E。

[覆土] 4層に分層できた。

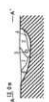
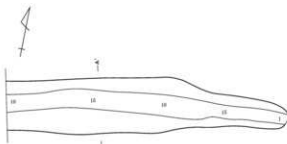
[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。



- 1層 赤土。
- 2層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。
- 3層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 5層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 6層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 7層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 8層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 9層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 10層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 11層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。
- 12層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 13層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。
- 14層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。
- 15層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 16層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 17層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 18層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 19層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 20層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 21層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。
- 22層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 23層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 24層 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

50号溝跡



- 1層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 2層 明黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3層 ローム小ブロック。
- 4層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

52号溝跡



- 1層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
- 2層 ローム小ブロック。
- 3層 軽黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。礫を多く含む。

51号溝跡



第52図 溝跡 (1/60)

第7節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、旧石器・縄文時代の石器、縄文時代の土器、中世以降の遺物に分類する。

(1) 旧石器・縄文時代の石器 (第53図1・2、第23表)

1は楔形石器、2は打製石斧である。

(2) 縄文時代の土器 (第54図3～30、第55図31～50、第24表)

遺構外出土の縄文土器は、各地点の総計で134点が出土したが、多くが小破片であった。ここではそのうち48点を図示する。時期別では早期条痕文系が95点と最も多かった。

3は早期前半の摺糸文系土器の破片である。

4は早期中葉の三戸式土器の破片である。非常に細い沈線で文様が描かれる。

5～30は早期後半の条痕文系土器の破片である。5・8は野島式、9・10は下吉井式、他は貝殻条痕文のみで形式は不明。下吉井式は胎土に微細な白色針状物質を含む。

31～35は前期の土器で、31～33は中葉の羽状縄文系土器の破片である。

34・35は前期後葉の諸磯式土器の破片で、いずれも文様は半截竹管による平行沈線で描画される。

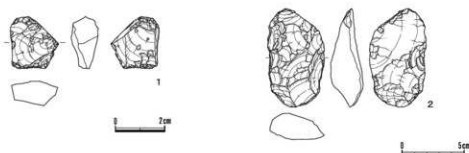
36～43は中期の土器片で、36・37は初頭の五領ヶ台式、38～41は前～中葉の阿玉台式、42は前～中葉の勝坂式、43は加曾利E式である。

44～49は後期の土器で、44は称名寺式、45は称名寺式もしくは堀之内式である。46～49は粗製土器である。

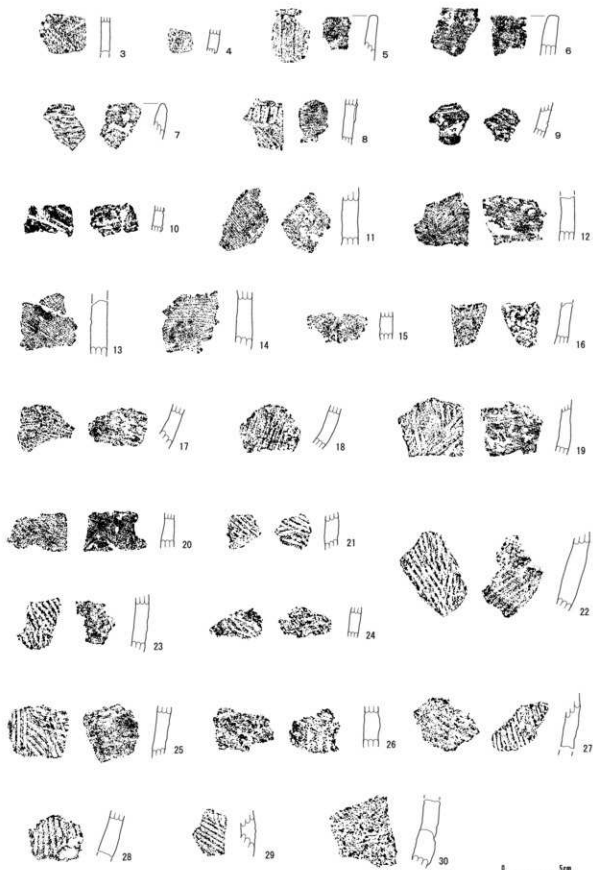
50は土器片錘で縦・横ともに糸を掛けた痕跡が見られる。

(3) 中世以降の遺物 (図版23-1-51～60、第25表)

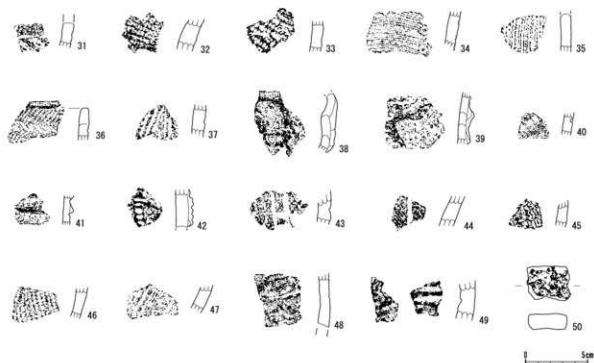
51・52は磁器、53～58は陶器、59・60は土器である。



第53図 遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)



第54図 遺構外出土遺物2 (1/3)



第55図 遺構外出土遺物3 (1/3)

() は保存績及び推定値

脚注番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第14図1	土師器 環	3.3	12.5	—	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境に稜をもつ/口縁部は直立気味/口縁部内面には幅2mmの沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・小石をやや多く含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	貯蔵穴付近の覆土中(床上7~20cm)から散在的	80%
第14図2	土師器 環	(3.6)	(12.5)	—	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境に丸味をもつ/口縁部内面には幅2mmの沈線がまわる/やや深身/内面及び口縁部外面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	貯蔵穴すぐ北側の覆土中(床上7cm)	30%
第14図3	土師器 環	(3.0)	(12.5)	—	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境に稜をもつ/口縁部は強く外反する/口縁部内面には幅1mmの沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	北東コーナーの覆土中(床上30・32cm)	口縁部~底部付近20%
第14図4	土師器 環	4.8	13.1	—	いわゆる比企型環/口縁部と底部との境に稜をもつ/口縁部は直立気味/口縁部内面には幅2mmの沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩	胎土は黄褐色を基調	砂粒・小石を多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	住居中央やや東寄りのほぼ床面上	80%

(単位：cm)

第7表 236号住居跡出土土器一覧(1)

() は取存値及び推定値

神田番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第14図5	土師器 環	(3.9)	(12.2)	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は外傾する/全面黒彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ削り	住居中央やや西壁寄りの覆土中(床土27cm)	口縁部～底部付近20%以下
第14図6	土師器 環	(2.1)	(12.0)	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/やや浅身/口縁部は外傾する/全面黒彩	胎土は暗黄褐色を基調	石英・角閃石・砂粒を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ削り	住居中央付近の覆土中(床土24・31cm)	口縁部～底部付近20%以下
第14図7	土師器 環	3.6	11.2	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は途中やや膨らみ外傾する/底部は平底気味/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・金雲母をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ削り	住居中央の覆土中(床土17cm)	完形品
第14図8	土師器 環	(3.7)	(12.2)	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は外傾する/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ(粗いヘラ磨き調整か)	住居中央の覆土中(床土13・14cm)	口縁部～底部付近60%以下
第14図9	土師器 環	(3.6)	(11.2)	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部はやや内湾気味に外傾する/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部高下は未調整であり、指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴上の覆土中(床土13・14・36cm)	口縁部～底部付近40%以下
第14図10	土師器 環	(3.6)	(11.0)	—	有段環/口縁部と底部との境に丸みをもつ/口縁部はやや内傾する/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ(粗いヘラ磨き調整か)	カマド右側の覆土中(床土36cm)	口縁部～底部付近20%以下
第14図11	土師器 鉢	(5.5)	(20.0)	—	口縁部と体部との境に段をもつ/口縁部は僅かに外反する/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り	住居中央の覆土中(床土19～33cm)から散在的	口縁部～体部上半30%以下
第14図12	土師器 甕	19.4	16.6	(7.8)	小型丸甕/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後斜方向のナデ(スリップか)	住居中央の覆土中(床土8～38cm)から散在的	70%
第14図13	土師器 甕	(7.0)	(22.0)	—	大型丸甕/口縁部は大きく外反する/硬質な焼きで作りは良好/在地系土師器	内面：暗黄褐色/外面：明褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はナデ(スリップか)	住居中央の覆土中(床土13cm)	口縁部～胴部上半20%以下
第14図14	土師器 甕	(30.0)	—	6.8	大型丸甕/最大径は胴部中位にもつ/底部は鉢部底に窪んでいる/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)	住居中央付近の覆土中(床土2～14cm)から散在的	胴部上半～底部40%以下
第14図15	土師器 甕	37.8	18.8	5.8	長甕/口縁部は大きく外反する/最大径は口縁部にもつ/外面は全体に黒く焼けている/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド右側の覆土中(床土10～13cm)	ほぼ完形品

(単位：cm)

第7表 236号住居跡出土土器一覽(2)

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第14図16	土師器 甕	36.7	20.1	5.6	長豊/口縁部は大きく外反する/口縁部に歪みあり/最大径は口縁部にもつ/外面は全体に黒く焼けている/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド右横(床上8cm)・北東コーナーの床面上	ほぼ完形品
第15図17	土師器 甕	35.5	17.8	5.5	長豊/口縁部は大きく外反する/最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置にもつ/胴部上半へ下半に粘土の付着が見られる/在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒・黄褐色粒子をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下は斜方向のヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリッパ)	貯蔵穴上層	ほぼ完形品
第16図32	土師器 杯	(2.3)	(13.0)	—	いわゆる比喩型杯/口縁部と底部との境に線をもち/口縁部は内傾気味/胴部内面には段をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り	住居中央付近の覆土中(床上38cm)	口縁部から底部15%以下
第16図33	土師器 杯	(2.6)	(13.0)	—	いわゆる比喩型杯/口縁部と底部との境に線をもち/口縁部は外傾気味/胴部内面には沈線がまわる/内面及び口縁部外面は赤彩	胎土は淡橙褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	住居中央付近の覆土中(床上26・32cm)	口縁部から底部15%以下
第16図34	土師器 杯	(4.3)	(12.2)	—	有段杯/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は直立する/内面及び口縁部外面は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	住居中央やや西壁寄りの覆土中(床上18cm)	20%
第16図35	土師器 杯	(3.9)	(13.1)	—	有段杯/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は直立気味に外反する/無彩/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	住居中央やや西壁寄りの覆土中(床上23・37cm)	20%
第16図36	土師器 鉢	(7.0)	—	—	鉢であろう/底部は丸底/外面底部には沈線状の庄底か/全体的に黒く焼けていることから全面黒彩と思われる	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：ヘラ削り後底部付近は横方向の粗いヘラ磨き調整か	住居中央付近の床面上及び覆土中(床上32cm)	胴部下半へ底部40%
第16図37	土師器 甕	(17.3)	(20.4)	—	丸豊/口縁部は大きく外反する/最大径は胴部中位か/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、胴部は上半がハゲ目調整、中位以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ、さらに粗いヘラ磨き調整	南壁中央近くの覆土中(床上17~27cm)	口縁部~胴部中位30%
第16図38	土師器 甕	(6.9)	—	7.8	小型丸豊/底部は平底/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ、中位以下はヘラナデ/外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居中央付近の覆土中(床上17~46cm)	胴部下半へ底部60%から散在的
第16図39	土師器 甕	(3.8)	—	7.6	丸豊/底部は平底/底部には木炭灰が僅かに残る/在地系土師器	暗橙褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	住居中央付近の覆土中(床上12~44cm)	胴部下半へ底部60%から散在的

(単位：cm)

第7表 236号住居跡出土土器一覧(3)

() は現存値及び推定値

神田番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第16図40	土師器 甕	(3.6)	—	7.4	丸蓋/底部は平底で中央がやや窪んでいる/外面は黒く輝いている/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金粟母・小石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り/外面には指頭押捺による成形痕が顕著に残る	住居中央からややP3寄りの覆土中(床上9cm)	胴部下半～底部60%
第16図41	須恵器 甕	—	—	—	複合口縁の一部が残る/頸部には櫛形波状文が施文	灰褐色を基調	白色砂粒を含む	ロクロ成形	覆土中(⑥地点)	頸部小破片
第16図42	須恵器 甕	—	—	—	胴部/やや肩が張る器形	灰色を基調	黒色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	ロクロ成形	南東コーナーの覆土中(床上30cm)	胴部上半の破片
第16図43	須恵器 甕	—	—	—	胴部/やや肩が張る器形	灰色を基調	砂粒・小石を含む	内面：ナデられるが当て道具痕が残る/外面：全体的にナデられるが平行叩き目痕が残る	P3近くの覆土中(床上13～47cm)から散在的	胴部上半の破片
第16図44	須恵器 甕	—	—	—	胴部/やや肩が張る器形/外面は自然釉による被焼あり	灰褐色を基調	黒色粒子・白色砂粒を含む	内外面：ていねいにナデられる	P4内	胴部上半の破片
第16図45	須恵器 甕	—	—	—	胴部	表面：濃灰褐色/内部：暗茶褐色	白色砂粒を僅かに含む	内面：ナデ/外面：平行叩き目痕が残る/内面には自然釉と煎煙の一部が付着	覆土中(⑥地点)	胴部小破片

(単位：cm)

第7表 236号住居跡出土土器一覽(4)

() は現存値及び推定値

神田番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第19図1	土師器 環	3.6	13.5	—	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反する/口唇部内面に沈線なし/口縁部と底部との境は丸みをもつ/遺存状態が悪く、赤彩は不明/キシレン溶液(パラロイドB72)含浸	淡茶褐色	砂粒・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	南西コーナー付近の床面上	ほぼ完形品
第19図2	土師器 環	(2.9)	(13.6)	—	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反する/口唇部内面に沈線なし/口縁部と底部との境に線をもち/内面及び外面口頸部に赤彩あり	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居中央やや西側の覆土中(床上9cm)	20%
第19図3	土師器 高環	(8.8)	—	(11.4)	胴柱部中位にやや膨らみをもつ/裾部は大きく外反する/坏部内面及び外面に赤彩あり	胎土は淡黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：坏部はヘラナデか、脚台部は裾部が横ナデ、胴柱部はヘラナデ/外面：裾部は横ナデ、坏部～胴柱部は粗いヘラ磨き調整(幅4mm程)	西壁近くの覆土中(床上9～12cm)	坏部下半～脚台部60%
第19図5	土師器 環	(3.0)	(12.0)	—	いわゆる比企型環/扁平な器形/口縁部は短く外反する/口唇部内面に沈線なし/口縁部と底部との境は丸味をもつ	胎土は暗茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	入口部凸堤の西側の覆土中(床上20cm)	20%以下

(単位：cm)

第8表 238号住居跡出土土器一覽(1)

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第19図6	土師器 杯	3.8	(12.5)	—	いわゆる比企型杯/口縁部は短く外反する/口唇部内面に沈線なし/口縁部と底部との境は丸味をもつ/赤彩なしか/在地系土師器か	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：横ナデ(回転ナデ)/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	入口部凸堤の西側のほば床面上	60%
第19図7	土師器 杯	4.3	12.2	—	有段杯/口縁部は直立する/口縁部と底部との境に弱い段をもつ/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：横ナデ(回転ナデ)/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/回転台使用の可能性あり	入口部凸堤の西側のほば床面上から散在的	80%
第19図8	土師器 杯	4.3	12.7	—	有段杯/口縁部は外反する/口縁部と底部との境に弱い段をもつ/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部直下には指張押捺による成形痕が顕著に残る	入口部凸堤上	60%
第19図9	土師器 杯	3.9	14.2	—	有段杯/口縁部は直立する/口縁部と底部との境に弱い段をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部直下には指張押捺による成形痕が顕著に残る	入口部凸堤内側のほば床面上から散在的	80%
第19図10	土師器 杯	4.5	14.4	—	有段杯/口縁部は大きく外反する/口縁部と底部との境に段をもつ/在地系土師器	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り/外面口縁部直下には指張押捺による成形痕が残る	入口部凸堤上方の覆土中(床上9cm)	完形品
第19図11	土師器 鉢	11.6	(26.4)	(8.4)	大型鉢/口縁部は僅かに外反する/口縁部と体部との境はスムーズである/底部は平底/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：ヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	P2すぐ東側の覆土中(床上17cm)	60%
第19図12	土師器 甕	(26.2)	(22.2)	—	長豊/口縁部は大きく外反する/最大径は口縁部にもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居中央の覆土中(8cm)とP4上層	口縁部～底部下半50%
第19図13	土師器 甕	(30.9)	(19.4)	—	長豊/口縁部は大きく外反する/最大径は口縁部にもつ/外面胴部中位以下には粘土付着/在地系土師器	暗黄褐色～暗褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	P3内及びその周辺のほば床面上から散在的	口縁部～底部下半50%

第8表 238号住居跡出土土器一覽(2)

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第22図1	土師器 杯	(4.0)	(13.0)	—	いわゆる比企型杯/全体的にシャープな作り/口縁部は内傾し、口唇部内面には沈線(幅2mm程)がまわる/外面底部を除き赤彩/入麗系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド右横の床面上	口縁部～底部付近20%以下
第22図2	土師器 杯	(4.0)	(13.6)	—	有段杯/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は外反する/全面黒彩/在地系土師器と思われる	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ	P5の西側の覆土中(床上28cm)	口縁部～底部付近20%

(単位：cm)

第9表 243号住居跡出土土器一覽(1)

() は現存値及び推定値

神四番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第22図3	須恵器 杯身	(2.4)	—	—	口縁部は直立するが、僅かに外反する／口縁部は丸い／受部は水平／湖西製品か	灰色	黒色微粒子を僅かに含む／やや大きめの石英(2mm程)を1粒	内外面：ロコロ成形	覆土中	口縁部～底部付近の小破片
第22図4	土師器 高杯	(6.3)	—	(10.6)	脚台部の器形は「ハ」字状／胴部は外反する／内面には輪積み痕あり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く含む	内面：胴部はナデ、脚柱部に指頭押捺による成形痕が残る／外面：胴部は横ナデ、脚柱部はヘラ削り	入口施設の右側の覆土中(床上13cm)	脚台部のみ70%
第22図5	土師器 鉢	12.4	(20.0)	6.2	口縁部は外反する／口縁部と底部との境に弱い稜をもつ／底部は唇形底状／蓋があり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・石英・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ(スリップか)、部分的に細長いヘラ磨き状のナデ	入口施設周辺の覆土中(床上11～19cm)	40%
第22図6	土師器 甕	35.4	15.6	7.8	口縁部は外反する／口縁部と底部との境はスムーズ／最大径は胴部中位にもつ／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ(スリップか)／外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴周辺の覆土中(床上2～23cm)から散在的	80%
第22図7	土師器 甕	35.2	(20.0)	7.8	口縁部は外反する／口縁部と底部との境に弱い稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／底部に木葉痕あり／外面には粘土付着あり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後、胴部中位以下を中心に細長いヘラ削りナデ	北コーナー～貯蔵穴の覆土中(床上2～11cm)から散在的	50%
第22図8	土師器 甕	26.9	26.6	(9.2)	口縁部は大きく外反する／底部は筒状／長胴よりやや幅広タイプ／在地系土師器	淡黄褐色～明褐色	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後胴部中位以下を中心に細長いヘラ磨き／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴周辺の覆土中(床上2～8cm)から散在的	40%

第9表 243号住居跡出土土器一覽(2)

() は現存値及び推定値

神四番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第27図1	土師器 杯	2.8	(12.0)	—	扁平タイプ／口縁部は外傾する／底部から口縁部にかけて細曲し稜をもつ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P3周辺の覆土中(床上641cm)	口縁部～底部付近30%
第27図2	土師器 甕	(7.5)	(18.4)	—	長豊／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は明瞭な段をもつ／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)	P1の東縁の覆土中(床上9cm)	口縁部～胴部上半30%
第27図3	土師器 甕	(17.4)	—	6.6	長豊／平底／底部には木葉痕あり／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	P1周辺の覆土中(床上3～20cm)から散在的	胴部中位～底部40%
第27図4	土師器 甕	(10.5)	—	(7.5)	丸豊／球調／平底／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・石英・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴内及び周辺の覆土中(床上3～13cm)	胴部中位～底部50%

(単位：cm)

第10表 248号住居跡出土土器一覽

神図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第30図1	土師器 環	2.8	(12.6)	—	いわゆる比企型環/扁平タイプ/口縁部には沈線が回らない/膠手でシャープな作りの土器/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は淡茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部は横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ磨き調整か	柱穴すぐ西側の床面上	20%以下
第30図2	土師器 環	4.6	13.5	—	有段環/口縁部と底部との境に線をもち/口縁部は僅かに外反する/在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を含む	内面：横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ削り/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴内	90%
第30図3	土師器 環	4.5	11.0	—	有段環/須直器環身模倣/口縁部と底部との境に線をもち/口縁部は内傾する/全面黒彩/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・小石を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	貯蔵穴内	口縁部を僅かに欠損/90%以上
第30図4	土師器 環	(4.0)	(12.8)	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は直立する/全面黒彩/搬入品	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	貯蔵穴の右縁	60%
第30図5	土師器 環	4.2	12.3	—	有段環/口縁部と底部との境に段をもつ/口縁部は外反する/全面黒彩/口縁部は磨耗が著しい/内面底部には刺突痕が4箇所確認できる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	住居南側の床面上	口唇部を僅かに欠損するが、ほぼ完形品
第30図6	土師器 環	5.7	(13.8)	4.6	いわゆる内傾口縁環/口縁部は外反気味/底部は甚弱直/全面赤彩/人間系土師器か/本住居跡の時期とは異なるため搬入品か	胎土は暗赤褐色	金雲母・砂粒を僅かに含む	内面：ナデ後極細(幅1mm程)の暗文/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ	柱穴の東側の覆土中(床上5cm)	40%
第30図7	土師器 甕	13.6	13.2	6.5	小型丸甕/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/底部は丸底風/在地系土師器	淡黄褐色	黄褐色粒子・石英・砂粒を含み、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴の南側の床面上	完形品
第30図8	土師器 甕	31.4	19.5	9.5	丸甕/口縁部は丸い/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/平底/在地系土師器	暗黄褐色～明褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	カマド左袖とその周辺から散在的	90%
第30図9	土師器 甕	(8.2)	—	5.6	丸甕/平底/在地系土師器	暗茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	カマド左袖	胴部下半～底部30%
第30図10	土師器 甕	37.6	18.4	5.7	長甕/口縁部は外反する/最大径は口縁部にもつ/口縁部と胴部との境は横ナデによる段差をもつ/平底/外面のほぼ全面に粘土が付着する/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：粘土の付着により判別が難しいが、口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)か	カマド左袖～貯蔵穴にかけて散在的	90%
第30図11	土師器 甕	38.2	19.2	6.0	長甕/口縁部は外反する/最大径は口縁部にもつ/平底/在地系土師器	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなナデ(スリップか)	貯蔵穴東側の床面上を中心して散在的	80%

(単位：cm)

第11表 250号住居跡出土土器一覽(1)

() は取付位置及び推定値

神田番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第31図12	土師器 甕	(25.0)	(19.6)	—	長豊/口縁部は外反する/最大径は口縁部にもつ/口縁部と胴部との境は横ナデにより前い隙差をもつ/全体的にやや器厚(7mm程)が厚い/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/面口縁部直下に指頭押掃による成形痕が残る	カマド内～貯蔵穴にかけて散在的	口縁部～胴部下半70%
第31図13	土師器 甕	(14.9)	(19.2)	—	長豊/口縁部は外反する/口縁部に歪みあり/口縁部と胴部との境はスムーズ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ後ナデ(スリップか)	貯蔵穴内及びその東側の床面上～覆土中(床上26cm)	口縁部～胴部上半20%
第31図14	土師器 甕	(6.0)	(20.4)	—	長豊/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境はスムーズ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ後ナデ	柱穴上の覆土中(床上26・34cm)	口縁部～胴部中位30%
第31図15	土師器 甕	(15.1)	—	6.2	長豊/平底/在地系土師器	淡茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ後いねいなナデ(スリップか)	カマド～貯蔵穴に散在的	胴部中位～底部90%以上
第31図16	土師器 甕	(8.9)	—	7.2	長豊/平底/在地系土師器	暗黄褐色～暗褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ後粗いナデ	貯蔵穴の東側の覆土中(床上5～8cm)	胴部下半～底部30%
第31図17	土師器 甕	(4.2)	—	6.6	長豊/平底/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ後ナデ(スリップか)	貯蔵穴の南側の覆土中(床上22cm)	胴部下半～底部70%
第31図18	土師器 甕	(4.6)	—	7.6	長豊/平底/在地系土師器	明褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ	柱穴の西側の覆土中(床上19cm)	胴部下半～底部50%
第31図19	土師器 甕	(4.4)	—	7.0	長豊/平底/底部に木葉痕あり/全体的に黒く保っているものか	胎土は茶褐色を基調	砂粒を含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラナデ	西コーナーの覆土中(床上30cm)	胴部下半～底部40%
第31図20	土師器 甕	29.3	24.1	9.2	底部は筒抜け式/口縁部は外反する/全体的に器厚(7mm程)は厚い/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ後縦方向の粗いヘラナデ調整/外面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ後ナデ(スリップか)	カマド内～貯蔵穴にかけて散在的	80%
第31図21	土師器 甕	(21.7)	(23.5)	—	底部は欠損するが甕と思われる/口縁部は大きく外反する/最大径は口縁部にもつ/在地系土師器	暗黄褐色～明褐色	砂粒をやや多く、角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ後いねいなナデ(スリップか)	貯蔵穴周辺の床面上～覆土中(床上3～33cm)から散在的	口縁部～胴部中位40%
第31図25	土師器 環	3.6	(12.0)	—	有段环/口縁部は途中僅かに膨らみをもち傾する/内外面黒彩/在地系土師器	胎土は淡茶褐色	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下は粗いヘラナデ	カマドすぐ右側の覆土中(床上18cm)	30%
第31図26	土師器 環	(4.3)	(12.6)	—	有段环/須恵器身模倣/口縁部は内傾する/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ。以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ。以下は粗いヘラナデ	貯蔵穴内及び北壁近くの覆土中(床上22cm)	20%

(単位：cm)

第11表 250号住居跡出土土器一覽(2)

押出番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第34図1	土師器 高环	17.8	(16.5)	12.4	坏部：深身の埴タイプ／「く」字状口縁／大径は口縁部にもつ／ 脚台部：裾部は大きく外反する／ 脚台部内面を除き赤彩／ 脚台部内面には輪積み痕が顕著に残る／ 入間系土師器か	胎土は淡茶褐色～暗黄褐色	茶褐色粒子・角閃石・砂粒・小石を含む	内面：坏部は口縁部がハケ目調整、体部はヘラナデ、脚台部は裾部がハケ目調整、脚柱部にはひだ状(絞りの成形痕あり)／ 外面：坏部は口縁部が横ナデ、体部は粗いヘラ磨き調整、部分的にハケ目痕が残る、脚台部は脚柱部がハケ目調整後ヘラ削り、裾部は横ナデ／ ハケ目調整は目の粗い工具による	住居東半部の床面上から散在的	60%
第34図2	土師器 高环	(3.7)	(16.4)	—	口縁部は外植する／ 全面赤彩／ 入間系土師器	胎土は淡赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内外面：横ナデ(回転ナデか)	カマドの南の床面上	口縁部40%
第34図3	土師器 高环	(4.2)	(17.0)	—	口縁部は外植する／ 全面赤彩／ 入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	角閃石・砂粒・小石(大きなもので6mm程)を含む	内面：横ナデ(回転ナデか)／ 外面：横ナデ後粗いヘラ磨き調整	北コーナーの覆土中(床土7cm)	口縁部40%
第34図4	土師器 高环	(5.0)	(17.0)	—	口縁部は内湾する／ 全面赤彩であるが、 内面の赤彩は赤味が強く、 塗料が厚く、 付着痕である可能性あり／ 入間系土師器か	胎土は暗黄褐色～淡赤褐色	角閃石・砂粒を僅かに含む	内面：粗いハケ目調整後横方向にヘラ削り	カマドの南側の覆土中(床土10cm)	口縁部30%
第34図5	土師器 高环	(10.8)	—	(10.7)	坏部：底部には明確な縁はなし／ 脚台部：長脚タイプ、 裾部は大きく外反する／ 坏部と脚台部の接合はソケット状／ 脚台部内面を除き赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母・小石(大きなもので6mm程)を僅かに含む	内面：坏部はナデ、脚台部は裾部が横ナデ、脚柱部にはひだ状(絞りの成形痕が観察される)／ 外面：坏部は粗いヘラ磨き調整か、 脚台部は脚台部が縦方向のナデ、 裾部は横ナデ	北コーナーの北東壁際の覆土中(床土34cm)	坏部下半～脚台部70%
第34図6	土師器 高环	(7.5)	—	12.6	長脚タイプ／ 裾部は大きく外反する／ 内面を除き赤彩	暗黄褐色を基調	砂粒を好み、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：裾部は横ナデ(回転ナデか)、 脚柱部にはひだ状(絞りの成形痕が観察される)／ 外面：脚柱部はヘラ磨き調整、 裾部は横ナデ(回転ナデか)	カマドの南側の床面上から散在的	脚台部90%
第34図7	土師器 高环	(2.6)	—	17.3	有段タイプ／ 裾部の途中に段をもち、 裾部はさらに外反する／ 全面赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内外面：裾部は全体に横ナデ(回転ナデか)により仕上げられているが、 細かいハケ目痕が部分的に残る	北東壁近くの床面上(床土3・8cm)	脚台部の裾部50%
第34図8	土師器 高环	(9.4)	—	(17.6)	有段タイプ／ 脚柱部は直径4cmと細く直立する／ 裾部の途中に段をもち、 裾部はさらに外反する／ 脚台部の脚柱部を除き赤彩／ 入間系土師器	胎土は淡赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石(大きなもので10mm程)を僅かに含む	内面：脚柱部はヘラ削り、 裾部は横ナデ(回転ナデか)／ 外面：脚柱部は粗いヘラ磨き調整、 裾部は横ナデ(回転ナデか)	カマドの南側の床面上及び覆土中(床土7～10cm)	脚台部95%以上

(単位：cm)

第12表 251号住居跡出土土器一覧(1)

() は現存値及び推定値

押収番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第34図9	土師器 壺	32.0	18.8	8.0	「く」字状口縁/口縁部外面を僅かに肥厚させ、複合口縁を底腹に設けるものか/胴部中に最大径をもつ/底部は平底であるが、周辺を除きやや窪んでいる/胴部外面には臍目痕あり	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石(大きなものは6mm程)を僅かに含む	内面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面: ヘラ削り後ヘラナデ/外面胴部下半には指頭押捺による成形痕が観察できる	住居北半部の床面上～覆土中(床下7～10cm)から散在的	70%
第34図11	土師器 高坏	(6.7)	—	(11.8)	長脚タイプ/脚柱部に僅かに膨らみをもち、裾部は大きく外反する/外面は赤彩	胎土は淡茶褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面: 脚柱部はヘラ削り、裾部はハケ目調整/外面: 脚柱部は粗いヘラ磨き調整、裾部は横ナデ	西コーナー付近のほぼ床面上	脚柱部40%

(単位: cm)

第12表 251号住居跡出土土器一覽(2)

() は現存値及び推定値

押収番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第36図1	土師器 环	(4.6)	(12.8)	—	有段段/口縁部と底部との境に段をもつ/内面及び口縁部は赤彩/入間系土師器	胎土は淡赤褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒子を僅かに含む	内面: 横ナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ	貯蔵穴北側の覆土中(床下6cm)	40%/底部を欠損
第36図2	土師器 高坏	(8.7)	15.0	—	高坏/坏部: 内湾タイプ/脚部: 下端を欠損する/脚台部内面を除き赤彩/入間系土師器	胎土は淡赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母を僅かに含む	坏部: 内面はナデ、外面は口縁部が横ナデ、以下はヘラ削り/脚台部: 内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ磨き調整	貯蔵穴北側の坏部上及び覆土中(床下6cm)	坏部70% 脚台部10%
第36図3	土師器 壺	(4.2)	14.4	—	口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は屈曲する	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を含む	内面: 横ナデ/外面: ハケ目調整後横ナデ	貯蔵穴東側のほぼ床面上	口縁部30%

(単位: cm)

第13表 253号住居跡出土土器一覽

() は現存値及び推定値

押収番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第38図1	土師器 环	6.0	11.8	—	深身の地タイプ/外面の挟るようなヘラ削り痕が特徴である/内面赤彩	胎土は暗黄褐色	茶褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面: 口縁部は柱状状に見られるがハケ目調整か、以下はヘラナデ/外面: 口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り/外面口縁部～直下には指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴すぐ西側の壁面上層	完形品
第38図2	土師器 高坏	(8.3)	—	—	長脚タイプ/脚柱部と裾部との境は屈曲する/外面赤彩	胎土は暗褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面: 脚柱部はひだ状の成形痕が残る、裾部はヘラ磨き調整か/外面: 脚柱部は縦方向のヘラ磨き調整、裾部は横ナデ	覆土中	脚柱部～裾部70%
第38図3	土師器 鉢	(4.4)	—	3.6	大型鉢か/体部は膨らみをもつ/底部は基調底/全面赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面: ヘラナデ/外面: ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	覆土中	体部下半～底部60%
第38図2	土師器 壺	11.1	12.8	4.0	小型壺か/「く」の字口縁/最大径は胴部中位にもつ/底部は赤彩基調底状/入間系土師器か	暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面: 横ナデ、以下はハケ目調整/外面: 口縁部は横ナデ、胴部は中位以下がヘラ削り、口縁部から胴部中位には指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴すぐ東側のほぼ床面上	90%

(単位: cm)

第14表 254号住居跡出土土器一覽(1)

() は現存値及び推定値

押図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第38図5	土師器 甌	(5.0)	—	(7.2)	筒抜け式／底部断面は 肥厚している	暗黄褐色 を基調	茶褐色粒子 砂粒・小石 をやや多く 含む	内外面：ヘラ磨き調整 ／底部端はヘラ削り により成形されている	覆土中	胴部下半～ 底部20%
第38図6	須恵器 杯身	(2.7)	—	—	口縁部は内傾する／ 唇部は丸い／受け部 は水平	濃灰色	白色砂粒を 僅かに含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部～底 部破片
第38図7	須恵器 甌	(2.9)	—	—	精巧な作り／有段口縁 ／口縁部はやや内湾気 味に開く／口縁部と頸 部に縞線状文が施文 される／波状文は8に 比べ振幅が大きく粗い ／陶色製品	濃灰色	砂粒を僅か に含む	ロクロ成形	覆土中	口頸部破片
第38図8	須恵器 甌	(3.3)	—	—	精巧な作り／有段口縁 ／口唇部は丸線状／口 縁部は内湾気味に開く ／口縁部と頸部に縞 線状文が施文／波状文 は口縁部の方が振幅が 大きく粗い／内面に自 然釉がかかる／陶色製 品	濃灰色	砂粒を僅か に含む	ロクロ成形	覆土中	口頸部破片
第38図9	須恵器 把手付 埴	(6.6)	—	—	精巧な作り／口縁部は 外反する／口唇部内 面に丸線がまわる／体 部は上下2本の有段に より区画される／有段 区画内には3本1単位 の縞線状文が施文され る／陶色製品	濃灰色	砂粒を僅か に含む	ロクロ成形	覆土中	口縁部～体 部破片
第38図10	土師器 甌	(4.3)	—	—	口縁部「く」の字口 縁になるか／外面には 輪積み痕が残る	暗茶褐色 を基調	角閃石・砂 粒・小石を 含む	内面：ヘラナデ／外 面：口縁部は横ナデ 製部上半には指面押捺 による成形痕が残る	貯蔵穴の上方 の覆土中（床 上29cm）	口縁部破片

(単位：cm)

第14表 254号住居跡出土土器一覽(2)

() は現存値及び推定値

押図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第42図1	土師器 杯	5.0	17.0	—	大型有段杯／口縁部は 外傾する／精巧な作り ／口縁部と底部との境 に段をもつ／底部を除 く内面及び外面口縁部 は赤彩	胎土は暗 褐色を基 調	砂粒をやや 多く、石英・ 金管母を僅 かに含む	内面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラナデ ／外面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラ削り後 粗いヘラ磨き調整	カマド内	80%
第42図2	土師器 杯	5.5	(15.5)	—	大型有段杯／口縁部は 外傾する／精巧な作り ／口縁部と底部との境 に段をもつ／底部を除 く内面及び外面口縁部 は赤彩	胎土は暗 黄色を基 調	砂粒をやや 多く、石英・ 小石を僅か に含む	内面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラナデ ／外面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラ削り後 粗いヘラ磨き調整	住居中央やや 南西寄りの覆 土中（床上10 cm）	30%
第42図3	土師器 杯	(5.2)	(16.0)	—	大型有段杯／口縁部は 外反する／精巧な作り ／口縁部と底部との境 に段をもつ／底部を除 く内面及び外面口縁部 は赤彩／入腹系土師器 か	胎土は暗 赤褐色を 基調	砂粒をやや 多く、石英・ 角閃石・小 石を僅かに 含む	内面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラナデ ／外面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラ削り後 粗いヘラ磨き調整	カマド左袖(後 世のビット線)	40%
第42図4	土師器 杯	6.0	(13.6)	—	内湾タイプ／口縁部は 僅かに内傾する／口縁 部から体部上半は内外 面赤彩	胎土は暗 黄褐色を 基調	砂粒をやや 多く、石英・ 角閃石を僅 かに含む	内面：ヘラナデ／外 面：ヘラ削り後粗い ヘラ磨き調整	カマド前面の 床面上及び覆 土中（床上23 cm）	70%

(単位：cm)

第15表 274号住居跡出土土器一覽(1)

() は取存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第42図5	土師器 環	(4.4)	(17.1)	—	大型有段環/口縁部は外傾する/精巧な作り/口縁部と底部との境に段をもつ/全面黒彩/北関東系	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居中央から北寄りの覆土中(床上13~33cm)	口縁部~底部20%以下
第42図6	土師器 環	(6.3)	(15.6)	—	大型有段環/須恵器環身横置/口縁部は内傾する/口縁部と底部との境に段をもつ/全面黒彩/北関東系	胎土は暗褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	カマド前面の覆土中(床上26~34cm)から散在的	口縁部~底部20%
第42図7	土師器 環	7.8	13.8	—	深身タイプ/口縁部は僅かに外傾する/口縁部から体部への移行はややくびれをもつ	淡黄褐色	砂粒・小石をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、体部下平から底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	住居中央から北寄りの床面上及び覆土中(床上1~14cm)から散在的	60%
第42図8	土師器 鉢	9.2	11.1	6.5	小型鉢/「く」の字口縁/最大径は胴部上半にもつ/平底/黒色茶土器/北東東方面の輸入品と思われる	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り(荒況をもつ)	P2近くの覆土中(床上8cm)	60%
第42図9	土師器 高環	(8.8)	—	(10.0)	長脚タイプ/裾部は大きく外反する/内面を暗赤・赤彩/人間系土師器か	胎土は暗褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石を含む	環部：内面は刷磨のため不明、外面はヘラ磨き調整/胴部は内面はヘラ削り、外面は縦方向のヘラ磨き調整	北東コーナー近くの覆土中(床上13cm)	脚台部40%
第42図10	土師器 甕	(12.4)	(19.4)	—	「く」の字口縁/最大径は胴部中位にもつ/口縁部の内外面に顕著に輪積み痕が残る	暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部には指頭押捺による成形痕が残る	住居中央から北寄りの床面上及び覆土中(床上13cm)	口縁部~胴部中位30%
第42図11	土師器 甕	(22.5)	(14.6)	—	「く」の字口縁/最大径は胴部中位にもつ/胴部はやや長脚化傾向	暗褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗いハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後胴部上半を中心に粗いヘラ磨き調整/外面口縁部直下には指頭押捺か/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	住居中央付近の床面上及び覆土中(床上6~27cm)から散在的	口縁部~胴部下半40%
第42図12	土師器 甕	28.9	(23.2)	8.0	大型甕/「コ」の字口縁/最大径は胴部上半にもつ/底部は中央がやや窪んでいる/内外面に黒く染けている	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗いハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	住居西半部の覆土中(床上4~35cm)から散在的	60%
第42図13	土師器 甕	(7.8)	—	(6.2)	底部はやや中央が上げ底状/外面に粘土が付着	胎土は淡黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：粗いハケ目調整か/外面：粘土の付着により不明	カマド前面の覆土中(床上10~24cm)から散在的	胴部下半~底部40%

(単位：cm)

第15表 274号住居跡出土土器一覧(2)

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第43図14	土師器 瓶	30.1	22.1	9.1	大型瓶／底部は筒抜け式／複合口縁／胴部途中にやや膨らみをもつ	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（ハケナデか）／外面には強く沈みられるような傷痕が観察できるが、詳細は不明である	住居中央付近の床上上及び覆土中(5～29cm)から散在的	70%
第43図15	土師器 瓶	19.6	18.2	9.0	小型瓶／底部は筒抜け式／複合口縁／器厚は厚め／内外面に黒く塗られている／比較的作りが悪い／人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ハケ目調整後口縁部はナデ／内面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居南東コーナー付近の覆土中(床上8cm)	90%
第43図16	ミニチュア 土器	5.8	5.1	4.2	やや大型品／筒状の器形／底部は分厚い／底部は平底状／内面には輪積み痕が顕著に残る	暗茶褐色	砂粒をやや多く含む	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	南西コーナー付近の床上上	完形品
第43図17	ミニチュア 土器	4.2	4.2	3.0	口縁部は僅かに外反する／底部は平底状	暗茶褐色	砂粒を僅かに含む	内外面：指頭押除による成形痕が顕著に残る	カマド左袖(後世のヒット縁)	70%

(単位：cm)

第15表 274号住居跡出土土器一覽(3)

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第46図1	土師器 環	(3.2)	12.0	—	いわゆる比企型環／口縁部は外反する／口縁部の沈みなし／薄手でシャープな作り／内面及び口縁部外面は赤彩／全体的に摩耗が著しい／人間系土師器	胎土は淡赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、胴部のため不明／外面：口縁部は横ナデ、底部は粗いヘラ磨き調整か	確認調査時の出土／東壁近くの覆土上層	40%
第46図2	土師器 環	3.7	12.3	—	有段環／口縁部はやや内湾気味に開く／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／全体的に摩耗が著しい／在地系土師器	淡褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母・小石を含む	内面：横ナデ、底部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	南西壁寄りの床上上(床上9cm)	ほぼ完形品
第46図3	土師器 甕	14.2	8.5	9.2	小型丸甕／直口甕か／口縁部は途中に稜をもち直立気味／最大径は胴部上平にもつ／底部はやや大きめの平底／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	西コーナーの北西壁近くのほぼ床面上	完形品
第46図4	土師器 甕	34.2	(23.2)	9.5	大型丸甕／「く」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／平底／底部に木葉痕が僅かに残る／在地系土師器	胎土は明褐色～暗黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ（スリップか）	南西壁寄りの床上上及び覆土中からまとまって出土	60%
第46図5	土師器 甕	(2.3)	—	5.4	長甕／平底／底部に木葉痕を残す／在地系土師器	暗褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ナデか	北東コーナーの床上上	底部のみ60%

(単位：cm)

第16表 275号住居跡出土土器一覽

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第46図6	土師器 甕	(3.8)	—	(7.0)	長豊/平底/底部に木 葉痕を残す/在地系土 師器	暗黄褐色	砂粒をやや 多く、黄褐 色粒子・金 雲母を含む	内面：ヘラナデ/外 面：ヘラ削り	南西壁寄りの 覆土中(床土 6cm)	胴部下半～ 底部40%
図版21-2-1	土師器 環	—	—	—	埴タイプ/口縁部は内 湾する/内外面赤彩か	胎土は暗 黄褐色	茶褐色粒子 砂粒を含む	内面：横ナデ/外面： 口縁部は横ナデ、以 下は粗いヘラ削り	覆土中	口縁部小破 片
図版21-2-2	土師器 埴	—	—	—	頸部にくびれをもつ/ 内外面赤彩	胎土は淡 橙色を基 調	砂粒をやや 多く、角閃 石を含む	内面：頸部は横ナデ、 体部はナデ/外面：口 縁部は横ナデ、体部は ハケ目調整か	覆土中	頸部～体部 上半小破片
図版21-2-3	土師器 甕	—	—	—	胴部下半に膨らみをも つ	暗黄褐色	茶褐色粒子 を含む	内面：ヘラナデ後粗い ヘラ磨き調整/外面： ハケ目調整後粗いヘラ 磨き調整	北壁近くの床 面上	胴部下半破 片

(単位：cm)

第17表 276号住居跡出土土器一覧

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
図版21-3-1	土師器 環	—	—	—	埴タイプか/内外面赤 彩	胎土は暗 黄褐色	茶褐色粒子 を含む	内面：ヘラナデ/外 面：ナデか	南寄りの覆土 中(溝底上19 cm)	体部破片
図版21-3-2	土師器 環	—	—	—	埴タイプか/底部には 放射状の暗文あり/上 端の一部に平坦に面取 り部分が残るが、不明 /内外面赤彩/入間系 土師器	胎土は暗 赤褐色	茶褐色粒子 砂粒・小石 を含む	内面：ヘラナデ後放射 状の暗文が施文される /外面：ヘラ削り後粗 いヘラ磨き調整	南寄りの覆土 中(溝底上16 cm)	底部破片
図版21-3-3	土師器 甕	—	—	—	口縁部は外反する/内 外面黒く染けている	胎土は暗 茶褐色を 基調	砂粒を含み、 角閃石を僅 かに含む	内外面：横ナデ後縦方 向に粗いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部破片
図版21-3-4	須恵器 甕	—	—	—	胴部破片か/比較的新 面は直線的	灰色	砂粒をやや 多く、角閃 石・石英・ 雲母を僅か に含む	内面：ハケ目調整(力 キ目痕あり)/外面：叩 き目(縄障文)	南寄りの覆土 中(溝底上17 cm)	胴部破片

(単位：cm)

第18表 1号円形周溝墓出土土器一覧

() は現存値及び推定値

神図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	調 整	出土位置	遺存度
第49図1	土師器 環	(2.8)	—	—	有段環/内面及び口縁 部外面は赤彩/入間系 土師器	胎土は暗 茶褐色を 基調/内 部は黒色	茶褐色粒子 角閃石・砂 粒を含む	内面：ヘラ磨き調整/ 外面：口縁部は横ナ デ、底部はヘラ磨き調 整	覆土中	口縁部～底 部付近20%
第49図4	土師器 甕	(7.9)	(24.4)	—	甕の可能性あり/「コ 」の字口縁/口縁部は複 合口縁	淡黄褐色 を基調	砂粒をやや 多く含む	内面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラナデ/ 外面：口縁部は横ナ デ、以下はヘラナデ/ 内外面のヘラナデは ハケナデか	覆土中	口縁部～胴 部上半20%

(単位：cm)

第19表 6号ピット出土土器一覧

() は現存値及び推定値

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版21-4-1	須恵器蓋	—	—	—	天井部小破片か/東金子製品か	淡灰色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転/外面天井部に回転へうり	覆土中	天井部小破片か
図版21-4-2	須恵器壺	(7.0)	—	—	口縁部は複合口縁/口頸部は外反する/内外面に透明な自然釉がかかる	暗灰褐色を基調	白色砂粒・黒色粒子を含む	ロクロ回転は右回転	覆土中	体部～底部20%以下

(単位: cm)

第20表 7号ピット出土土器一覧

() は現存値及び推定値

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第49図1	須恵器環	(3.6)	—	(5.8)	体部下平がやや膨らみをもつ/酸化炭成か	暗褐色を基調	白色砂粒を含み、茶褐色粒子を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部には回転系切り痕が残る	覆土中	体部～底部20%以下

(単位: cm)

第21表 8号ピット出土土器一覧

() は現存値及び推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
図版22-1-1	687 D	陶器	壺	—	—	—	胴部破片/外面鉄軸/胎土: 砂粒を僅かに含む/外面に平行印き目痕/内面はナデ	在地系?	中世以降
図版22-1-1	689 D	陶器	壺	—	—	—	胴部小破片/外面鉄軸/胎土: 砂粒・小石をやや多く含む/控跡の可能性あり	常滑	15～16 c
図版22-1-1	50M	磁器	小皿	1.0	—	—	口縁部～底部小破片/内外面に志野軸/胎土の色調は暗黄褐色/底部に回転系切り痕あり	志野	17 c 中
図版22-1-2	50M	磁器	碗	—	—	—	体部小破片/外面に染付あり/文様は草花文	肥前系	18 c 中
図版22-1-3	50M	磁器	灯明皿	1.9	(8.5)	(3.4)	ロクロ成形/内外面鉄軸/胎土の色調は灰色/遺存度は30%	在地系?	19 c
図版22-1-4	50M	陶器	皿	(0.8)	—	—	底部小破片/内外面鉄軸/胎土の色調は暗茶褐色/底部に回転系切り痕あり/被熱あり	在地系?	19 c
図版22-1-5	50M	陶器	碗	(3.2)	—	—	口縁部～体部小破片/胎土の色調は灰色/内外面透明釉/げんこつ跡	瀬戸	18 c 後半～19 c 初頭
図版22-1-6	50M	陶器	鍋	—	—	—	頸部～体部小破片/頸部は屈曲する/胎土の色調は淡黄褐色/内外面透明釉	瀬戸	19 c
図版22-1-7	50M	陶器	徳利	—	—	—	体部下平小破片/外面鉄軸/胎土の色調は淡黄褐色	瀬戸	19 c
図版22-1-8	50M	陶器	手焙	(2.8)	—	—	体部下平～底部破片/平底/色調は全体に黒褐色/胎土に茶褐色粒子を含む/内面: 底部に粗いへうり、外面: へうり	在地系	19 c
図版22-1-1	51M	磁器	徳利	—	—	—	底部小破片/底部内面に灰釉(自然釉?)が付着./色調は淡茶褐色/底部はへうり/底部周縁部は面取り	瀬戸	18～19 c
図版22-1-2	51M	磁器	碗	(3.5)	(9.2)	—	口縁部～体部破片/外面口縁部は型彫刷り	肥前系	18 c 後半
図版22-1-3	51M	土器	焙烙	—	—	—	体部小破片/全体に色調は黒色、胎土の色調は暗褐色/胎土には角閃石・砂粒を含む/ロクロ成形	在地系	18 c

(単位: cm)

第22表 土坑・溝跡出土の陶磁器・土器一覧

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第53図1	楔形石器	黒曜石	20.7	19.2	10.8	3.5	上下両端に潰れ状の割離/正面右側縁に連続的な微細割離	遺構外 (①地点)
第53図2	打製石斧	ホルンフェルス	78	45.1	25.7	86.1	横長割片を素材とする/短冊形/刃/凹凸片刃/器体刃部寄りに最大厚	遺構外 (③地点)

(単位: mm・g)

第23表 遺構外出土の石器一覧

神宮番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考
					石	角	礫	砂		
第53図3	胴	襷赤文L	明赤褐 5YR5/6	襷赤文系			○		遺構外 (③地点)	砂粒は粗粒 磁石に付く
第53図4	胴	細沈線による斜格子目文	にぶい濁 7.5YR5/3	三戸			○	織	274H (⑧地点)	
第53図5	口縁	微隆起線文／内面は貝殻条痕文	明赤褐 5YR6/6	野島			○	織	275H (⑧地点)	織物は少量
第53図6	口縁	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系		○	○	織	236H (⑧地点)	
第53図7	口縁	内外面貝殻条痕文／波状口縁?	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	274H (⑧地点)	
第53図8	胴	微隆起線文／内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	野島			○	織	248H (⑧地点)	
第53図9	胴	平行沈線文／内面貝殻条痕文	赤褐 5YR4/8	下吉井			○	織・針	250H (⑧地点)	磁石に付く
第53図10	胴	平行沈線文／内面貝殻条痕文	赤褐 5YR4/6	下吉井			○	織・針	250H (⑧地点)	磁石に付く
第53図11	胴	内外面貝殻条痕文	明赤褐 5YR5/6	条痕文系				織・菊	1F (⑧地点)	条痕文は細い
第53図12	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	250H (⑧地点)	条痕文は細い 9と同一個体
第53図13	胴	貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	274H (⑧地点)	条痕文は細い 11と同一個体
第53図14	胴	貝殻条痕文	明赤褐 5YR5/6	条痕文系				織	251H (⑧地点)	条痕文は細い
第53図15	胴	貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系		○	○	織	238H (⑧地点)	条痕文は細い 内面は黒色
第53図16	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 5YR6/4	条痕文系?			○	織	274H (⑧地点)	条痕文は細い
第53図17	胴	内外面貝殻条痕文	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	251H (⑧地点)	内面はにぶい黄褐色 条痕文は細いが内面は太い
第53図18	胴	貝殻条痕文	明赤褐 5YR6/6	条痕文系			○	織	236H (⑧地点)	条痕文は細い
第53図19	胴	内外面貝殻条痕文	明赤褐 5YR5/6	条痕文系			○	織	250H (⑧地点)	磁石に付く
第53図20	胴	内外面貝殻条痕文	樽 7.5YR6/6	条痕文系			○	織	250H (⑧地点)	
第53図21	胴	内外面貝殻条痕文	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	238H (⑧地点)	
第53図22	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	274H (⑧地点)	
第53図23	胴	内外面貝殻条痕文	明赤褐 2.5YR5/6	条痕文系			○	織	遺構外 (⑧地点)	内面はにぶい褐色
第53図24	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	250H (⑧地点)	
第53図25	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	274H (⑧地点)	内面褐色
第53図26	胴	内外面貝殻条痕文	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	243H (⑧地点)	内面はにぶい褐色
第53図27	胴	内外面貝殻条痕文	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	275H (⑧地点)	内面はにぶい褐色
第53図28	胴	貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR6/4	条痕文系			○	織	250H (⑧地点)	織物は少量 磁石に付く
第53図29	胴	貝殻条痕文	樽 5YR6/6	条痕文系			○	織	274H (⑧地点)	磁石に付く
第53図30	胴	貝殻条痕文	にぶい濁 7.5YR7/4	条痕文系			○	織	遺構外 (⑧地点)	内面はにぶい黄褐色
第54図31	胴	半截竹筒による沈線文	にぶい濁 7.5YR5/4	羽状縄文系			○	織	274H (⑧地点)	磁石に付く
第54図32	胴	縄文R(縄縞の向き変?)	にぶい赤褐 2.5YR4/4	羽状縄文系			○	織	238H (⑧地点)	要再確認磁石に付く 内面は褐色
第54図33	胴	縄文R	にぶい赤褐 5YR4/4	羽状縄文系			○	織	238H (⑧地点)	内面は褐色 磁石に付く

※石：石英石・角閃石・輝石類；組織砂：砂粒織；織物織：白色針状物金；金雲母白；白色粘土

第24表 遺構外出土の縄文土器一覽(1)

図版番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考
					石	角礫	砂	他		
第54図34	胴	半截竹管による肋骨文/円形刺突文	にぶい赤褐色 2.5YR4/4	諸磯a	○		○		遺構外 (③地点)	磁石に付く
第54図35	胴	半截竹管による平行沈線文	にぶい黄褐色 10YR7/4	諸磯c			○		1F (⑧地点)	砂粒は粗粒
第54図36	口縁	縄文LR/結節文	にぶい黄褐色 10YR7/4	五領ヶ台			○		274H (⑧地点)	磁石に付く
第54図37	胴	集合沈線	赤褐色 5YR4/6	五領ヶ台			○	金	P1 (⑧地点)	磁石に付く
第54図38	胴	腰状の突起	赤褐色 5YR4/6	阿玉台		○	○	金	遺構外 (①地点)	
第54図39	胴	押引文を伴う隆帯	赤褐色 5YR4/6	阿玉台		○	○	金	274H (⑧地点)	
第54図40	胴	角押文	にぶい黄褐色 10YR7/4	阿玉台	○		○		238H (①地点)	
第54図41	胴	押引文を伴う隆帯	赤褐色 5YR4/6	阿玉台		○	○	金	236H (⑧地点)	
第54図42	胴	刻みを持つ隆帯/結節沈線による副歯状文	にぶい褐色 7.5YR6/4	膳坂			○		遺構外 (③地点)	磁石に付く
第54図43	胴	縄文LR?/磨消懸垂文	褐色 5YR7/6	加曾利E		○	○	織?	243H (①地点)	砂粒は粗粒
第54図44	胴	沈線文/縄文LR	にぶい褐色 7.5YR6/4	称名寺I	○		○		274H (⑧地点)	
第54図45	胴	縄文LR	にぶい黄褐色 10YR7/4	称名寺・ 壺之内			○		238H (①地点)	
第54図46	胴	縄文LR	浅黄褐色 10YR8/3	後期前葉?			○		遺構外 (③地点)	
第54図47	胴	沈線文	にぶい赤褐色 5YR5/4	後期粗製	○	○			275H (⑧地点)	磁石に付く
第54図48	胴	沈線文	にぶい赤褐色 5YR4/4	後期粗製	○		○		238H (①地点)	
第54図49	胴	沈線文	にぶい黄褐色 10YR7/4	後期粗製		○	砂		238H (①地点)	磁石に付く
第54図50	—	土器片類	明赤褐色 5YR5/6	前期?				織	撚乱 (①地点)	

※石：石英角；角閃石・輝石類；細礫砂；砂粒織；織織針；白色針状物；金雲母白；白色粒子

第24表 遺構外出土の縄文土器一覽（2）

図版番号	種別	器種	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版23-51	白磁	皿	口縁部小破片	肥前系	238 H (①地点)	17 c 後
図版23-52	磁器	高筒	体部小破片/梁付/外面：風景文	肥前系	250 H (①地点)	18 c 後半
図版23-53	磁器	壺	胴部片/植物文/ロクロ成形	肥前	275 H (⑧地点)	18 c
図版23-54	青磁	皿	胴部小破片/ロクロ成形	中国	274 H (⑧地点)	15 c ?
図版23-55	陶器	皿	口縁部小破片/内面と口縁部外面に灰釉/胎土の色調は灰白色/ロクロ成形	瀬戸	遺構外 (⑧地点)	15 c 後半
図版23-56	陶器	碗	口縁部小破片/灰釉	瀬戸	遺構外 (⑦地点)	18 c 後
図版23-57	陶器	鉢鉢	体部～底部破片/内外面に鉄釉/ロクロ成形	瀬戸	遺構外 (①地点)	16 c 末
図版23-58	陶器	甕	胴部/色調は暗褐色/胎土には砂粒をやや多く含む/外面には塗布	常滑	250 H (①地点)	15 c 後
図版23-59	土器	手箱	口縁部小破片/口唇部は平坦に面取りされる/胎土の色調は灰褐色/ロクロ成形	在地系	遺構外 (①地点)	18～19 c ?
図版23-60	土器	焙烙	口縁部小破片/胎土の色調は灰褐色/ロクロ成形	在地系	243 H (①地点)	18～19 c

第25表 遺構外出土の陶磁器・土器一覽

第3章 西原大塚遺跡第165・166地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町2～4丁目に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。遺跡の大きさは、北東―南西方向に約700m、北西―南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積163,930㎡を測る市内最大規模の遺跡である。

この遺跡では、平成5年度以降に西原特定土地区画整理事業に伴う、道路部分の発掘調査が本格的に実施され、平成18年度に完了している。しかし、現在では、その後の道路の完成に伴い、個人住宅・分譲住宅建設などを中心とした小・中規模開発が急増し、平成25年12月27日現在で、199地点にのぼり、市内最多の調査件数になっている。

近年では、平成22（2010）年度に分譲住宅建設に伴う第172地点、平成23（2011）年度に分譲住宅・個人住宅建設に伴う第174地点、平成24（2012）年度に共同住宅建設に伴う第179地点の発掘調査が実施されている。

本遺跡は、昭和48（1983）年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

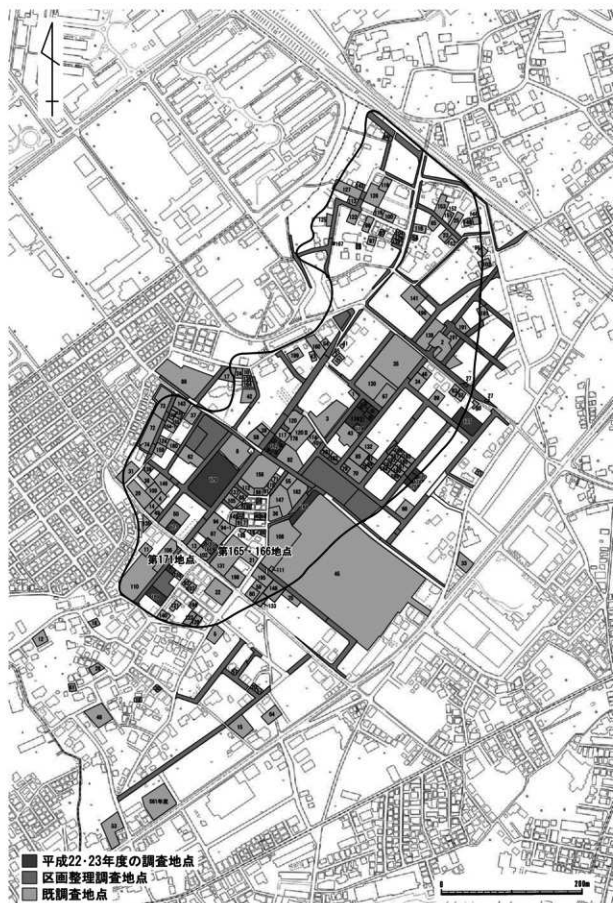
第165地点と第166地点について、開発時期が一致していたことから、同時に確認調査を実施することができた。

確認調査は、平成21年3月30日に実施した。それぞれの地点の調査区の長軸方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、両地点を合わせた全体において、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒・溝跡1本と縄文時代の漸移層あるいは住居跡と思われる土層を部分的に確認した。そのため、ただちに開発主体者に調査の結果を報告し、保存対策について検討を依頼したが、両地点ともに今回の開発計画では地盤の表層改良（現況G Lから深さ約1m）を行う計画であるということで、保護層を確保することは難しく、盛土保存は不可能であるという回答を得た。そのため、4月14日から両地点同時に発掘調査を実施することに決定した。

なお、教育委員会は、両地点の開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、3月28日付けで埋蔵文化財発掘届等を4月2日付けで埋蔵文化財発掘調査の通知をそれぞれ埼玉県教育委員会に提出した。

以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第26表の発掘調査工程表に示した。

4月14日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。今回は残土搬出作業を行わず、調査区内に残土置場を確保することとし、調査区をほぼ東西に2分し、前半部を西側、後半部を東側と設定し、まず、前半部を終了させた後に後半部の調査を行う予定とした。本日は前半部の



第56図 西原大塚遺跡の調査地点(1/5,000)

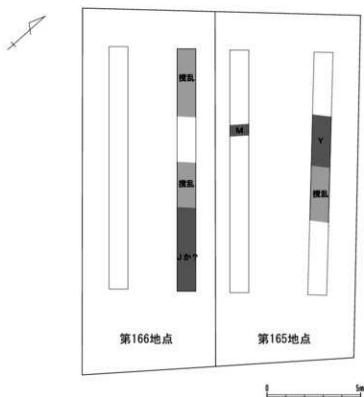
平成25年12月27日現在

	平成22年4月				
	10日	15日	20日	25日	30日
表土剥ぎ作業		14			
遺構確認作業		15			
49 M			19		
560 Y			20		
埋戻し作業					27

第26表 西原大塚遺跡第165・166地点の発掘調査工程表

調査区南西端から表土剥ぎ作業を行い、残土を調査区東半部に運び、置くことにした。

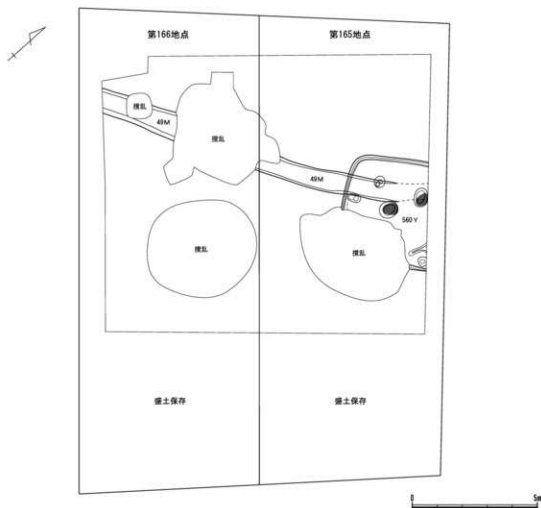
- 15日 重機による表土剥ぎ作業2日目。本日中にその作業を完了する。
- 19日 人員導入による発掘作業を開始する。調査前の準備として、器材をトラックに積載し、現地に搬入する。その後、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った結果、調査区内には弥生時代後期～古墳時代の住居跡1軒(560 Y)・溝跡1本(49 M)が分布していることが判明した。本日中には、49 Mの精査を開始し、その後完掘し、遺構の写真撮影を終了する。その後、平板測量を開始する。一部560 Yの精査を開始する。
- 20日 49 Mの遺構写真の撮り直し。その後、平板測量・実測を完了する。560 Yは49 Mの精査終了後、本格的に精査を開始する。本日中に床面・貯蔵穴を確認する。
- 21日 560 Yのセクション実測を終了し、ベルトをはずす。壁溝・柱穴・炉跡を確認する。炉



第57図 確認調査時の遺構分布(1/200)

跡については、2カ所確認した。住居中央を炉跡Aとし、北側を炉跡Bとする。その後、壁溝・柱穴を掘り始め、掘り終了。本日中に遺構の写真撮影を終了する。その後、平板測量を開始する。

- 22・23日 雨天にて調査中止。
- 26日 560 Yの炉跡A・Bの写真撮影・実測を終了し、その後、平板測量を終了、掘り方の精査を終了する。その後、掘り方部分をセクション・エレベーション図に追加し、前半部のすべての精査を完了する。
- 27日 午前中に前半部の埋戻し作業を完了する。午後から後半部の表土剥ぎ作業を開始するが、途中雨天のため調査を中止する。
- 28日 本日は後半部の表土剥ぎ作業の続きを行う。同時に遺構確認作業を行ったが、確認調査において、縄文時代の漸移層あるは住居跡と思われた箇所は、遺構ではなく、結果的に後半部には遺構は検出されなかったため、本日にてすべての調査を完了した。
- 29日 後半部の埋戻し作業を完了する。



第58図 遺構分布図 (1/150)

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒(560Y)・溝跡1本(49M)が検出された。560Yと49Mについては、49Mが560Yを切っていることが判明した。ただ、49Mの詳細時期は、本来不明とした方が良いかもしれないが、560Yと重複していない、南西端の覆土中から2点の土器が出土したため、本報告では当該期の所産のものとして扱った。

また、遺構外出土遺物として、縄文時代の石器(石鏃1点)と土器3点、中世以降の陶器2点が出土している。

(2) 住居跡

560号住居跡

遺構 (第59図)

[位置] 165地点からの検出である。

[検出状況] 北東側は調査区域外であり、さらに南側も攪乱を受けている。

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：不明×4.30m/確認面からの深さ22～48cm。壁溝：確認できた範囲では巡らされていた。上幅15～18cm/下幅3～10cm/深さ5～10cm。床面：壁際を除き硬化した面が確認できた。炉：2カ所確認できた。〈炉A〉南西壁から1.5m程離れて位置する。75×65cmの楕円形を呈する地床炉で、5cmの掘り込みをもつ。炉床は5cm程の厚さで被熱赤化していたが、特に北東側が強く赤化していた。〈炉B〉北西壁より1m程離れて位置する。75×55cmの楕円形を呈する地床炉で3cmの掘り込みをもつ。炉床は3cm程の厚さで被熱赤化しており、Aと同じく北東側が強く赤化していた。貯蔵穴：北側に高さ3cmの突堤があるP3が、貯蔵穴の可能性がある。深さは47cm。柱穴：P1が主柱穴と思われる。深さ45cm。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：P2が入口梯子穴と考えられる。深さ15cm。

[覆土] 22層に分層できた。

[遺物] 高坏・壺・甕形土器の破片が出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代初頭。

遺物 (第30図、第27表)

[土器] (第60図1～8、第27表)

1は高坏形土器、2～4は壺形土器、5～8は甕形土器である。

(2) 溝跡

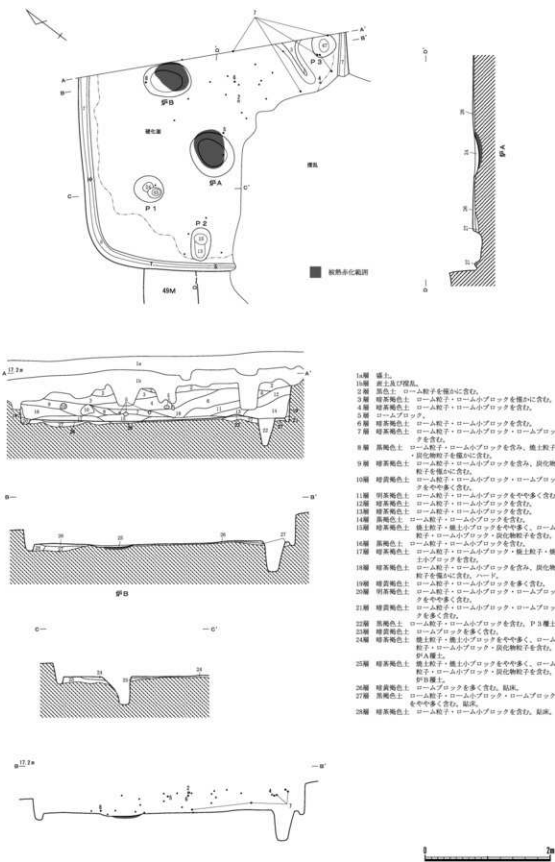
49号溝跡

遺構 (第61図)

[位置] 165・166地点からの検出である。

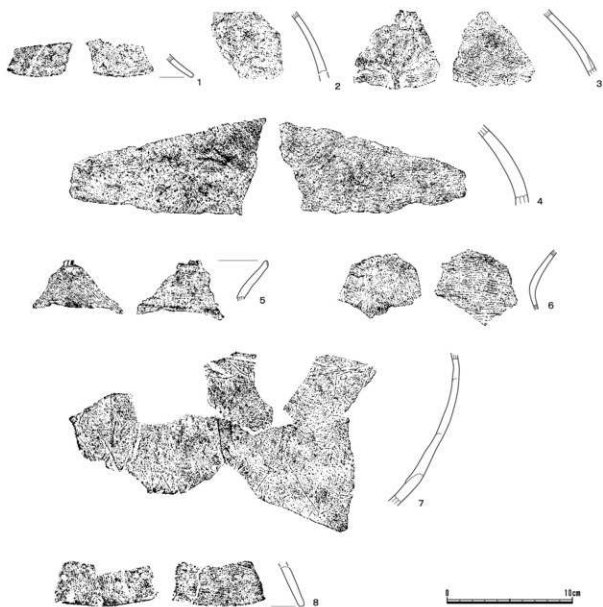
[検出状況] 東側と西側は調査区域外であり、166地点内では大きく攪乱を受けている。560Yを切る。

[構造] 規模：調査区内の全長は13.5m。溝幅は、上幅80～107cm・下幅57～80cm・確認面か



- 16層 礫土。
- 15層 赤土及び埋瓦。
- 14層 赤土。ローム粒子を僅かに含む。
- 13層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 12層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 11層 ロームブロック。
- 10層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 9層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 8層 基層土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 7層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。
- 5層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 4層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 2層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 1層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 0層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。

第59図 560号住居跡・遺物出土状態(1/60)



第60図 560号住居跡出土遺物 (1/3)

らの深さ4～15cm。走向方位：N-60°-E。

[覆 土] 2層に分層できた。

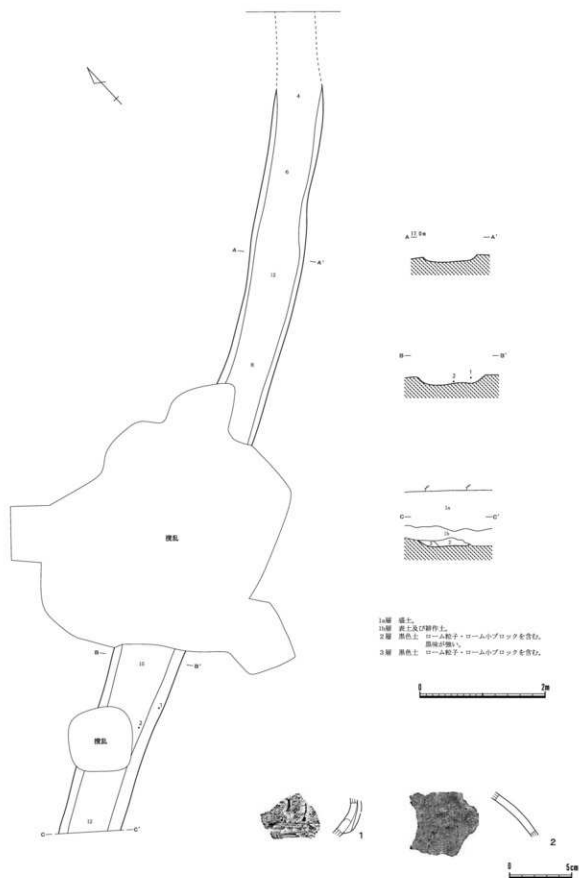
[遺 物] 壺形土器の破片が2点出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

[遺 物] (第61図、第28表)

[土 器] (第61図1・2、第28表)

1・2は壺形土器の破片である。



第61図 49号溝跡・出土遺物(1/60・1/3)

第3節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時代の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器（石鉄1点）、縄文土器（3点）、中世以降の陶器（2点）に分類する。

（1）縄文時代の石器（第62図1）

石鉄である。長さ1.9cm・幅1.4cm・厚さ0.3cm・重さ0.4g。右脚部欠損。表裏面とも丁寧な調整である。

（2）縄文時代の土器（第62図2～4）

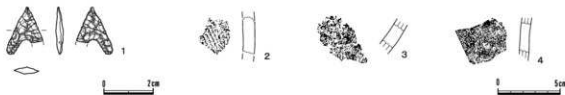
2は縄文RLのみを施文する胴部片である。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を基調とし、胎土には砂粒、金雲母を含む。中期初頭の所産か。

3は磨消懸垂文を持つ胴部片である。地文は縄文LRか？。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を基調とし、胎土には砂粒を含む。加曾利EⅢ式。

4は無文の胴部片である。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を基調とし、表面は広く煤ける。内面は色調が異なりにぶい黄褐色（10YR7/4）を基調とする。胎土には砂粒を顕著に含む。後期の所産と思われる。

（3）中世以降の遺物（図版25-3-5・6、第29表）

5・6は陶器である。



第62図 遺構外出土遺物（2/3・1/3）

() は現存額及び推定値

脚図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第59図1	高坏	—	—	—	脚台部/裾部は大きく外反する/外面赤彩	胎土は黄白色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	脚台部小破片
第59図2	甗	—	—	—	胴部	内面:茶褐色/外面:黒色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:ヘラナデ/外面:ハケ目調整後やや粗いヘラ磨き調整を施し、再度粗いヘラ磨き調整を斜方向に施す(文様効果か)	住居中央付近の覆土中(床上32cm)	胴部上半破片か
第59図3	甗	—	—	—	胴部/外面赤彩か	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒を含む	内面:ハケ目調整/外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整/外面の剥離面にハケ目調整が観察できる	貼床内	胴部上半破片
第59図4	甗	—	—	—	胴部/外面赤彩か	胎土は黒褐色を基調	砂粒・小石を含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	P3近くの覆土中(床上23cm)	胴部中位破片
第59図5	甗	—	—	—	口縁部/口唇部外面にハケ状工具による刻み目を付す	表面:淡茶褐色/内部:黒色	黄褐色粒子・褐色粒子を含む	内面:横方向のハケ目調整/外面:斜方向のハケ目調整	伊Aすぐ東側の覆土中(床上28cm)	口縁部破片
第59図6	甗	—	—	—	口縁部~頸部/一部口唇部が残る/一部外面に灰付着	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:横方向のハケ目調整/外面:斜方向のハケ目調整	住居中央やや東寄りの覆土中(床上28cm)	口縁部~頸部小破片
第59図7	甗	—	—	—	胴部/胴部には磨らみをもつ/外面には灰付着	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:ヘラナデ/外面:斜方向のハケ目調整/内面には指頭押捺痕が観察できる	P3付近の覆土中(床上5~32cm)から散在的	胴部上半~下半破片
第59図8	甗	(3.2)	—	—	台付甗/脚台部/[ハ]の字状の器形/裾部底部はやや平坦	淡黄褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面:横方向のハケ目調整/外面:縦方向のハケ目調整	伊Bの上方の覆土中(床上4cm)	脚台部破片

第27表 560号住居跡出土土器一覽

(単位:cm)

脚図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第60図1	甗	—	—	—	口縁部/幅広複合口縁/棒状貼付文2本/複合部にはLR単節斜線文/外面無文部及び内面は赤彩か	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	内面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整/外面:複合部直下にハケ目調整	セクションB南側の覆土中(溝底上5cm)	口縁部破片
第60図2	甗	—	—	—	胴部/外面赤彩	胎土は黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面:横方向のハケ目調整/外面:ハケ目調整後横方向のヘラ磨き調整	セクションB南側のほば溝底上	胴部破片

第28表 49号溝跡出土土器一覽

(単位:cm)

図版番号	種別	器種	製作の特徴等			推定産地	出土位置	時期
図版25-3-5	陶器	甗	体部小破片/ロク口成形/外面に緑釉			瀬戸	遺構外	16~17c
図版25-3-6	陶器	德利	底部小破片/ロク口成形/底部はやや篩笄底状/灰釉/底部無釉			瀬戸	遺構外	18c後半

第29表 遺構外出土の陶器一覽

第4章 西原大塚遺跡第171地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第3章第1節 参照。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成22年9月22日に実施した。調査区内に3本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒を検出した。そのため、ただちに開発主体者に調査の結果を報告し、保存対策について検討を依頼した。

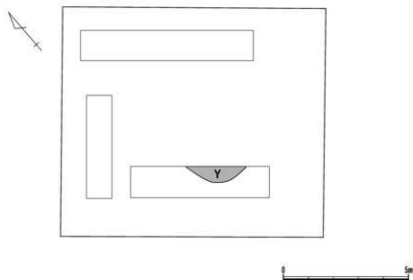
9月24日、教育委員会は開発主体者と確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を行った。その結果、当該地については、西側部分の道路から出入りを行うために、敷地全体を掘削する必要があるということで、文化財保護層が確保できないため、発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会は、開発主体者から埋蔵文化財発掘届を受理し、9月14日付けで埋蔵文化財発掘届等を9月27日付けで埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

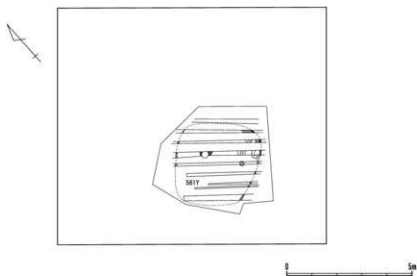
これにより、教育委員会を調査主体とし、10月1日から発掘調査を開始した。

10月1日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、宅地部分と道路部分との高低差が大きく、調査区外への搬出作業は行えないため、調査区内において残土を処理することで対処することにした。午前中にすべての表土剥ぎ作業を終了する。

5日 午後から人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査区域の整備と細部の遺



第63図 確認調査時の遺構分布 (1/150)



第64図 遺構分布図(1/150)

構確認作業を実施する。

その結果、調査区内の中央に弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒(561Y)が存在することが判明した。561Yについては、耕作のトレンチャーによる攪乱が著しく、遺存状態が悪い。本日中に561Yの精査を開始する。

- 6日 561Yのセクションの写真撮影・実測を終了する。
- 7日 561Yの入口梯子穴と思われる小ピットと貯蔵穴、祭壇状遺構と思われる赤砂利層の範囲を検出し、掘り終了。その後、遺構写真撮影を行い、平板測量を終了する。
- 8日 561Yの赤砂利層を除去し、再度遺構の写真撮影を行い、午前中で調査を終了する。
- 12日 午前中に器材の片付け・撤去作業を行い、午後から埋戻し作業を開始、本日中にその作業を完了する。

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、狭小な面積の中で弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒(561Y)が検出された。

561Yは、調査区中央やや南寄りからの検出であり、1軒全体の調査を実施することができたが、耕作による攪乱を受け、遺存状態は悪かった。

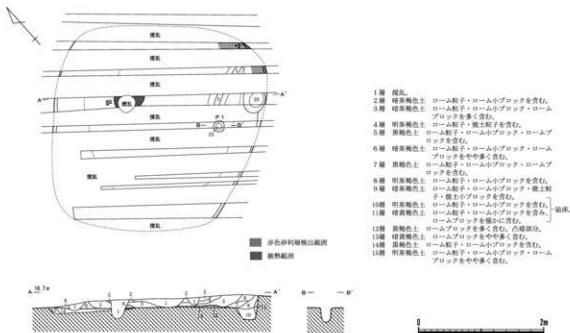
(2) 住居跡

561号住居跡

遺 構 (第65図)

[検出状況] 耕作により大部分が壊されており、住居の壁の一部と断片的な床面しか確認できなかった。

[構 造] 平面形：隅丸方形か。規模：南北方向3.38m/東西方向不明/残りの良い確認面からの深



第65図 561号住居跡 (1/60)



第66図 561号住居跡出土遺物 (1/3)

さ19cm。壁溝：検出されなかった。床面：住居内側に硬化した面が確認できた。貼床は壁際に2～10cmの厚さで施されていた。炉：炉と思われる被熱した部分が住居中央よりやや北西側に確認できたが、中央が壊されており詳細は不明である。貯蔵穴：南東側に確認できた。不明×34cm・深さ20cm・楕円形と思われる。北側に凸堤が確認できた。柱穴：主柱穴は検出されなかった。赤色砂利層：東隅の床直上に8cm程の厚さで確認できた。入口施設：深さ23cmのP1が梯子穴の可能性がある。

〔覆土〕10層に分層できた。

〔遺物〕壺形土器の小破片が2点出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物 (第66図)

〔土器〕(第65図1・2)

1・2は壺形土器の小破片である。

1は胴部上半の小破片で、文様はLR単節斜縄文の下段に2条の自縄節文が施文される。文様部以下の無文部は赤彩される。胎土の色調は黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・石英・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面無文部はヘラ磨き調整が施される。耕作溝からの出土である。

2は胴部下半の小破片である。胴部下半には稜がまわる。外面は赤彩される。胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ磨き調整が施される。南東コーナーの赤色砂利層検出範囲のほぼ床面上からの出土である。

第5章 調査のまとめ

本書は、平成21・22年度の国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査を実施した成果を収録したものである。ここでは、発掘調査を実施した城山遺跡第62地点、西原大塚遺跡第165・166・171地点についての所見をまとめることにする。

第1節 城山遺跡第62地点

本報告の城山遺跡第62地点については、全体で第62地点として命名した地点のうちの宅地建設部分(全11棟分)を対象にしたもので、すでに発掘調査及び発掘調査報告書の刊行を完了した第62-1・2地点(尾形・徳留・深井・青木 2012)は、今回の宅地建設に先立つ道路及び駐車場建設部分であった。同時に今回の報告では、第62-1・2地点の調査成果を統合する内容として、なるべく、細切れになった調査内容を1つの遺構・遺物図版にまとめる方式を採用した。

調査のまとめは、前回の第62地点の報告書でも行っているため、ここではいくつか考察を加えることとする。

(1) 城山遺跡の縄文時代早期条痕文系の遺構・遺物について

第62地点全体の縄文時代の遺構は、土坑4基、炉穴2基であった。遺構の時期は詳細不明なものが多いが、前回の調査で検出した683Dから建築材と考えられているクリやクワ属樹木の炭化材や早期条痕文系の土器片が出土しており、早期後半に構築物があったことをうかがわせる資料となっている。これまでに城山遺跡で検出された早期後半の遺構は、第21地点(尾形・深井・青木 2009)の3FP、第29地点(尾形・佐々木 1997)の124D、第42地点(尾形・深井・青木 2005)の287D・4FP、第55地点(尾形・深井・青木 2008a)の359D、第57地点(尾形・深井・青木 2008b)の376・377D、第58地点(尾形・藤波・鈴木・中村 2008)の453D・5FP、第60地点(尾形・藤波・鈴木・中村 2008)の6~7FP、第76地点(尾形・大久保・白崎 2013)の11~13FPであり、本調査地点よりも北東側、中野遺跡寄りの調査地点では今のところ当該時期の遺構は検出されていない。

遺物としては、条痕文系土器が最も多く出土しており、第62地点全体の縄文土器数323点に対し、条痕文系土器は202点と6割を超える。

この条痕文系土器は、第62㊸・㊹地点、242・243・248・251Hに偏って出土している。また、西側に隣接する第64地点(尾形・深井・青木 2013)においても、遺構は検出されなかったものの下吉井式を含め条痕文系土器がややまとまって出土している。それに対し、北側に隣接する第63地点(尾形・徳留・坂上他 2011)をはじめ第72地点(尾形・徳留・村上他 2012)など、本調査地点よりも北東側、中野遺跡寄りの調査地点での出土数は少なく、遺構の分布と似た傾向がみられる。

現地形や第72地点、中野遺跡第71地点(佐々木・内野 2010)の調査などによって、両遺跡間には埋没谷があったことが判明しており、特に第72地点の調査では、縄文時代前期までは埋没せずに存

在していたことが示唆されている。この谷に面した傾斜地であったことが、縄文時代早期の生活の痕跡が少ないことと関係している可能性が考えられる。

(2) 古墳時代中・後期の遺構・遺物について

前回で報告の第62-1・2地点と今回の第62①~⑩地点を合わせ、第62地点全体で検出された古墳時代中・後期の遺構をまとめると以下のとおりである。

- ①住居跡：21軒（234・236～240・242～246・248～254・274～276 H）
- ②円形周溝墓：1基（1円）
- ③土 坑：1基（633 D）
- ④ピット：2本（1・6 P）

そこで、本地点の調査では、上記①の住居跡が良好な検出状況であるため、その出土土器についてまとめることにする。時代区分では、今回報告する第62⑩地点から6世紀中葉に比定される274 Hが新たに検出されたため、前回設定の1期（5世紀中葉）～6期（7世紀中葉）を1期（5世紀中葉）～7期（7世紀中葉）とし、その土器様相について概観することにする。

1期（5世紀中葉）- 246・251号住居跡

城山遺跡の古墳時代については、県内でも最大規模の集落跡の1つと考えられる。そして、城山遺跡において、その大規模集落が形成され始めた時期がまさにこの時期であると言えるであろう。この時期は同時に志木市におけるカマド導入時期と一致することができる。市内において最古のカマドを有する住居跡は、中道遺跡第37地点19 H（佐々木・尾形 1997）を代表としてあげられるが、この時期とほぼ同時期のカマドを有する住居跡が本地点の251 Hである。251 Hからは1のような台付鉢タイプや7・8の有段タイプの高環が出土し、中道遺跡19 Hの土器組成に類似する。また、本市におけるカマド導入の様相を考える上では、城山遺跡第9地点72 H（佐々木・尾形 1991）出土の高環が、中道遺跡19 H出土の同類あるいは同製品であることから、ほぼ同時期に比定されるが、72 Hにはカマドの設置はなく、未だ炉跡であることから、この時期の住居跡はカマドを有するものと有さないものの両者が併存して存在する可能性が考えられる。よって、本市におけるカマド導入の様相については、今後慎重に検討する必要があるであろう。

環は246 Hの2のような器高が高く平底の深身タイプが主流と思われるが、中道遺跡19 Hでは、1のような須恵器環蓋模倣の有段環や3・4のような内斜口縁環に類似した赤色系の製品が共存する。

埴は算盤玉状の体部をもち、口縁部が逆「ハ」の字状を呈するものが基本である。外面調整はハケ目調整後でいねいなヘラ磨き調整が施されている。

高環では、すべて長脚を特徴とするが、坏部底部に段あるいは稜をもつタイプが主流と考えられ、246 H-6や251 H-7・8のような脚部と坏部が共に有段を呈する大型の有段高環や251 H-1のような台付鉢のような製品が共存し、安定した組成をなしている

甕では、246 H-14がこの時期でもまだ存在することを示す良好な資料である。複合口縁を呈する無彩のもので、甕としての最終形態のものと考えられる。

甗については、本地点からの良好な資料はないが、中道遺跡19 Hでは、標準タイプのものは複合口縁ではなく単純口縁の壘形タイプである。

甗は「く」の字口縁を崩さない球胴タイプである。251 Hからは龍目痕を残す甗が出土しており大変

稀少な例と言えるであろう。

2期（5世紀後葉）－239・244・254・276号住居跡

環では、いわゆる比企型環（以下、比企型環）が出現するのがこの時期である。この時期の比企型環は、初源段階タイプ（尾形 1999）のもので、口縁部が短く外反し、口径12cm前後を特徴とする。全体的に環は平底のものが減少し、丸底のものに変化している。

埴は239 H-9・10に良好な資料がある、いずれも算盤玉状の体部をもち、口縁部が逆「ハ」の字状を呈するもの基本である。外面調整は最終的な仕上げがヘラ磨き調整ではなく、軽いナデが施され、調整の単位も判断しづらい製品が多いと言える。

高環では、239 H-6のように脚柱部が僅かに短くなり、坏部は底部の有段が消滅したものに変わっている。赤色系が一般的であるが、244 H-6は黒色系のもので珍しい。調整技法としては、埴と同様に最終的な仕上げがヘラ磨き調整ではなく、軽いナデあるいは回転ナデが施されているものが多く、調整の単位も判断しづらい製品が多い。

甕はまだしっかりした「く」の字口縁を呈し、球胴タイプである。調整技法としては、ハケ目調整後のヘラ磨き調整は僅かに施されるが、ヘラナデやヘラ削りで終了するなど不安定な状況と言える印象である。これは、今後大きく調整技法が「ハケ目調整+ヘラ磨き調整」から「ヘラ削り+ヘラナデ」へと画期を迎えることになるが、その移行段階での混在した状況と言えるかもしれない。

甗では小型製品が前段階のもの大きく変化はないと思われるが、甗形タイプは消滅し、口縁部に最大径をもち複合口縁を呈するものに変化するようである。239 H-14の複合口縁には指頭押捺による成形痕が顕著に観察され、ていねいに作られていることが理解できる。

また、254 Hからはまとめて須恵器が出土しており、6は須恵器坏身、7・8は甗であり、9はその器形から市内初の須恵器把手付埴になるであろう。7～9は陶器製品と思われ、TK 208 型式段階に比定できる。

3期（6世紀前葉）－240・253号住居跡

城山遺跡第34地点127 Hでは、この時期に大型化した有段環とまだ大型化しない初源段階の比企型環が共存することが確認され、有段環の大型化の時期が須恵器杯蓋のMT 15 型式段階の大型化に連動し、さほど時間差がなく、比企型環の大型化は一段階遅れて変化することが判明している（尾形・深井 1999）。

環は初源段階の比企型環が240 H-2で出土しており、3の埴タイプと5・6のような大型有段環が共存している。

高環では、長脚有段タイプは消滅し、253 H-2のように坏底部が丸味をもち、脚部も短脚タイプが主流となる。

この時期の甗には全形を知る良好な資料がないが、240 H-11は胴部中位に把手が付いている珍しいものである。通常、志木市における把手付の甗の出現は、7世紀前葉以降と考えられていたため、黒色系土器を含め北関東地方との関連性もたれるであろう。

甕はまだ「く」の字口縁が固持されているが、胴部に長胴化の兆しが見え始める。甗は小型・大型品すべてが複合口縁を呈するものである。

4期（6世紀中葉）－274号住居跡

環はすべての製品で大型化が顕現する時期である。274 Hからは、大型化した比企型環は出土してい

ない。有段環は1～3のような赤色系を主流に黒色系の大型有段環が共伴する。5は坏蓋模倣タイプ、6は坏身模倣タイプである。この時期には、放射状の暗文が施文される精巧な作りの黒色有段環、無彩系の小針型環が共伴するなど有段環のパラエティーが豊富な時期と言える。4・7のような深身の塊タイプはこの時期以降は消滅する。

高坏は減少するが、この時期のものは、長脚タイプではなく、坏底部が丸味をもち、口縁部が外反する短脚タイプである。

甕は14のように複合口縁のものが主流と思われるが、この時期には15のような口縁部の複合部がやや崩れたタイプが共伴する。

甕は10のような「く」の字口縁のものが僅かに残るが、12のような「コ」の字口縁や11のように「く」の字口縁が間延びし直立気味のものが主流と言える。

5期（6世紀末葉）－238号住居跡

志木市においては、この時期の住居跡は減少するが、市内で最も住居跡が多く検出されている城山遺跡でもこの現象は当てはまる。そのため、この時期の土器様相は明確に把握されているとは言えないが、おそらく「在地系土師器」（尾形 2005・2006）の出現の時期と言えるであろう。

坏は1・2・5・6が比企型坏であるが、この時期のものは2・5のような扁平タイプと前段階からの特徴を残すような体部に稜をもつ深身タイプが存在する。その他の坏としては、無彩のもので7・9は有段環、8は有稜環であり、これらは在地系土師器であろう。

高坏は3のような短脚タイプのものが存在するが、入間系土師器と考えられる。

甕は出土していないが、11の鉢や12・13の甕などの大型製品はすべて在地系土師器と呼ばれる製品に変化するものと考えられる。

6期（7世紀前葉）－234・242・249・252号住居跡

志木市では、この時期に大きく土器様相が変化する。すなわち、無彩系土師器を主体とする在地系土師器の顕現である。在地系土師器の器種構成は、坏・鉢・甕・甗が主要となり、無彩系を主体として考えられてきたが、小型製品の坏には予想以上に多くの黒色系の製品が含まれていることが判明している（尾形 2005）。赤色系の製品は明確に伴うかどうかまだ判明していない状況と言える。

在地系土師器の坏は基本的に口径13cmを基本とし、有段系と有稜系がある。有段系の製品はより流通範囲が広いものと考えられ、その分布は河川では志木市より下流の和光市や東京都板橋区に中心があり、有稜系は志木市・富士見市を中心に分布している状況であろう（尾形 2006）。

高坏は6世紀中葉以降にほぼ消滅するものと考えられる。この時期の高坏は赤色系の入間系土師器ではなく、在地系土師器の小型高坏である。252H-4は黒色系のものであるが、こうした小型高坏は在地系土師器の中で誕生した新たな器種であり、同時に祭祀形態の変化を意味するものと考えられる。

甕は煮炊き用の長甕と貯蔵用の丸甕に分化し、視覚的に変化を捉えることができる。この時期の長甕は口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径をもち、調整技法では口縁部直下のヘラ削りは「下→上」の縦方向を基本に施される。また、製品としての仕上がりは、最終仕上げとして、ヘラ削り後に再度ヘラナデあるいはスリップが施され、製品レベルでは他地域の製品に比べ、ていねいに仕上げられ、大変作りの良いものと評価できるであろう。

7期（7世紀中葉）－236・243・248・250・275号住居跡

志木市では、在地系土師器の最盛期で、すべての器種が在地系土師器と言っても過言ではない。ただ

し、小型製品の環では、比企型環や黒色系の有段環など一部の製品に搬入品が含まれている。

環は小型化が顕著になり、口径11～12cmのものが主流で、口径13cmのものは消滅する時期である。275H-1は比企型環が須恵器蓋環の影響により有段化したタイプであるが、無彩系の在地系土師器の2も法量そして器形でも1に類似し、変化の方向が同一であることが理解できる。236Hはこの時期の土器様相をよく示しており、環では比企型環がすべて口径12cm代で安定しており、さらに有段系が主体である。この有段系が主体ということは、この時期に須恵器の特徴である有段の影響を強く受けたことになるが、この時期での須恵器はTK207型式段階に相当し、すでに環蓋には有段は消滅していることから、土師器の有段の特徴をもって須恵器の影響があったと即断するのは危険があるかもしれない。土師器の有段の誕生には、最初は間違いなく須恵器の影響であったと言えるであろう。しかし、比企型環については、5世紀後葉に出現し、他の土師器が須恵器への憧憬の中で有段環あるいは模倣環などに变化した中においても一線を画していた実態があることは、7世紀中葉以降にただ須恵器の影響があったという判断では片付けられないものである。

甕は丸甕と長甕の分化が一層進み、236・250Hでも安定した状態で共存している。長甕については、器形の長胴化が進み、調整技法では、236H-15・16や250H-11のように口縁部直下のヘラ削りの方向が縦方向ではなく、斜方向に施されるものが目立つ。

(3) 平安時代の遺構・遺物について

第62地点全体で検出された平安時代の主な遺構は、住居跡3軒(235・241・247H)・土坑2基(635・636D)・ピット2本(7・8P)である。しかし今回の第62①～④地点の調査では、新たに検出された住居跡はなく、ピット2本のみの追加となる。そこで、前回のまとめで235・241・247Hの時期ならびに出土土器については考察したため、ここでは、今回の発見により特に重要となった241Hについてまとめてみることにする。

今回の地点で最も注目できる事項は、241Hから皇朝十二銭の1つである富壽神寶2枚と同時にその周辺から鉄鎌1点と土鏝1点がまとめて出土したことである。埼玉県内における富壽神寶の出土例については、上里町中堀遺跡10号住居跡(田中・末木 1997)・狭山市揚榎木遺跡74号住居跡(石塚・伊庭 1986)などからすでに5枚があり、今回の2枚を追加すると合計7枚という貴重な発見につながっている。なお、本地点出土の資料は、平成25年3月1日付けで、「城山遺跡241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点」として、志木市の指定文化財に指定され、大きな成果を上げている。

次に出土土器は、須恵器環4点、須恵器甕2点、土師器甕2点である。特に241Hの時期を9世紀後葉に比定した根拠については、1の須恵器環と5の土師器甕の特徴からで、1は鳩山編年(渡辺1990)のHBⅧ期(9世紀後葉)、5は根本編年(根本1999)のⅧ期(9世紀後半)に比定されることによるものである。

そのため、本来は富壽神寶の初鋳818年という年代が判明している資料と出土土器の特徴を比較することにより、今後の土器編年の基準と成り得るものと期待していたところであるが、半世紀以上の開きが生じてしまったことは今後の時期決定について慎重に対応する必要がある。

第2節 西原大塚遺跡第165・166地点

本地点からは、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒(560 Y)・溝跡1本(49 M)が検出された。ここでは、これらの遺構・遺物について、簡単にまとめてみることにする。

560 Y出土遺物としては、すべて土器の破片で、器種構成としては、高坏(1)・壺(2~4)・甕(5~8)である(第60図)。

まず、高坏であるが、1は脚部の小破片で、裾部が大きく外反することから、東海系の特徴をもつ。

壺の2~4は胴部上半であるが、文様が不明であるため、詳細は不明である。

甕は8の脚台部の出土から台付甕が残る段階のものであろう。5・6の口縁部からは、まず5の口唇部に刻みをもつ特徴と6の屈曲の弱い頸部であることから、弥生時代後期の特徴を示すものであろう。

次に49 Mの時期については、弥生時代後期から古墳時代前期の中で取り扱うことにした。560 Yと重複し、新旧関係では、本溝跡の方が新しいことが判明している。基本的な構造は、調査区内の全長13.5 m、上幅80~107 cm・下幅57~80 cm、確認面からの深さ4~15 cmで走向方位はN-60°-Eである。

出土遺物は壺の小破片2点である。1は幅広の複合口縁を呈し、複合部にはL R単節斜縄文を地文に2本の棒状貼付文が付けられている。

以上、560 Yについては、大きく弥生時代後期の特徴を示すものであるが、ここでは弥生時代後期末葉~古墳時代初頭と比定したい。また49 Mについては、新旧関係で560 Yを切ることで時期を積極的に比定するには出土遺物が乏しいが、ここでは弥生時代後期末葉~古墳時代前期と比定することにした。

第3節 西原大塚遺跡第171地点

本地点からは、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡1軒(561 Y)が検出されている。ここでは、561 Yについてまとめることにする。

本住居跡は、耕作のトレンチャーにより遺存状態が悪いが、住居の基本構造として、規模はおおよそ3.38 mの小型住居である。平面形は隅丸方形で、付属施設は住居中央やや北寄りに炉跡、南壁寄りには梯子穴と思われる小ピット、住居南東コーナーに貯蔵穴があり、東隅には祭壇状遺構と考えられる赤砂利層の範囲が確認できた。支柱穴は検出されなかったが、561 Yは本市での小型住居では典型的あるいはかなり基本構造を完備しているタイプのものと言える。

次に出土遺物については、非常に少なく、壺の小破片2点のみである(第66図)。特に1の文様はL R単節斜縄文の下段に2条の自縄結節が施文され、無文部は赤彩が施されている。この特徴は、東京湾沿岸を中心とするものと考えられるが、時間幅をもつため、時期の決定には直接結び付けるのは困難と言える。

以上から561 Y出土土器については、弥生時代後期末葉~古墳時代初頭の幅で考えることとし、時期の詳細設定は控えることにする。

[引用・参考文献]

- 石塚和則・伊底彰一 1986『狭山市埋蔵文化財調査報告書4』狭山市文化財報告12 埼玉県狭山市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・白崎智隆 2013『城山遺跡第76地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第52集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修 2011『志木市遺跡群19』志木市の文化財第45集 埼玉県志木市教育委員会
2012『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・坂上直嗣・青池紀子・鈴木伸哉 2011『城山遺跡第63地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第46集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・村上孝司・青池紀子・矢作健二・石岡智武 2012『城山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第49集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子 1999『志木市の遺跡群9』志木市の文化財第27集
- 尾形剛敏・深井恵子・青木 修 2005『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
2008a『志木市遺跡群16』志木市の文化財第38集 埼玉県志木市教育委員会
2008b『志木市遺跡群17』志木市の文化財第38集 埼玉県志木市教育委員会
2009『埋蔵文化財調査報告書4』志木市の文化財第40集 埼玉県志木市教育委員会
2013『城山遺跡第64地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第53集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・藤波啓容・鈴木 徹・中村真理 2008『城山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江 2010『中野遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第43集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏 1999『いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点』『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
2000『志木市における古墳時代の土師器の編年(1)』『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
2001『志木市における古墳時代の土師器の編年(2)』『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
2005『第4章 まとめ』『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集
2006『七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一例—』『埼玉考古Ⅱ』埼玉考古学会
- 後藤建一他 1989『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1991『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集 埼玉県志木市教育委員会
1997『志木市遺跡群Ⅴ』志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
- 田中広明・末木啓介 1997『中瀬遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団北書第190集
- 根本 靖 1999『所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅱ—土師器煮渾具の変遷について—』『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

[付 編]

自然科学分析

城山遺跡第62㊦地点から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

志木市柏町3丁目に位置する城山遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地し、古墳時代後期や平安時代を主体とする集落跡である。ここでは第62㊦地点で検出された古墳時代後期の竪穴住居跡出土の土器内から回収された炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は第62㊦地点275号住居跡出土の土器内(第46図3)に堆積した土壌から水洗によって回収された炭化物1袋である。遺構の時期は古墳時代後期(7世紀中葉)である。

土壌の回収と水洗は志木市教育委員会によって行われた。土壌は1.0mm目の篩を用いて水洗選別された。水洗量は不明である。抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は志木市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定の結果、草本植物のコムギ炭化種子1点が同定された(第30表)。

次に、産出した分類群の炭化種実の記載と図版を掲載し、同定の根拠とする。

(1) コムギ(パンコムギ) *Triticum aestivum* L. 炭化種子 イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい傾向がある。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる(Jacomet 2006)。また、コムギの場合、側面観で最も背の高い部分(幅の広い部分)が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているものはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ4.0mm、幅2.6mm、幅2.1mm。

4. 考察

第62㊦地点の古墳時代後期の275号住居跡から出土した土器内(第46図3)からは、栽培植物のコ

	時期	古墳時代後期(7世紀中葉)
	遺構名	275号住居跡
分類群	部位/土器No.	3
コムギ	炭化種子	1

第30表 275号住居跡から出土した炭化種実

ムギが 1 点得られた。産出した部位は食用となる種子であるため調理後の残渣の可能性があるが、出土した土器との関係は不明であった。

城山遺跡では、これまでに複数地点で炭化種実同定が行われ、コムギが得られた例としては、第 59 地点の古墳時代後期（7 世紀中葉）の竪穴住居跡である 167 号住居跡の覆土から、コムギのほか、イネやアワ、ブドウ属、ニワトコなどが得られている（佐々木・パンダリ 2011）。今回の同定の結果、新たに第 62 @地点の 275 号住居跡（7 世紀中葉）でもコムギが利用されていたことが判明した。水洗を行った土器内の土壌量はさほど多くないと推定されるため、今後、焼失住居跡の場合は床面全面や、焼失住居跡でない住居跡の場合は炭化種実が産出しやすいカマド内および周辺の土壌を水洗するなど、量的な解析をすることにより、同時期の利用植物の組成が明らかになると期待される。

[引用文献]

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. 2006 『Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition』
IPAS, Basel Univ.

佐々木由香・パンダリ スダルシャン 2011 「1. 城山遺跡から出土した炭化種実」『志木市遺跡群 19』志木市の文化財 45 集
埼玉県志木市教育委員会.

圖 版



1. 第62①地点調査区近景



2. 第62①地点表土剥ぎ風景



3. 第62③地点調査区近景



4. 第62③地点表土剥ぎ風景



5. 第62⑥地点調査区近景



6. 第62⑥地点表土剥ぎ風景



7. 第62⑦地点調査区近景



8. 第62⑦地点表土剥ぎ風景



1. 第62㉠地点調査区近景



2. 第62㉠地点表土剥ぎ風景



3. 第62㉠地点調査区近景



4. 第62㉠地点表土剥ぎ風景



5. 第62㉠地点調査区近景



6. 第62㉠地点表土剥ぎ風景



7. 第62㉡地点調査区近景



8. 第62㉡地点調査区整備風景



1. 9号炉穴 (⑨)



2. 10号炉穴 (⑩)



3. 697号土坑 (⑪)



4. 236号住居跡遺物出土状態 (⑦)



5. 236号住居跡 (⑧)



6. 236号住居跡 (⑨)



7. 238号住居跡遺物出土状態 (①)



8. 238号住居跡遺物出土状態 (②)



1. 238号住居跡白玉出土状態 (①)



2. 238号住居跡 (①)



3. 243号住居跡 (⑩)



4. 248号住居跡 (⑩)



5. 調査風景 (⑩)



6. 250号住居跡 (⑩)



7. 250号住居跡 (⑩)



8. 250号住居跡カマド (⑩)



1. 251号住居跡 (9)



2. 251号住居跡 (8)



3. 253号住居跡 (3)



4. 発掘調査風景 (10)



5. 254号住居跡遺物出土状態 (10)



6. 254号住居跡貯蔵穴 (10)



7. 254号住居跡 (11)



8. 254号住居跡 (10)



1. 274号住居跡遺物出土状態 (①)



2. 274号住居跡遺物出土状態 (②)



3. 274号住居跡遺物出土状態 (③)



4. 274号住居跡炭化材出土状態 (④)



5. 274号住居跡炭化材出土状態 (⑤)



6. 274号住居跡カマド遺物出土状態 (⑥)



7. 274号住居跡貯藏穴 (⑦)



8. 274号住居跡カマド掘り方 (⑧)



1. 274号住居跡 (⑩)



2. 274号住居跡 (⑩)



3. 275号住居跡遺物出土状態 (⑩)



4. 275号住居跡遺物出土状態 (⑩)



5. 275号住居跡遺物出土状態 (⑩)



6. 275号住居跡 (⑩)



7. 275号住居跡 (⑨)



8. 276号住居跡 (⑩)



1. 1号円形周溝墓 南から (⑩)



2. 1号円形周溝墓 北から (⑩)



3. 6号ピット (③)



4. 687号土坑 (⑥)



5. 688号土坑 (⑥)



6. 689号土坑・7号ピット (⑥)



7. 690号土坑 (③)



8. 691号土坑 (③)



1. 692号土坑 (③)



2. 693・694号土坑・49号沟迹 (⑦)



3. 695号土坑 (⑩)



4. 696号土坑 (⑩)



5. 811号土坑 (⑩)



6. 812号土坑 (①)



7. 646・813・647・814号土坑 (①)



8. 815号土坑 (⑧)



1. 816・817・818号土坑 (㊸)



2. 調査風景 (㊸)



3. 50号溝跡 東から (㊸)



4. 50号溝跡 南から (㊸)



5. 51号溝跡 西から (㊸)



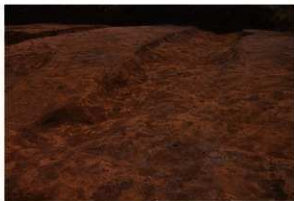
6. 51号溝跡 北から (㊸)



7. 51号溝跡 南から (㊸)



1. 52号溝跡 北から (⑥)



2. 52号溝跡 東から (⑥)



3. 調査風景 (③)



4. 253号住居跡付近ピット (③)



5. 調査区北側ピット (③)



6. 274号住居跡付近ピット (⑩)

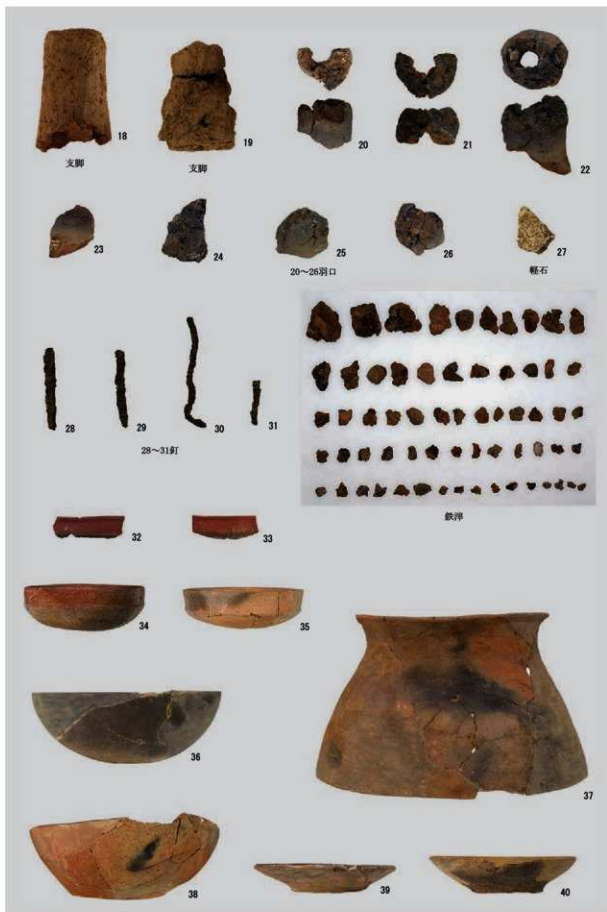


7. 調査区全景 (⑧)

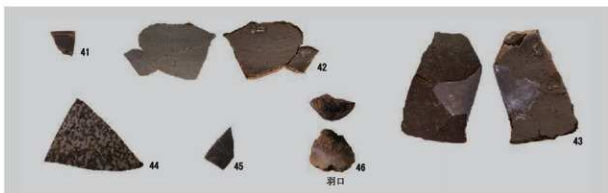


1. 9号炉穴出土遺物

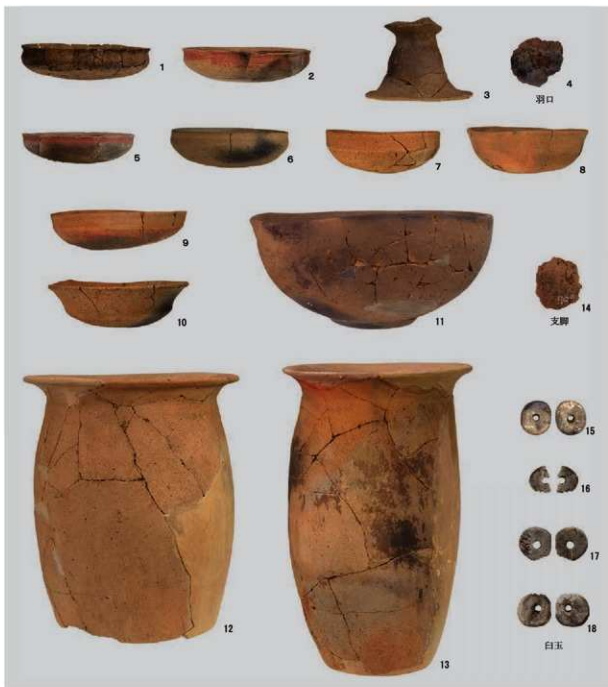
2. 236号住居跡出土遺物 1



236号住居跡出土遺物2



1. 236号住居跡出土遺物3



2. 238号住居跡出土遺物



243号住居跡出土遺物



1. 248号住居跡出土遺物



2. 250号住居跡出土遺物 1



250号住居跡出土遺物2



1. 250号住居跡出土遺物3



2. 251号住居跡出土遺物



1. 253号住居跡出土遺物



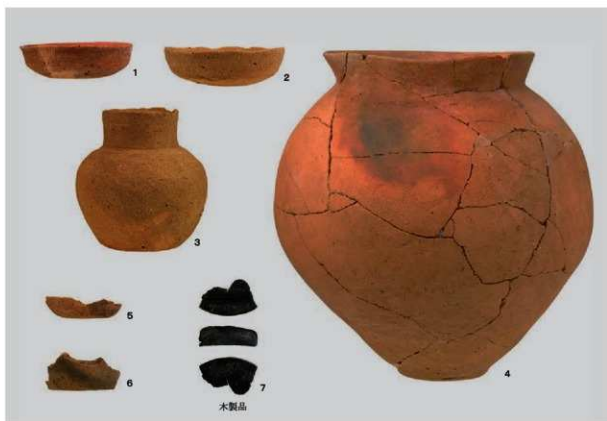
2. 254号住居跡出土遺物



3. 274号住居跡出土遺物1



274号住居跡出土遺物2



1. 275号住居跡出土遺物



2. 276号住居跡出土遺物



3. 1号円形溝墓出土遺物



4. ビット出土遺物



1. 土坑・溝跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物 1



1. 遺構外出土遺物2



2. 275号住居跡出土炭化種実



1. 調査区近景



2. 調査区整備風景



3. 560号住居跡



4. 560号住居跡炉跡A



5. 560号住居跡炉跡B



6. 49号溝跡遺物出土状態



7. 49号溝跡 西から



8. 49号溝跡 東から



1. 560号住居跡出土遺物



2. 49号溝跡出土遺物



3. 遺構外出土遺物



1. 表土剥ぎ風景



2. 561号住居跡



3. 561号住居跡



4. 561号住居跡貯蔵穴



5. 561号住居跡赤色砂利層検出状況



6. 561号住居跡炉跡



7. 561号住居跡P 1



8. 561号住居跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しきしいせきぐん 21							
書名	志木市遺跡群 21							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第58集							
著者氏名	尾形剛敏 大久保聡 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	平成26 (2014) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
城山遺跡 (第62① ～①地点)	志木市柏町 3丁目2663	11228	09-003	35° 49' 51"	139° 34' 14"	20090903 ～ 20101129	501.58 (1,177.25)	個人住宅建設 /分譲住宅建設
西原大塚遺跡 (第165地点)	志木市幸町 3丁目7486	11228	09-007	35° 49' 22"	139° 33' 49"	20100414 ～ 20100426	110.38 (146.00)	個人住宅建設
西原大塚遺跡 (第166地点)	志木市幸町 3丁目7487	11228	09-007	35° 49' 22"	139° 33' 49"	20100414 ～ 20100426	126.63 (166.00)	個人住宅建設
西原大塚遺跡 (第171地点)	志木市幸町 4丁目8137	11228	09-007	35° 49' 21"	139° 33' 47"	20101001 ～ 20101012	100.12	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
城山遺跡 (第62① ～①地点)	集落跡・ 城館跡	縄文時代 古墳時代後期 平安時代		住居跡 炉穴 土坑 住居跡 円形周溝墓 ピット 土坑 ピット	1軒 2基 1基 11軒 1基 1本 1基 2本	土器破片 土器 土師器・須恵器 土師器破片 土師器小破片 須恵器破片 土師器破片		今回の報告は城山遺跡第62地点の宅地部分が対象である。
西原大塚遺跡 (第165・166地点)	集落跡	弥生時代後期 ～古墳時代前期		住居跡 溝跡	3軒 1本	土器 土器		
西原大塚遺跡 (第171地点)	集落跡	弥生時代後期 ～古墳時代前期		住居跡	1軒	土器		
要 約								
<p>城山遺跡は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。今回報告する第62地点は、平成20・21年度に道路・駐車場部分を対象として発掘調査を実施した第62-1・2地点の宅地部分11棟分が対象地である。地点名の記述は、便宜上、宅地建設計画の1～11区画についてをそれぞれ第62地点①～⑪地点として取り扱った。以上、今回の第62地点①～⑪地点からは、縄文時代の炉穴2基・土坑1基、古墳時代後期の住居跡11軒・円形周溝墓1基、平安時代の土坑1基が検出された。なお、今回の報告では、前回報告を行った第62地点の道路・駐車場部分を含め、遺構の未調査部分を調査できた場合は、なるべく統合した内容にまとめている。</p> <p>西原大塚遺跡は、市内最大規模の遺跡で、旧石器時代～近世・近代にかけての複合遺跡である。今回報告の第165・166地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒・溝跡1本、第171地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒が検出された。</p>								

志木市の文化財 第58集

志木市遺跡群 21

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成26(2014)年3月31日
印 刷 株式会社 白 峰 社